

ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサル
カ爲退職ヲ命シタルトキ

第四條 官吏恩給法第五條第一項第四項第六條第十一條ハ退職料ニ適用ス

退職料等ノ支給上ニ關スル在職年數ノ算定ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 退職料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ退職料ヲ受クルノ權利ヲ失フモノ
トス

一 失職ニ該當スヘキ現職中ノ所爲確定シタルトキ

二 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

三 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

四 第二條第二第三條若クハ第七條ニ依リ退職料ヲ受クル者復タヒ其職務ニ堪フルニ
至ルコトアルモ仍府縣知事ヨリ指命セラル、所ノ教職ニ就カサルトキ又ハ第二條

第三ニ依リ退職料ヲ受クル者府縣知事ヨリ指命セラル、所ノ教職ニ就カサルトキ
但其給料ハ退職現時ノ給料ヨリ少額ナラス且年齢未タ六十歳ニ至ラサル場合ニ限

ル

五 府縣知事ノ許可ヲ經スシテ公務ニ就キタルトキ

退職料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其時間退職料ヲ受クルコトヲ得ス

一 公務ニ就キ退職現時ノ給料額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ

二 三箇年以上受領ヲ怠リタルトキ

三 公權ヲ停止セラレタルトキ

第六條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラ
レ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退職料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第七條 市町村立小學校ノ准教員ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第三條ニ該當
スル者ニ限り退職現時ノ給料四分ノ一ノ退職料ヲ終身給與ス

第八條 在職滿五年以上十一年未滿ニシテ退職シタル市町村立小學校正教員ハ退職現時
ノ給料二箇月分ニ當ル金員ヲ給シ其滿十一年以上十五年未滿ニシテ退職シタル者ハ給
料三箇月分ニ當ル金員ヲ給ス

第二條第三條又ハ第七條ニ依リ退職料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ
免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者又ハ前項ノ給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル
後三箇月内ニ之ヲ請求セサル者ハ前項ノ限ニ在ラス

自己ノ便宜ニ依リ本條第一項ノ給與ヲ受ケサル者他日市町村立小學校正教員ノ職ニ就
クトキハ前ノ在職年數ヲ以テ退職料等ノ給與上ニ關スル在職年數ニ算入スヘキモノト
ス但其給與ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇月内ニ之ヲ受ケサルコトヲ申立テサル者
ハ本文ノ限ニ在ラス

第九條 退職料ノ支給及第八條ノ給與ハ市町村長ノ證明ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス

第二類 第一章 扶助

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十條 市町村立小學校正教員左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

- 一 在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ
- 二 在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ
- 三 退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十一條 官吏遺族扶助法第四條第一項第二項第五條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戶籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ癱疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十二條 在職十五年未滿ノ市町村立小學校正教員在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職三年未滿ニシテ在職最終ノ給料一箇月分ニ當ル金員トシ三年以後滿一年毎ニ給料年額百分ノ二ニ當ル金員ヲ加フ

第十三條 扶助料及扶助金ノ支給並第八條及第十一條第二項ノ給與ハ市町村長ノ申牒ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス

第十四條 府縣ハ小學校教員恩給基金ヲ備フヘキモノトス

市町村ハ其市町村立小學校ニ在職スル正教員ノ給料額百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年其府縣ニ納ムヘキモノトス

市町村立小學校正教員ハ其給料額百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年其府縣ニ納ムヘキモノトス

本條第二項及第三項ノ納金ハ府縣小學校教員恩給基金ト爲スヘシ

恩給基金ハ其利子ヲ以テ退隱料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ニ充ツルノ外之ヲ支消スルコトヲ得サルモノトス

本條第二項及第三項ニ依リ各府縣ニ於テ收入シタル納金額四分ノ一ニ當ル金員ヲ收入年度ノ翌々年度毎ニ國庫ヨリ府縣ニ給與スルモノトス

退隱料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ハ恩給基金ノ利子及國庫ノ給與金其他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨シ不足アルトキハ府縣費ヲ以テ之ヲ補充スヘキモノトス

恩給基金ノ管理並退隱料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

恩給基金ノ管理並退隱料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル費用ハ總テ府縣ノ負擔トス

第十五條 此法律中第一條乃至第十三條ハ明治二十六年度ヨリ第十四條ハ明治二十五年

度ヨリ之ヲ施行ス

第十六條 府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

○巡查看守給助例

十五年七月十七日 太政官達第四十一號 警視廳府縣(東京府沖繩縣函館縣札幌縣根室縣ヲ除ク)

巡查看守給助例別紙ノ通相定候條各地方ニ於テ給助金額ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ經テ施行可致此旨相達候事

但實施ノ府縣ハ八年^一第三號達并九年^八第八十號達別表中免職歸國旅費ハ相廢候儀ト相心得ヘシ

別紙 巡查看守給助例

第一條 給助ハ退職給助、傷痕給助、死亡給助、療治料、祭祀料ノ五種トス

第二條 給助ヲ與ル者ハ左ノ如シ

- 一 退職給助 勤續巡查看守ニ看守ヨリ巡滿五年以上ニシテ退職スル者ニハ一時之ヲ給シ滿十年以上ニシテ退職スル者ニハ終身之ヲ給ス
- 二 傷痕給助 職務ノ爲メ負傷スル者ニ終身之ヲ給ス
- 三 死亡給助 職務ノ爲メ重傷死ニ至ル者及ヒ負傷後其傷痕ニ原シテ死亡スル者又ハ職務上傳染病ニ罹リ死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

四 療治料 職務ノ爲メ負傷シ若クハ傳染病ニ罹ル者ニ之ヲ給ス

五 祭祀料 奉職中死亡スル者ニ之ヲ給ス

第三條 退職給助ノ額

- 一 勤續滿五年ノ者ハ一時金貳拾圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿六年以上九年迄ハ一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス
- 二 勤續滿十年ノ者ハ年金貳拾五圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿十一年以上ハ一年毎ニ金五拾錢ヨリ少カラス壹圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

第四條 傷痕給助ノ額

- 一 一等傷 終身不具トナリ自用ヲ辨スル能ハサル者 八年金三拾圓ヨリ少カラス四拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 二 二等傷 終身不具トナリ自用ヲ辨シ得ル者 八年金貳拾圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第五條 死亡給助ノ額

- 一 寡婦又ハ相續ノ孤兒アル時ハ年金三拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス寡婦再嫁シ孤兒二十歳ニ至レハ廢止ス
- 但寡婦アレハ孤兒ニ給セス
- 二 寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ル者ナク祖父母又ハ二十歳未滿ノ兄弟姉妹ニシテ死

第二類 第一章 扶助

者ニ依リ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

三 相續者タル孤兒滿二十歳ニ至ルモ癡篤疾ナルトキハ年金ヲ廢止スルニ際シ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第六條 療治料ハ傷痍又ハ病症ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

第七條 祭祀料
一 奉職一年未滿ニシテ死亡スル者ハ一時金拾圓ヨリ少カラス拾五圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿一年以上一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

二 職務ノ爲メ死亡スル者ハ前項ノ外一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第八條 左ノ各項ニ該ル者ハ給助ヲ受ルヲ得ス
一 公權ヲ剝奪セラレタル者

二 懲罰ニヨリ免職セラレタル者
第九條 左ノ各項ニ該ル者ハ其時間給助ヲ停止ス

一 俸給ヲ受ルノ官職ニ就キタル者
二 公權ヲ停止セラレタル者
三 失踪シタル者

四 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者

○巡查看守給助條例施行前二年以上在職者退職ノ時慰勞金支給方
年七月十七日 大政官達第四十二號警視廳府縣東京府沖繩函館札幌根室四縣ヲ除ク 五十

巡查看守給助例施行ノ期ニ際シ現在職滿二年以上五年未滿ノ者引續キ五年未滿奉職ノ日ニシテ退職スルトキハ給助例施行ノ日ヲ限界トシ勤續年數ニ應シ滿年賜金ノ例ニ依リ當

時ノ月俸額ヲ以テ退職ノ際一時慰勞金ヲ支給スヘシ此旨相達候事
○巡查看守給助例第二條第一項勤續割註心得方
十五年十二月十五日 內務省達第七十八號警視

廳府縣(東京府沖繩函館札幌根室四縣ヲ除ク)
本年七月第四十一號公達巡查看守給助例第二條第一項勤續割註ノ趣ハ全ク一地方内轉任

スル者ニ限ル義ニ付此旨爲心得相達候事
○巡查看守給助例施行期限
十九年二月二十六日 內務省達甲第七號府縣(東京府及沖繩縣ヲ除ク)

明治十五年七月第四十一號公達巡查看守給助例ノ儀未タ施行セサル地方モ有之候處明治二十年度ヨリ施行スヘシ

○巡查看守給助例中年金支給方
二十年四月七日 內務省訓令第二十三號廳府縣集治監假留監

一年金ハ每年三月及九月ニ於テ其月ヨリ前六箇月六箇月ニ滿クサルモノハ現月數ヲ以テ計算ス分ヲ支給スヘシ
一年金ハ退職又ハ死亡又ハ傷痍ノ翌月ヨリ支給スヘシ

一年金ヲ受ケタル者本例第八條第一項及第九條ニ該當スルトキハ日割ヲ以テ支給スヘシ
一年金ヲ受ケタル者死亡又ハ本例第五條第一項後段ニ該當スルトキハ其月分全額ヲ支給
スヘシ

○人員減少等ニテ免職ノ者一時慰勞金支給方

十五年十二月十二日
太政官達第六十六號警視廳府縣

(東京府沖繩函館札幌
根室四縣ヲ除ク)

本年七月第四拾壹號ヲ以テ巡查看守給助例相違候處右實施ノ府縣ニ於テ人員減少等ニ因リ
免職スルコトアルトキ奉職五年未滿ノ者ハ免職當日迄ノ勤續年數ニ應シ滿年賜金ノ例ニ
據リ一時慰勞金トシテ支給スヘシ此旨相違候事

○一般人民ニシテ巡查同様ノ働ヲナシ死傷セシ者吊祭扶助料療治料支

十五年十二月十二日
太政官達第六十七號警視廳府縣(東京府沖繩函館札幌根室四縣ヲ除ク)

給方
一般人民ニシテ巡查同様ノ働ヲナシ死傷セシ者吊祭扶助料療治料支給方左ノ通相定候條此
旨相違候事

吊祭扶助療治料

一 吊祭料

重傷死ニ至ル者へ金三十拾圓ヲ給ス親族故舊ナキモノハ戸長役場ニ付シ便宜處分セシ

一 遺族扶助料

父母妻子若クハ死者ニ依リ從來生計ヲナセシモノへ金五十拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多
カラサル額ヲ給ス

一 傷痍扶助料

- 一 一等傷 終身不具トナリ自用
ヲ辨スル能ハサル者へ金六十拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 二 二等傷 終身不具トナルモ
自用ヲ辨シ得ル者へ金拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

一 療治料
傷痍ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

○警察及監獄雇員死傷者吊祭扶助療治料支給方

二十年九月七日
內務省訓令第四十二號府縣

集治監
假留監
警察及監獄備員ニシテ職務上死傷セシモノ吊祭扶助療治料ハ十五年第六十七號公達ニ照
準支給スヘシ

但警察備ハ警察費監獄備ハ監獄費ヨリ支辨スルモノトス

○官廳ノ諸工事ニ使役スル人夫死傷手當規則

八年四月九日
太政官第五十四號

官廳ノ諸工事ニ使役スル者其職事ノタメニ死傷候節ハ自今左ノ規則ニ照準シ處分可致此
旨相違候事

但本文手當金ノ儀院省使廳ハ定額金ノ内ヨリ府縣ハ別途請取方大藏省へ可申出事

(八年十一月十七日太政官達第九十七號及十四年
六月二十二日同第五十四號ヲ以テ本項中削除ス)

第二類 第一章 扶助

官役人夫死傷手當規則

第一條 凡ソ各廳ニ於テ工事ニ使役スル者死傷スル時ハ相當ノ手當ヲナスヘシ其傷痕ノ輕重ヲ分テ五等トス左ノ如シ

第一等 重傷死ニ至ル者

第二等 重傷死ニ至ラズト雖モ終身自用ヲ辨スル能ハサル者

第三等 自己ノ動作ヲ得ルト雖モ終身事業ヲ營ムコト能ハサル者

第四等 譬ヘ事業ヲ營ムコトヲ得ルト雖モ身體ヲ毀傷シテ舊ニ復スルコトヲ得サル者

第五等 身體ヲ毀傷スルト雖モ一時ノ治療ヲ以テ舊ニ復スルコトヲ得ル者

第二條 凡ソ死傷人アル時ハ其原由ト輕重トヲ檢察シ醫員ノ診斷證書ヲ審査シ表面ニ照シテ救助金ヲ與フヘシ

第三條 手當金ヲ分ツテ療養埋葬及ヒ遺族扶助ノ三種トス(十年七月十一日大政官通第五十二號ヲ以テ本條ヲ改正ス)

一 一等傷ニ罹リ死スル者ハ療養料埋葬料ヲ給ス遺族扶助料ハ戶主ニシテ家族ナキ者及ヒ戶主ニアラスシテ妻子ナキ者ハ給セス尤モ死者戶主ニアラス且妻子ナキ者ト雖モ其死者ニ依リ活計ヲ營ミ來リタル遺族(一戶籍内ニ在ルモノ)アレハ之ヲ給スヘシ

但即死シテ療治ニ掛ラサル者ヘハ療養料ヲ給セス且療養中全ク他病ノタメニ死スル者ヘハ扶助料ヲ給セス

一 二等二等四等傷ニ罹ル者ハ療養料扶助料ヲ給與スヘシ

一 五等傷ニ罹ル者ハ療養料ノミヲ給與スヘシ

第四條 傷痕ノ輕重ハ即時ニ確定シ難シト雖モ其實況ヲ見計ヒ即時ニ療養料ヲ給シ置キ治療ノ後醫員二名以上ノ診斷證書ト其容體トヲ審査シ相當ノ給與スヘシ

死傷手當表

	一等傷	二等傷	三等傷	四等傷	五等傷
扶助料	三十圓	二十圓	拾五圓	拾圓	圓
埋葬料	拾圓				
療養料	病ノ輕重ニヨリ適度ヲ量テ給ス	同	上	同	上

沿革要領

明治八年四月第四十八號達ヲ以テ陸軍武官傷痕扶助及死亡ノ者祭葬并家族扶助概則ヲ定ム○同年八月第四百四十八號達ヲ以テ海軍退隱令ヲ定ム●九年一月第八號達ヲ以テ八年第四十八號達中ヲ改正ス○同年十月第九十九號達ヲ以テ陸軍武官恩給令罷役律并恤金令及將官退職令ヲ定メ前諸令ヲ廢ス●十三年四月第廿六號達ヲ以テ陸軍恩給令第七十六條恩給計算書ハ自今會計檢査院ニ付セシム●十六年五月第三十七號達ヲ以テ陸軍恩給令ヲ改正シ陸軍罷役律并恤金令ヲ廢ス○同年九月第三十八號達ヲ以テ海軍恩給令ヲ定メ海軍退隱令ヲ廢ス●十七年一月第一號達ヲ以テ官吏恩給令ヲ定ム○同年同月第四號達ヲ以テ陸海軍將官同等官軍人及武官ヨリ文官兼任者恩給特別ヲ定ム○同年二月第十五號達ヲ以テ十三年第廿六號達ヲ廢ス○同年四月第三十七號達ヲ以テ陸軍恩給令中ヲ更正ス○同月第三十八號達ヲ

以テ海軍恩給令中ヲ更正ス○同年六月第六十號達ヲ以テ陸軍恩給令中ヲ更正ス○同年九月第七十六號達ヲ以テ海軍恩給令第三條第三十二條中ヲ改正ス○十八年一月第四號達ヲ以テ更ニ陸軍恩給令中ヲ更正ス○同月第五號達ヲ以テ海軍恩給令中改正追加ス○同年三月第十五號達ヲ以テ官吏恩給令附則ヲ定ム○同月第十六號達ヲ以テ官吏恩給令附則第五條傷疾疾病等ノ例等差ヲ定ム○同年十二月第六十四號達ヲ以テ海軍恩給令第三條中ヲ改正ス○二十年五月宮内省達第二號ヲ以テ宮内省官吏恩給例ヲ定ム○同月閣令第十三號ヲ以テ宮内省ト他ノ官廳ト交互轉スル官吏ノ恩給年數計算方ヲ定ム○同年九月勅令第四十四號ヲ以テ十七年第四號達第三項以下ヲ改正ス○二十一年七月閣令第九號ヲ以テ文武官恩給扶助料ヲ受ケタル者權利消絶支給停止ノ時取扱方ヲ達ス○同月閣令第十號ヲ以テ官吏恩給令及同附則中ヲ改正削除ス○二十二年十二月勅令第三百三十三號ヲ以テ傷痍ヲ受ケ文官ニ任シタル武官ノ恩給支給方ヲ定ム○同月宮内省達第二十四號ヲ以テ宮内省准官吏恩給例ヲ定ム○同月宮内省達第二十五號ヲ以テ宮内省官吏恩給例第六條第七條ヲ改正ス○二十三年六月法律第四十三號ヲ以テ官吏恩給法ヲ制定ス○同月法律第四十四號ヲ以テ官吏遺族扶助法ヲ定ム○同月法律第四十五號ヲ以テ軍人恩給法ヲ定ム○同月勅令第九十八號ヲ以テ文官判任以上退職賜金ヲ公布ス○同年七月勅令第百二十五號ヲ以テ官吏遺族扶助法納入金規則ヲ定ム○同年八月勅令第百六十二號ヲ以テ三等郵便局及電信局長手當金並退官死亡賜金ヲ定ム○同月宮内省達第十六號ヲ以テ宮内省官吏准官吏恩給例同遺族扶助例ヲ定ム○同年十月法律第九十號ヲ以テ市町村立小學校退職料及遺族扶助料法ヲ公布ス○同月法律第九十一號ヲ以テ公立學校職員退職料及遺族扶助法ヲ頒布ス

○内國旅費規則 十九年六月九日 閣令第十四號

内國旅費規則ヲ定ムルコト左ノ如シ但明治九年太政官第六十四號達旅費定則中内國ノ部ハ廢止ス

内國旅費規則

- 第一條 内國旅費ハ官吏公務ニ依リ本邦内ヲ旅行スルトキ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス
- 第二條 内國旅費ハ分テ四等トシ別表ノ定ムル所ニ從ヒ順路ノ路程ニ依リ瀛車賃瀛船賃車馬賃及日當ヲ支給ス(二十四年八月六日勅令第百六十六號ヲ以テ本條ヲ改正ス)
- 第三條 瀛車賃ハ瀛車旅行、瀛船賃ハ瀛船旅行、車馬賃ハ陸路旅行、日當ハ休泊料及其他ノ諸費ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス
- 第四條 官有ノ舟車馬及各官廳ニ於テ借入備入タル舟車馬等ニテ旅行シ若クハ旅行ノ性質ニ依リ特ニ舟車馬等ノ實費拂ヲ許可シタルトキハ本令ノ瀛車賃瀛船賃及車馬賃ヲ支給セズ
- 第五條 瀛車賃ハ哩數、瀛船賃ハ海里數、車馬賃ハ里數、日當ハ日數ニ應シ之ヲ支給スヘシ
- 外國旅費ノ日當ヲ給スルトキハ本條ノ日當ヲ支給セズ
- 第六條 〔赴任又ハ管外旅行ノ爲メ其管内ヲ通過スルトキハ其路程ハ管外ニ準シ又管内巡回ノ際其便宜ニ依リ管外ヲ通過スルトキハ其路程ハ管内ニ準スヘシ〕(二十四年八月六日勅令第百六十六號ヲ以テ本條ヲ削除ス)
- 第七條 日當ハ陸路六里未滿、瀛車十哩未滿及瀛船十海里未滿ノ旅行ニハ支給セサルモトス但公務ノ都合ニ依リ宿泊ヲ要スルトキハ宿泊ノ數ニ應シテ日當ヲ支給スヘシ

- 第八條 瀛車賃瀛船賃及車馬賃ハ其種類毎ニ經過セシ路程ノ總數ヲ合算シテ之ヲ支給スヘシ但其一位未滿ノ端數ハ計算セサルモノトス
- 第九條 旅行ノ兩會計年度ニ跨ルトキハ各年度毎ニ之ヲ區別シ旅費ヲ計算スヘシ但瀛車賃及瀛船賃ハ會計年度ニ係ハラヌ瀛車瀛船ノ到達地ニ著シタル日ヲ以テ之ヲ區別シテ計算スヘシ
- 第十條 檢田測量及土木工事等ノ爲メ現場ヲ巡視スルトキハ車馬賃ヲ給セス日當額ニ三割ヲ増給スヘシ
- 第十一條 赴任旅費ハ舊任地ヨリ新任地ニ至ルマテ本官相當ノ車馬賃瀛車賃若クハ瀛船賃ノ二倍ヲ支給スヘシ
- 第十二條 廢官若クハ退官ノ際事務引繼殘務取調其他公務ノ爲メ旅行セシムルトキハ前官相當ノ旅費ヲ支給スヘシ
- 第十三條 新ニ任用スル爲メ召喚スルモノハ其新任官相當ノ旅費ヲ支給スヘシ
- 第十四條 旅行中歸省其他私事ノ爲メ許可ヲ得テ迂路ヲ通過スルトキハ順路ノ路程ニ應シ旅費ヲ支給スヘシ
- 第十五條 旅行中廢官死亡又ハ諭旨退官シタルモノハ前官相當ヲ以テ舊任地マテノ旅費ヲ支給スヘシ
- 第十六條 前二條ノ場合ニ於テ日當ヲ支給スル爲メ其日數ヲ計算スルハ瀛車旅行ハ一日ニ

- 百哩詰、瀛船旅行ハ一日百海里詰陸路旅行ハ一日十二里詰トス但距離接近シテ數種ノ旅行ニ跨ルトキハ各其路程十二分ノ一ヲ以テ一時間ノ行程トシ一日ノ旅行時間ハ十二時間トシ其日數ヲ計算スヘシ
- 第十七條 各省大臣ハ(大藏大臣ト協議シ)平常旅行ヲ要スル官吏ニ對シ特ニ其旅費額ヲ定メ月額ヲ以テ之ヲ支給スルコトヲ得(二十四年八月六日勅令第六十)
(六號ヲ以テ括弧ノ内ヲ別除ス)
- 第十八條 各省大臣ハ(大藏大臣ト協議シ)定額ノ旅費ヲ減少スルコトヲ得(同)
(二十年六月二十三日閣令第十七號ヲ以テ別除ス)
- 第十九條 陸海軍武官文官及警察官ノ旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シ別ニ之ヲ定ムヘシ(二十年三月二十一日閣令第六號ヲ以テ(武官)ノ下(文官)ノ二字ヲ加フ)
- 第二十一條 神官及雇員其他本令ニ明文ナキモノ、旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

附 則 (二十四年八月六日勅令第六十六號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

別表 (二十四年八月六日勅令第六十六號ヲ以テ本表ヲ改正ス)

旅 費 額	
等 級	汽 車 賃 每 一 哩
	汽 船 賃 每 一 海 里
	車 馬 賃 每 一 里
	日 當 每 一 日

第二類 第一章 旅費

七百七十七

一 等	親任官	八	錢	十	錢	二十八	錢	四	圓
二 等	勅任官	七	錢	八	錢	二十	錢	二	圓五十
三 等	奏任官	六	錢	六	錢	十五	錢	一	圓六十
四 等	判任官	四	錢	五	錢	十	錢	七	十

一 強雨積雪及道路險惡ノ爲メ定額ノ車馬賃ニテ支辨シ難キ場合ハ車馬賃ノ五割以内ヲ増給スルコトヲ得

一 北海道廳管轄内ハ毎年十一月ヨリ翌年二月マテ五箇月間車馬賃ニ限り定額ノ二倍以内ヲ増給スルコトヲ得

○内國旅費規則第四條官船ニ乗組出張ノ者食卓料支給方二十二年四月一日

閣令第十四號各官廳

明治十九年六月閣令第十四號内國旅費規則第四條ニ據リ官船若クハ各廳ニ於テ借入傭入ノ船舶ニ乗込出張スル場合ニ於テ官ヨリ賄ヲナサハルトキハ左ノ食卓料ヲ支給ス

- 親任官 一日 金壹圓七拾錢
- 勅任官 一日 金壹圓五拾錢
- 奏任官 一日 金壹圓貳拾錢
- 判任官 一日 金九拾錢

○地方官内國旅費支給心得方十九年六月十二日 大藏省訓令第二十三號 北海道廳府縣

閣令第十四號ヲ以テ内國旅費規則ヲ定メラレタルニ付左ノ通心得ヘシ

- 一 府縣大少書記官ハ三等旅費收稅長ハ四等旅費廳官判任御用掛ハ月俸四十圓以上五等旅費月俸四十圓未満六等旅費ヲ給スヘシ
- 一 北海道廳長官府知事縣令ハ旅行ヲ命スルトキハ豫メ事務ノ便宜路程ノ近便等ヲ量リ經過ノ路筋旅行日數ヲ定ムヘシ
- 一 海灣河湖等ノ海里ヲ以テ路程ヲ算セサル場合ハ里數ニ應シテ車馬賃ノ額ヲ支給スヘシ
- 一 非常急行上司隨行等ノ如キ場合ニ於テ定額ノ車馬賃ヲ以テ支辨シ難キト見認ルトキハ北海道廳長官府知事縣令ノ見込ヲ以テ隨時實費拂ヲ許可スヘシ
- 一 海里ノ距離ハ明治五年第三百三十號布告ニ據ルヘシ
- 一 赴任旅費ハ在官者ニシテ在勤地ヲ轉シタル時ニ限り之ヲ支給スヘシ
- 一 新任ニ任用ノ者ハ在勤地マテ規則第十三條ノ旅費ヲ支給スヘシ
- 一 兼官者ハ兼官ノ用務ニ據リ旅行スルトキハ兼官相當ノ旅費ヲ給シ本官兼官ノ用務ヲ兼ルトキハ本官相當ノ旅費ヲ給スヘシ

但兼官無給ナルトキ其旅費額ハ本官ノ給額ニ依ル

○内國旅費支給心得方十九年六月二十六日 大藏省訓令第二十八號 北海道廳府縣

閣令第十四號ヲ以テ定メラレタル旅費支給方左ノ通心得ヘシ

- 一 北海道廳集治監典獄ハ内國旅費規則四等旅費ヲ給ス

(二十四年三月二十日大藏省訓令第二十一號ニ依リ本項並ニ表共刪除ス)

一 北海道廳府縣ノ判任官并ニ準判任官新官制ニ據リ官等ヲ定メサルモノハ屬官御用掛ノ外ト雖總テ當省訓令第二十三號第一項ニ據リテ旅費ヲ給ス但地方稅支辨ノ官吏ト雖國庫ヨリ旅費ヲ給スルトキ亦同シ

一支給上新舊旅費規則相跨リタル場合ニ於テハ新規則施行期日後直ニ到着セシ御用地ヲ以テ打切り又巡廻中ノ者ハ該期日ヲ押へ新舊支給方ヲ區分スヘシ

○帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則 二十三年十月二十三日勅令第二百六十三號

朕帝國會議議長副議長議員歲費及旅費支給規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二百六十三號

帝國會議議長副議長議員歲費及旅費支給規則

第一條 帝國會議議長副議長及議員ノ歲費ハ毎年七月ヨリ翌年六月ニ至ル十二箇月ヲ以テ一歲トシ計算ス

第二條 議長副議長及議員ノ歲費ハ其ノ前六箇月分ヲ帝國議會通常會開會ノ後三十日以内ニ其ノ後六箇月分ヲ閉會ノ後七日以内ニ支給ス

第三條 議長副議長ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス

議長副議長ニ勅任セラレタル議員ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル前月分マテ支給ス

第四條 貴族院勅任議員ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス但シ多額納稅者ノ互選セラレタル者ハ其ノ互選セラレタル當月分ヨリ支給ス(二十四年八月二十日勅令第百七十九號ヲ以テ但書ヲ刪除ス)

第五條 議長副議長及議員退職辭職除名ノ場合ニ於テハ其ノ當月分マテヲ支給ス

第六條 衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ其ノ議長副議長及議員ノ歲費ハ解散ヲ命セラレタル當月分マテヲ支給ス

第七條 衆議院解散ヲ命セラレタル後選舉セラレタル議員及補缺議員ノ歲費ハ其ノ選舉セラレタル當月分ヨリ支給ス

第八條 衆議院ノ議員貴族院ノ議員トナリタルトキ其ノ他如何ナル場合ヲ問ハス歲費ハ同一人ニ對シ重複支給セズ

第九條 官吏ニシテ議員タル者官吏ヲ罷メタルトキハ其ノ當月分ヨリ議員ニシテ官吏ニ任セラレタル者仍議員タルトキハ其ノ當月分マテヲ支給ス

第十條 議長副議長及議員ノ旅費ハ別表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス官吏ニシテ議員タル者亦同シ

上京旅費ハ歲費ノ前半額ト歸郷旅費ハ歲費ノ後半額ト同時ニ之ヲ支給ス

第十一條 旅費ハ當選區ノ何地ニ在ルヲ問ハス其ノ住居地ヨリ直路ノ里程ヲ計算シテ之ヲ支給ス

第十二條 議院ヲ距ルニ里以内ノ地ニ住居スル者ハ何地ノ議員タルヲ問ハス旅費ヲ支給セズ

第二類 第一章 旅費

七百八十一

第十三條 汽車旅行ハ一日二百哩詰汽船旅行ハ一日百海里詰陸路旅行ハ一日十二里詰ノ割合ヲ以テ直路ノ行程ニ應シ日當ヲ支給ス但シ一日ノ行程ニ滿タサル端數ハ切捨トス
第十四條 召集ニ應セサル議員ニハ事故ノ如何ヲ問ハス旅費ヲ支給セス

旅 費 表

汽 車	一哩ニ付	汽 船	一海里ニ付	車 馬	一里ニ付	日 當
六 錢	五 厘 七	錢 十	八	錢 二		圓

(二十四年八月二十日勅令第百七十九號ヲ以テ本表ヲ改正ス)

○租稅検査員旅費支給方

二十二年四月十六日 大藏省訓令第二十九號

明治十九年^八大藏省訓令第二十六號租稅検査員旅費支給方左ノ通改定シ本年五月一日ヨリ施行ス

- 一 租稅検査員受持検査區内ノ巡回旅費ハ月額金十圓ヲ支給スヘシ其巡回日數一箇月ニ滿タサル者ハ月額三十分一ノ割合ヲ以テ其日數ニ應シ支給スヘシ (二十三年四月二十二日大藏省訓令第六十六號ヲ以テ本項中改正ス)
- 一 府縣廳下検査區内ノ旅費月額ハ實地ノ狀況ニ依リ大藏大臣ノ認可ヲ經テ適宜減額支給スヘシ
- 一 府縣廳下外ノ検査區ト雖モ廳下所屬検査區ト其狀況ヲ同フスル地方ハ前項ニ依リ適宜

減額支給スヘシ (二十三年四月二十二日大藏省訓令第六十六號ヲ以テ追加ス)

○内國稅徵收費支辨旅費支給方

二十四年三月二十日 大藏省訓令第二十一號 府縣

内國稅徵收費支辨旅費支給方左ノ通相定メ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス
但明治十九年^六當省訓令第二十八號第二項及明治二十三年^{十一}訓令第四百四十七號本年^一月訓令第六號ハ本訓令施行ノ日ヨリ相廢ス

- 一 月額ヲ以テ支給スヘキ旅費ノ外總テ内國旅費規則ニ據リ支給スヘシ (二十四年八月十二日號ヲ以テ本項ヲ改正シ同月十六日ヨリ施行スヘキヲ命ス)
- 一 土地検査員所轄内ノ巡回旅費ハ月額金十五圓ヲ支給スヘシ
- 一 間稅検査員所轄内ノ巡回旅費ハ月額金十二圓ヲ支給スヘシ
- 一 土地及間稅ノ検査員其分署所在地市町村内ノ巡回ハ旅費ヲ給セス
- 一 分署所在地市町村ニ接續スル町村若クハ其町村ノ一部^{大小字等ヲ總稱ス}ニシテ分署所在地市町村ト別ニ區分ヲ要セサルモノハ分署所在地市町村ニ準スルコトヲ得但此場合ニ於テハ府縣知事ニ於テ其町村若クハ部落ヲ定メ届出ヘシ (二十四年九月十一日大藏省訓令第七十二號ヲ以テ本項ヲ改正ス)
- 一 土地及間稅ノ検査員巡回日數一箇月ニ滿タサルモノハ月額三十分一ノ割合ヲ以テ其日數ニ應シ支給スヘシ

一 内國旅費規則ノ定額ノ旅費又ハ月額ノ旅費ヲ減少セントスルトキ若クハ別ニ月額旅費ヲ設ケントスルトキハ府縣知事ニ於テ適宜支給額ヲ定メ其支給額及施行期日ヲ届出ヘ

シ(二十四年九月十一日大藏省訓令
第七十二號ヲ以テ本項ヲ改正ス)

一 雇員ノ旅費ハ左表金額以內ヲ以テ府縣知事ニ於テ適宜之ヲ定メ其支給額及施行期日ヲ
届出ヘシ但支給方ハ第一項及第六項ニ準スヘシ(同上)

汽車	貨	每	一	哩	汽	船	貨	每	一	海	里	車	馬	貨	每	一	里	日	當	每	一	日	月	額
三	錢	四	錢	八	錢	五	十	錢	十	二	圓													

○土地検査ノ爲メ出張スル收税屬ノ旅費支給方

二十二年六月二十九日
大藏省訓令第四十八號府縣(沖

繩縣ヲ除ク)
土地検査ノ爲メ出張スル收税屬ノ旅費ハ本年七月一日以降月額ヲ廢シ内國旅費規則ニ依

リ支給スヘシ

○林区署管内旅費規則

二十三年二月二十五日
農商務省訓令第十號大林區署

林区署管内旅費規則左ノ通改正シ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

大林區署管内旅費規則

第一條 林区署管内旅費ハ林区署員管内旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ左表甲號ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス

第二條 一日ノ内普通旅行ト現場巡視ト交渉スル場合ニ於テ現場巡視外ノ旅行陸路ハ六里以上汽車ハ十哩以上汽船ハ十海哩以上アルトキハ之ニ應シテ並日當ト車馬賃及汽車

汽船賃ヲ給シ巡視日當ヲ支給セス

第三條 事業場詰切中ハ左表乙號ノ定ムル所ノ日當ノミヲ支給ス

第四條 大林區署員官林被害事件ニ由リ管外ニ派出シタルトキハ旅費ハ管内額ヲ支給ス

但被害事件ノ爲メ裁判所ノ召喚ニ應シ又ハ大林區署長ノ命令ニ仍リ派出シタルトキハ此限ニアラス

第五條 小林區署員ニハ部内通常旅行一切ノ費用ニ充ツル爲メ左表乙號定ムル所ノ月額旅費ヲ支給ス

但月額旅費ハ管轄區域ノ廣狹事務ノ繁閑等ヲ量リ本表定ムル所ノ等級内ニ於テ小林區署ノ等級ヲ定メ其等級ニ應シテ支給ス

第六條 小林區署員官林被害事件ニ依リ裁判所ノ召喚ニ應シ又ハ大林區署長ノ命令ニヨリ管外又ハ部外ヘ派出スルトキハ普通旅費(管外ハ管外額ヲ支給ス)

第七條 小林區署員常務外ノ事務ニ從事シタルトキハ部内ト雖モ普通旅費ヲ支給ス

第八條 小林區署員新任轉勤(在勤廳ノ變更ヲ云)非職廢官及死亡ノトキ當月分ノ月額旅費ハ上下半月ノ區分ヲ以テ其全額又ハ半額ヲ支給ス(二十三年十月六日農商務省訓令第五十四號ヲ以テ廢官ノ下退官ノ二字ヲ追加ス)

第九條 小林區署員一箇月中十日以上續テ常務ニ從事セサルトキ又ハ一箇月中十日以上普通旅費ノ支給ヲ受ケタルトキハ當月分ノ月額旅費ハ半額ヲ支給ス

第二類 第一章 旅費

但一箇月中二十日以上續テ常務ニ從事セサルトキ又ハ一箇月中二十日以上普通旅費
ノ支給ヲ受ケタルトキハ當月分ノ月額旅費ハ支給セズ

第十條 甲小林區署在勤者乙小林區署ヲ兼務シ兼務地ニ旅行スルトキ其往復甲署ヨリ乙署
迄及シ署御用濟
ノ地ヨリ甲署迄旅費ハ普通旅費ヲ支給ス

〔但月額旅費ハ重複ニ支給セズ〕(二十三年六月十七日農商務省訓令
第三十一號ヲ以テ但書ヲ削除ス)

第十一條 甲小林區署在勤者乙小林區署ヲ兼務スルトキノ月額旅費ハ其多キ方ヲ支給ス
(同上ヲ以テ本
條ヲ追加ス)

第十二條 本規則ニ掲載ナキモノハ一般ノ定則ニ據ルヘシ(同上ヲ以テ第十一條
ヲ第十二條ニ改ム)

附則

一 派出所所在勤員ノ旅費ハ小林區署員ニ準シテ支給ス

但月額旅費ハ左ノ等級ニ依ルヘシ

一等 三圓五拾錢 二等 三圓 三等 貳圓五拾錢

一 小林區署在勤ト派出所所在勤トヲ兼務スルトキハ月額旅費ハ多キ方ヲ支給ス

甲號表 (二十四年八月十五日農商務省訓令第三十四號ヲ以テ
本表ヲ改正シ二十四年八月十六日ヨリ施行セシム)

等	級	汽	車	價	汽	船	價	一	海	里	每	二	價	一	車	馬	價	一	日	每	二	當	
一	等	奏	任	官	金	五	錢	金	五	錢	金	拾	貳	錢	金	壹	圓						
二	等	判	任	官	金	參	錢	金	參	錢	金	八	錢	金	五	拾	錢						

三	等	雇	員	金	貳	錢	金	貳	錢	金	七	錢	金	四	拾	錢							
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	--	--	--	--	--	--

乙號表

等	判	任	官	以	下	級	月	額	官	行	事	業	所	詰	日	當
一	等	金	三	圓												
二	等	金	貳	圓	五	拾	錢	金	拾							
三	等	金	貳	圓												

○官林巡邏旅費規則

十九年七月二十六日
農商務省訓令第十一號府縣(大林區署設置アル府縣及沖繩縣ヲ除ク)

明治十三年七月内務省丙第五十四號達中旅費ニ關スル事項ヲ廢シ更ニ左ノ通り相定メ本年
八月一日ヨリ施行ス

雇及官林巡邏旅費規則

- 第一條 官林保護費ヲ以テ支給スル雇及官林巡邏旅費ハ左表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス
- 第二條 官林巡邏擔當官林ヲ巡視スルハ其常務ナルヲ以テ旅費ヲ給セズ殊更ニ出張申付
及官林被害事件ニ付地方廳又ハ警察署等へ出張スル時ニ限り旅費ヲ支給スルモノトス
- 第三條 前條ノ外支給方法ハ内國旅費規則ニ據ル

別表 (二十三年五月訓令第二十五號ヲ以テ更
正シ明治二十三年五月一日ヨリ施行ス)

職	車	價	汽	船	價	管	外	車	馬	價	管	内	車	馬	價	管	外	日	當	管	内	日	當	
名	車	價	汽	船	價	管	外	車	馬	價	管	内	車	馬	價	管	外	日	當	管	内	日	當	
一	哩	每	二	一	海	里	每	二	一	里	每	二	一	里	每	二	一	日	每	二	一	日	每	二

第二類 第一章 旅費

官林巡邏 金貳錢 金貳錢 金七錢 金四錢 金五拾錢 金三拾錢

七百八十八

○市町村吏國庫支辨ノ用務ニ付旅行ノトキ内國旅費支給方二十三年四月十四日

内務省訓令第十八號府縣 市町村吏ヲシテ國庫支辨ノ用務ニ付旅行セシムルトキハ明治十九年本省令第十一號警察

官吏其他内國旅費概則甲號表面ノ旅費ヲ同年閣令第十四號内國旅費規則ニ據リ支給スヘシ

○農商務省所管事項ニ付試驗傳習等ノ爲メ地方廳又ハ當業者ノ請求

ニ應シ技術官派遣ノ節旅費日當負擔方二十四年四月十八日農商務省告示第四號

當省所管ニ關スル事項ニ就キ各種ノ試驗傳習其他ノ必要ニ由リ地方廳若クハ當業者ノ請求ニ應シ當省ノ技術官ヲ派遣スルトキハ其官廳若クハ當業者ニ於テ該官相當ノ旅費及日當ヲ負擔スヘシ

○警察官吏其他内國旅費概則十九年六月二十六日內務省令第十一號

警察官吏司獄官吏神官及等外吏雇員其他内國旅費概則左ノ通相定ム但來七月一日ヨリ施行スヘシ

警察官吏其他内國旅費概則 第一條 警視警部長警部警部補ノ旅費ハ閣令第十四號内國旅費規則ニ據リ支給スヘシ但

警部長ハ四等旅費府縣ノ警部月俸四拾圓以上ハ五等旅費月俸四拾圓未滿及警部補ハ六等旅費ヲ支給スルモノトス

第二條 警視及警部警部補ノ持区内ヲ巡廻スルトキハ旅費ヲ給セス一切ノ費用トシテ日當ヲ支給スヘシ但其給與方ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

警視日當 金壹圓貳拾錢
警部日當 金八拾錢

第一項 十二里以上ノ巡廻ハ其日數ニ應シ日當ヲ支給スヘシ

第二項 六里以上十二里未滿ノ巡廻ハ其日數ニ應シ日當半額ヲ支給スヘシ

第三項 六里以上ニ涉ル巡廻中滞在スルトキハ其滞在ノ日數ニ應シ日當ノ半額ヲ支給スヘシ

第四項 六里未滿ノ巡廻ハ日當ヲ給セス但宿泊ヲ要スルトキハ其泊數ニ應シ日當ノ半額ヲ支給スヘシ

第五項 官有ノ舟車馬及各官廳ニ於テ借入傭入タル舟車馬等ニテ派出シ又ハ特ニ舟車馬等ノ實費拂フ許可シタルトキハ日數ニ應シ日當ノ半額ヲ支給スヘシ但里程六里未滿ノトキハ第四項ニ依ル

第六項 水上警察署ノ区内ハ里數ニ拘ハラズ一泊毎ニ日當ノ半額ヲ支給スヘシ
第三條 巡查ノ旅費ハ左ノ各項ニ依ルヘシ
第二類 第一章 旅費

七百八十九

- 第一項 巡查ハ甲號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ
- 第二項 召募旅費及免職歸國旅費給助例施行ノ期迄ハ一里毎ニ金五錢ヲ支給スヘシ但里程三里未滿ハ給與セス
- 第三項 免職歸國旅費ハ奉職期限ニ至ラサル者ニハ支給セスト雖モ職務上重傷ヲ受ケ又ハ官ノ都合ニヨリ免職スルモノハ支給スヘシ
- 第四項 職務上ニ死シ及奉職中病死スル者ハ奉職期限ニ拘ハラヌ歸國旅費ノ額ヲ手當トシテ支給スヘシ
- 第四條 巡查持區内ヲ巡廻スルトキハ旅費ヲ給セス一切ノ費用トシテ日當ヲ支給スヘシ但其給與方ハ左ノ各項ニ依ルヘシ
 - 巡查日當 金三十錢
 - 第一項 巡廻中宿泊スルトキハ其泊數ニ應シ日當ヲ支給スヘシ
 - 第二項 至急ノ派出ヲ要シ特ニ舟車馬ノ備入ヲ許可シタルトキハ該實費ヲ支拂フヘシ但此場合ニ於テモ日當ハ前項ニ依ル
- 第五條 集治監及假留監典獄副典獄書記看守長御用掛ノ旅費ハ左ノ各項ニ依ルヘシ
 - 第一項 典獄ハ閣令第十四號内國旅費規則ノ四等旅費副典獄ハ同五等旅費ヲ支給スヘシ
 - 第二項 書記看守長判任御用掛ハ月俸四拾圓以上ハ閣令第拾四號内國旅費規則ノ五

等旅費月俸四拾圓未滿ハ同六等旅費ヲ支給スヘシ

- 第六條 (官社神官ノ旅費祭主ハ閣令第拾四號内國旅費規則ノ三等旅費官司權官司ハ同五等旅費禰宜主典宮掌ハ同六等旅費ヲ支給スヘシ)(二十四年八月十五日内務省令第十五號ヲ以テ本條ヲ削除ス)
- 第七條 看守等外吏等外御用掛雇員等ノ旅費ハ左ノ各項ニ依ルヘシ
 - 第一項 看守等外吏等外御用掛及雇員ハ甲號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ
 - 第二項 看守ノ召募旅費及免職歸國旅費ハ第三條ノ第二項第三項第四項ニ依ルヘシ
 - 第三項 押丁給仕小使職工等ハ乙號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ
 - 第四項 華族及從六位勳六等以上ノ士民ヲ公務ニテ旅行セシムルトキハ閣令第十四號内國旅費規則ノ二等旅費其他有位帶勳ノ士民同上ノ節ハ同四等旅費ヲ支給スヘシ(同上ヲ以テ元(四等)ヲ三等(二元(六等)ヲ四等ニ改ム)
 - 第五項 一般ノ人民同上ノ節ハ甲號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ
- 第八條 支給ノ方法ハ第二條及第三條ノ第二項第三項第四項第四條及第七條ノ第二項ヲ除クノ外總テ閣令第十四號内國旅費規則ニ依ルヘシ
- 第九條 地方ノ情况ニ據リ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節減スルコトヲ得(同上ヲ以テ本表ヲ改正ス)

甲號表

汽車	貨	每	一	哩	汽船	貨	每	一	海里	車馬	賃	每	一	里	日	當	每	一	日
第二類	第一章	旅費																	

金	三	錢	金	四	錢	金	七	錢	金	五	拾	錢
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

七百九十二

乙號表

汽車賃	每二哩	汽船賃	每二海里	陸路雜費	每二里	日當	每一日
金	二	錢	金	三	錢	金	四
金	三	錢	金	四	錢	金	三
金	三	錢	金	三	錢	金	十
金	二	錢	金	三	錢	金	十

○警察官吏等其他ノ者官船ニ乗込出張ノトキ食卓料支給方二十二年六月

内務省訓令第二十四號警視廳府縣集治監假留監

明治十九年六月内務省令第十一號警察官吏其他内國旅費概則中巡查看守及雇員其他ノ者官船若クハ各廳ニ於テ借入雇入ノ船舶ニ乗込出張スル場合ニ於テ官ヨリ賄ヲナサ、ルトキハ左ノ食卓料ヲ支給スヘシ

巡查看守雇員 一日 金五拾錢
押丁給仕小使職工 一日 金三拾錢

華族及從六位勳六等以上ノ士民ハ本年四月閣令第十四號奏任官ノ額其他有位帶勳ノ士民ハ同判任官ノ額及一般ノ人民ハ本訓令第一項ノ額ヲ給ス

○警察官吏持区内巡廻日當支給方二十年四月十三日
内務省訓令第二十五號

警察官吏ニシテ其持区内ヲ巡廻スルトキ給與スヘキ日當ハ特ニ其月額ヲ定メ本大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ支給スルコトヲ得

○公務ニテ往復スル警察官吏及囚徒護送ノ官吏瀛車賃支給方二十一年二月
内務省訓令第二號

明治二十年五月勅令第十二號私設鐵道條例第二十一條公務ヲ以テ往復スル警察官吏及第二十二條囚徒護送ノ官吏ニシテ半價ヲ以テ乗車スル場合ニ於テハ明治十九年六月閣令第十四號及同年六月内務省令第十一號内國旅費ニ屬スル瀛車賃半額ヲ支給スヘシ

○北海道廳警察官吏及神官旅費支給方十九年六月
内務省訓令第九號

其廳警察官吏及神官ノ旅費ハ當省令第十一號ニ依リ支給スヘシ

○學校職員及郡區書記戶長旅費額二十四年八月十五日
内務省訓令第十八號廳府縣集治監假留監大阪衛

明治二十年六月當省訓令第三十七號學校職員及郡區書記戶長旅費額左ノ通り改正シ明治二十

十四年八月十六日ヨリ施行ス
明治十九年勅令第六十五號同年閣令第二十五號ノ學校職員及郡區書記戶長等國庫費支辨ニ屬スル用務ヲ以テ旅行セシムルトキ學校職員ニシテ其奏任待遇ヲ受クルモノハ三等旅費判任待遇ヲ受クルモノ及ヒ郡區書記戶長ハ四等旅費ヲ内國旅費規則ニ依リ支給スヘシ

○監獄醫及教誨師判任官待遇者ノ旅費額二十四年八月十四日
内務省訓令第十六號警視廳北海道廳府

縣集治監假留監

第二類 第一章 旅費

七百九十三

監獄醫及教誨師ニシテ判任待遇ヲ受クル者ノ旅費ハ左表ノ金額ヲ明治十九年六月閣令第十四號内國旅費規則ニ依リ支給スヘシ但地方ノ情况ニヨリ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節減スルコトヲ得

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

旅		費		額	
瀛車賃	每二哩	瀛船賃	每二海里	車馬賃	每二里
金	三	錢	四	錢	六
				日	當
				金	六十
				錢	錢

○徵兵旅費定則 二十年十二月十六日 大藏省令第十七號

明治十八年七月當省達第四十二號徵兵旅費定則左ノ通改正ス

徵兵旅費定則

- 第一條 徵兵旅費ハ檢査及入營ノ二種トシ片道三里以上ノ旅行ヨリ之ヲ支給ス
檢査旅費ハ檢丁呼出ニ係ル檢丁ノ父兄、癡疾不具者ニ同伴シタル保護人及抽籤人檢査所又ハ抽籤場ヘ往復ノ旅費トス
入營旅費ハ新兵入營ノ旅費トス
- 第二條 檢査旅費ハ一里ニ付金貳錢五厘入營旅費ハ同金四錢ノ割ヲ以シ支給ス但一里未滿ノ端里數ハ切捨トス

官ノ都合ニヨリ特ニ滞在ヲ命シタルトキ檢査旅費ニ在テハ金貳拾貳錢入營旅費ニ在テハ金貳拾八錢ノ滞在日當ヲ支給ス

官ノ都合ニヨリ特ニ滞在ヲ命シタルニアラスト雖モ川留雪間ニシテ途中ニ滞在スルトキ其地戸長ノ證明書ヲ添ヘ請求スルトキハ滞在日當ヲ支給スルコトヲ得

第三條 片道三里未滿ノ旅行ト雖モ島嶼ニ住居シ渡航ニアラサレハ至リ難キトキハ渡航賃ノ實費ヲ支給スルコトヲ得

片道三里未滿ノ旅行ト雖モ官ノ都合ニヨリ特ニ宿泊ヲ命シタルトキ檢査旅費ニ在テハ金拾五錢入營旅費ニ在テハ金貳拾錢ノ宿泊料ヲ支給ス

第四條 片道三里以上ノ旅行ニシテ島嶼ニ住居シ渡航ニアラサレハ至リ難キモノ若クハ地勢上渡航又ハ瀛車乗用ヲ便トスルトキハ第二條ニヨラス其實費(瀛車瀛船ハ下等賃タルヘシ)ヲ支給スルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ泊數ニ應シテ前條ノ宿泊料ヲ給ス其陸行(徒歩)ト相跨ル日亦之ニ準シ尙陸路里數ニ應シテ別ニ第二條ノ旅費ヲ支給ス

第五條 新兵入營ノ旅行ハ一日十里詰トシ若シ各兵集合上ノ都合ニヨリ其見積行程ヨリ延着セシメタルトキハ増日數ニ應シ滞在日當ノ額ヲ支給ス

第六條 檢丁若クハ呼出ニ係ル檢丁ノ父兄癡疾不具ニシテ歩行スル能ハサル者ハ第二條ノ外片道一里以上ヨリ一里ニ付金六錢ノ駕車賃ヲ支給ス但一里未滿ノ端數ハ切捨トス

第二類 第一章 旅費

第七條 新兵入營途中疾病ニヨリ歩行スル能ハスシテ駕車ヲ乗用シ又ハ滞在シタルトキハ附添吏員ノ證明書及醫師ノ診斷書ヲ添へ請求スルトキハ駕車賃ノ實費若クハ滞在日當ヲ支給スルコトヲ得

第八條 新兵ニ附添ヒ營所ニ到ル郡區書記若クハ戸長ノ旅費ハ内國旅費規則ニヨル
第九條 北海道廳長官府縣知事ノ見込ニヨリ本則中ノ給額ヲ減少スルハ適宜ナルヘシ

○徵兵參事員旅費手當支給規則 二十二年四月二十四日 內務省令第六號 北海道廳府縣(沖繩縣ヲ除ク)
徵兵參事員手當金並ニ旅費支給規則左ノ通相定ム

支給規則

一手當金ハ府縣郡市島嶼ヲ問ハス出務日數ニ應シ一日金壹圓ヲ支給ス

一旅費ハ左表ノ金額ヲ給ス其支給法ハ明治十九年六月閣令第十四號内國旅費規則ニ據ル
但地方ノ狀況ニ依リ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節減スルヲ得

(二十四年八月十五日內務省令第十六號ヲ以テ本表ヲ改正ス)

汽	車	賃	汽	船	賃	車	馬	賃	日
一	哩	每	二	一	海里	每	二	一	里
金	四	錢	金	五	錢	金	十	錢	金
									七
									十
									錢
									錢

○徵兵検査ノ節一時雇入者解雇旅費支給方 二十年二月 內務省訓令第九號府縣

徵兵検査ノ節醫師等一時限リ雇入ノ者解雇スルトキハ該地ヨリ最初採用セシ節ノ本人居住地迄旅費ヲ支給スヘシ

○海軍内國旅費規則 二十二年八月二日 海軍省達第三百二號
海軍内國旅費規則左ノ通改正ス

海軍内國旅費規則

第一條 海軍内國旅費ハ命ヲ受ケ本邦内ヲ旅行スル者ニ之ヲ給ス

第二條 旅費ハ汽車料船舶料車馬賃及日當ノ四種トシ順路ノ路程ニ依リ之ヲ給ス
車馬賃ハ汽車ノ便ナキ地方ノ陸路旅行ニ際シ里數ニ應シ之ヲ給シ日當ハ休泊料其他ノ諸費ニ充ル爲メ之ヲ給ス

第三條 旅費ノ等級ヲ分テ八等トシ日當及車馬賃ハ第一號表ニ依リ之ヲ給シ汽車料船舶料ハ第二號表ニ依リ之ヲ給ス

第四條 第二號表面ノ地ヲ旅行スルトキ汽車船舶ノ兩路アル場所ニ在テハ汽車料ヲ給ス
割増ヲ給ス但旅行ノ各種ニ跨ル當日ハ日當ノ多額ヲ給ス

第五條 第二號表面ノ各地間ヲ旅行スルトキハ特ニ令達アルモノ、外ハ他ノ路程ヲ經過

第二類 第一章 旅費
七百九十七

第七條 新兵入營途中疾病ニヨリ歩行スル能ハスシテ駕車ヲ乗用シ又ハ滞在シタルトキハ附添吏員ノ證明書及醫師ノ診斷書ヲ添ヘ請求スルトキハ駕車賃ノ實費若クハ滞在日當ヲ支給スルコトヲ得

第八條 新兵ニ附添ヒ營所ニ到ル郡區書記若クハ戸長ノ旅費ハ内國旅費規則ニヨル
第九條 北海道廳長官府縣知事ノ見込ニヨリ本則中ノ給額ヲ減少スルハ適宜ナルヘシ

○徵兵參事員旅費手當支給規則 二十二年四月二十四日 內務省令第六號 北海道廳府縣沖繩縣ヲ除ク

徵兵參事員手當金並ニ旅費支給規則左ノ通相定ム
支給規則
一手當金ハ府縣郡市島嶼ヲ問ハス出務日數ニ應シ一日金壹圓ヲ支給ス

一旅費ハ左表ノ金額ヲ給ス其支給法ハ明治十九年六月閣令第十四號内國旅費規則ニ據ル
但地方ノ狀況ニ依リ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節減スルヲ得
(二十四年八月十五日內務省令第十六號ヲ以テ本表ヲ改正ス)

汽	車	貨	汽	船	貨	車	馬	賃	日	當
一	哩	每	二	一	海	里	每	二	一	里
金	四	錢	五	錢	十	錢	七	十	錢	

○徵兵検査ノ節一時雇入者解雇旅費支給方 二十二年二月 內務省訓令第九號府縣

徵兵検査ノ節醫師等一時限リ雇入ノ者解雇スルトキハ該地ヨリ最初採用セシ節ノ本人居住地迄旅費ヲ支給スヘシ

○海軍内國旅費規則 二十二年八月二日 海軍省達第三百二號

海軍内國旅費規則左ノ通改正ス

海軍内國旅費規則

第一條 海軍内國旅費ハ命ヲ受ケ本邦内ヲ旅行スル者ニ之ヲ給ス

第二條 旅費ハ汽車料船舶料車馬賃及日當ノ四種トシ順路ノ路程ニ依リ之ヲ給ス

車馬賃ハ汽車ノ便ナキ地方ノ陸路旅行ニ際シ里數ニ應シ之ヲ給シ日當ハ休泊料其他ノ諸費ニ充ル爲メ之ヲ給ス

第三條 旅費ノ等級ヲ分テ八等トシ日當及車馬賃ハ第一號表ニ依リ之ヲ給シ汽車料船舶料ハ第二號表ニ依リ之ヲ給ス

第四條 第二號表面ノ地ヲ旅行スルトキ汽車船舶ノ兩路アル場所ニ在テハ汽車料ヲ給ス

割増ヲ給ス但旅行ノ各種ニ跨ル當日ハ日當ノ多額ヲ給ス
汽車料船舶料ノ定價ヲ給スルトキ旅費等級四等以上ニ當ル者ハ上等トシ五等六等ニ當ル者ハ中等トシ 中等ナキトキハ五等 七等以下ニ當ル者ハ下等トス

第五條 第二號表面ノ各地間ヲ旅行スルトキハ特ニ令達アルモノ、外ハ他ノ路程ヲ經過

第二類 第一章 旅費

スルモ該表ニ依リ其額ヲ給シ日當ハ旅行ノ現日數ニ拘ハラズ一日汽車路二百哩海路二百哩詰ヲ以テ計算シ之ヲ給ス但汽車路ト海路トニ跨ル旅行ハ其合計里數ヲ以テ日數ヲ算出ス其十位以上ノ端數ハ一日ニ計算ス

第六條 旅行中歸省其他私事ノ爲メ迂路ヲ經過スルトキハ其迂路ニ入りタル日ヨリ再ヒ順路ニ出タル前日マテハ旅費ヲ給セス
旅行中病氣或ハ船待若クハ道路壅塞等ニ依リ滞在スルトキハ其事實ノ確證アルニ非サレハ日當ヲ給セス(二十三年一月十六日海軍省達第十七號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第七條 文官奏任二等以上ハ上長官四等以下ハ士官試補及判任一等ハ准士官判任二等以下及見習ハ下士ノ旅費等級ニ準シ相當ノ額ヲ給ス(二十三年七月二十八日海軍省達第九號ヲ以テ本條中追加ス)

第八條 將校准將校ノ生徒ニハ旅費等級六等其他ノ生徒ニハ旅費等級七等ノ額ヲ給ス

第八條乙 旅行中任官進級等ニ依リ旅費等級變シタルトキハ准士官以上及文官ニハ辭令書日附ノ當日ヨリ相當ノ旅費ヲ給シ下士卒及雇員以下ニハ辭令書本人ニ到達ノ日ヨリ相當ノ旅費ヲ給ス(二十三年一月十六日達海軍省第十七號ヲ以テ本條ヲ追加ス)

第九條 勤務廳所在及乘組艦船碇泊ノ市町村内ニ止ル旅行ニハ旅費ヲ給セス
衛兵司令以下守衛線内ノ旅行ハ前項ニ準ス(二十二年十月九日海軍省達第四號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

但其旅行ニシテ市町村外ニ涉リ宿泊ヲ要スルトキハ第二十六條ニ依リ旅費ヲ給ス

第十條 陸路六里汽車路十二哩海路十二哩未滿ノ旅行ニハ日當ヲ給セス但勤務廳所在若クハ乘組艦船碇泊ノ市町村外ニ宿泊ヲ要スルトキハ其泊數ニ應シ日當ヲ給ス

旅行ノ各種ニ跨ルトキハ本條ノ割合ヲ以テ汽車路一哩海路一哩以上ヲ陸路里程ニ改算シ其内外ヲ區分スヘシ

第十一條 軍艦若クハ官有車馬又ハ各廳ニ於テ借入備入タル車馬等ニテ旅行スルトキハ日當ノミヲ給ス

官有船舶又ハ各廳ニ於テ借入備入タル船舶ニテ旅行スルトキモ亦前項ニ同シ但旅行二日以上ニ涉リ官ヨリ賄ヲナサル場合ニ於テハ旅費等級一等ニハ日當四割増ヲ給シ旅費等級二等以下ニハ日當五割増ヲ給シ各種ニ跨ル當日ハ日當ノ多額ヲ給ス(同上ヲ以テ正)

前二項ノ場合ニ於テ艦船乘組ノ辭令書ヲ與へ出張セシムル者及軍艦ニ便乗ヲ命シ轉勤轉乘セシムル者ニハ日當ヲ給セス

艦船試運轉若クハ大砲水雷試射ノ爲メ艦船ニ乘組二日以上旅行スルトキハ其日數ニ應シ日當ノミヲ給ス(二十三年十月二日海軍省達第三百三十三號ヲ以テ本項中ヲ改)

第十二條 急行其他特殊ノ旅行ニ於テハ其性質ニ依リ船舶車馬賃ノ實費拂ヲ許可スルコトアルヘシ此場合ニ於テハ日當ノミヲ給ス(同上ヲ以テ本條中改正ス)

第十三條 武官准士官以上及文官轉勤轉乘ヲ命セラレ辭令書受領後三十日若クハ乘組艦船所轄ヲ轉シ所轉轉換後三十日以内ニ左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ本人旅費ノ外

第二類 第一章 旅費

別ニ各本項ノ路程ニ應シ汽車料船舶料及車馬賃ヲ給ス但家族父母妻子ヲ云以下同シヲ携帶シ若クハ移轉セシムルトキハ所管長官ノ承認ヲ受クヘシ而シテ其發著ハ届出ツヘシ二十三年一月十六日海軍省達第

十七號ヲ以テ本條中追加ス

第一項第二項ノ場合ニ於テ甲乙兩廳同地ニ在ルトキハ本條ニ依ルノ限ニアラス二十三年十月十日海軍省達第

一、甲廳ヨリ乙廳ニ轉勤ヲ命セラレタル者甲廳所在地若クハ家族所在地ヨリ乙廳所在地ニ家族ヲ携帶シ若クハ移轉セシムル時

二、甲廳ヨリ乙艦船ニ轉乘ヲ命セラレタル者甲廳所在地ヨリ乙艦船所在地ニ家族ヲ携帶シ若クハ移轉セシムル時

三、甲艦船ヨリ乙艦船ニ轉乘ヲ命セラレタル者甲艦船所在地若クハ家族所在地ヨリ乙艦船所在地ニ家族ヲ携帶シ若クハ移轉セシムル時

四、甲艦船ヨリ乙廳ニ轉勤ヲ命セラレタル者甲艦船所在地若クハ家族所在地ヨリ乙廳所在地ニ家族ヲ携帶シ若クハ移轉セシムル時

五、出張中甲廳若クハ甲艦船ヨリ乙廳若クハ乙艦船ニ轉勤轉乘ヲ命セラレ直チニ赴任スル者甲廳若クハ甲艦船所在地若クハ家族所在地ヨリ乙廳若クハ乙艦船所在地ニ家族ヲ移轉セシムル時

六、乘組艦船所轄ヲ轉シ家族所在地ヨリ本艦所轄鎮守府軍港ニ家族ヲ移轉セシムル時

第十四條 前條ニ依リ別ニ汽車料船舶料及車馬賃ヲ給スルトキ第二號表面ノ各地間ハ其汽車料若クハ船舶料ノ額ヲ給シ其他ノ路程ハ總テ車馬賃ヲ給ス但陸程ヲ以テ計算セサル渡海ノ場所ハ海路二哩ヲ陸路一里ニ計算シ車馬賃ヲ給ス

第十五條 募兵檢閱視察陸地測量等ノ爲メ現場ヲ巡視スルトキハ其地ヘ到達ノ翌日ヨリ發程前日マテ車馬賃ヲ給セス其日數ニ應シ日當三割増ヲ給ス但官有若クハ官備ノ船舶車馬ヲ使用セシムルトキハ三割増ヲ給セス二十二年十月九日海軍省達第

私立造船所ニ依托シタル造船工事ニ關シ若クハ建築工事又ハ物品検査ニ關シ現場ニ出張シ著後三十日以上ニ及フトキハ同地ニ滞在ノ日數ニ限リ日當十分ノ三ヲ給シ滞在中他ニ出張スルトキ發著ノ當日ハ日當全額ヲ給ス二十二年十月九日海軍省達第

甲地ヨリ乙地ニ移ルトキハ通常ノ旅費ヲ給ス本項ヲ追加シ二十三年十月二十九日同第

第十六條 水路測量出張ノトキハ測地到達ノ翌日ヨリ發程前日マテ車馬賃ヲ給セス日當一割増ヲ給ス二十四年五月二十九日海軍省達第

甲地ヨリ乙地ニ移ルトキハ通常ノ旅費ヲ給ス

第十七條 入學通學若クハ練習乗組ヲ命セラレタルトキハ其學校若クハ艦船所在地マテ通常ノ旅費ヲ給シ休職者某地滞在ヲ命セラレタルトキハ其地マテ通常ノ旅費ヲ給ス

第十八條 賜暇歸省又ハ養病ノ爲メ旅行中轉勤轉乘ヲ命セラレ若クハ休職トナリ某地滞在

在ヲ命セラレ舊在勤地若クハ舊艦船ニ歸到セスシテ直ニ指定ノ地ニ赴クトキハ其所在地ヨリ指定地マテ其路程ニ應シ相當ノ旅費ヲ給ス但本條ノ旅行中ニ於テハ第二十三條

第七項ニ該ル者ニ給スル旅費モ亦本條ニ準ス

第十九條 旅行中免官廢官若クハ免役トナリタルトキハ舊在勤地若クハ舊艦船マテ從前ノ資格ヲ以テ相當ノ旅費ヲ給ス

第二十條 旅行中死亡シタルトキハ本人ノ居室マテ從前ノ資格ヲ以テ第十四條ニ準シ單ニ汽車料船舶料及車馬賃ヲ給ス但下士卒及從僕割烹刺夫ハ此限ニアラス

第二十一條 免官廢官若クハ免役トナリ事務引繼或ハ殘務取扱等ヲ命セラレ旅行スル者ニハ從前ノ資格ヲ以テ相當ノ旅費ヲ給ス

第二十二條 武文官ニ任用スル爲メ召喚セラレタルトキハ新任官相當ヲ以テ通常ノ旅費ヲ給ス兵學校生徒志願者入校試験ニ及第シタル者ニ生徒ヲ命スル爲メ召喚スルトキハ日當三

拾五錢ヲ給ス其支給法ハ第二十五條ニ依ル(二十三年五月三日海軍省達第百八十號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第二十三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ第一號表ノ日當並ニ汽車料船舶料ノ定價及車馬賃トシテ陸路一里毎ニ旅費等級四等以上ニ當ル者ニハ十錢五等以下ニ當ル者ニ

ハ六錢ヲ給ス

但第七項第八項ニ當ル者ハ陸路十二里詰ヲ以テ日數ヲ算出シ又汽車路及海路ハ第五條ノ例ニ依リ日數ヲ算シ日當ヲ給ス旅行ノ各種ニ跨リ端數ヲ生スルトキハ之ヲ通算

スヘシ(二十三年七月二十八日海軍省達第百七十號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

一、銃砲射撃若クハ艦隊操練若クハ對抗運動見學及學術研究等ノ爲メ出張ヲ命セラレタル時

二、拜謁或ハ賢所參拜ヲ仰付ラレ又ハ紋位紋勳若クハ昇等轉任等ノ爲メ召喚セラレタル時

三、會計監督部諸員其職務ヲ以テ各艦艦隊ニ臨檢ノ爲メ旅行スル時
四、下士卒職業或ハ學術受験ノ爲メ召喚セララル、時

五、乘艦生徒下士卒及從僕割烹刺夫公暇上陸中ニ本艦出港ノ際追尾歸艦若クハ所管廳ニ歸到セシムル時

六、生徒下士卒及從僕割烹刺夫傷痍疾病ニ罹リ治療ノ爲メ入院シ若クハ退院シ若クハ治療場所ヲ移轉セシムル時但重傷或ハ病症ニ依リ別ニ船舶車馬若クハ肩輿等ヲ要スルトキハ所轄長ノ認可及ヒ軍醫ノ診斷ニ依テ其實費ヲ給ス(二十二年海軍省達第四百十一號ヲ以テ本條中改正ス)

七、准士官以上休職ヲ命セラレ辭令領受ノ日ヨリ一週日以内若クハ豫備後備ニ入り又ハ退役トナリ現役ヲ離ル、日ヨリ一週日以内ニ本人ノ居室ニ歸住スル時(二十三年七月二日海軍省達第百五十三號ヲ以テ本項ヲ改正ス)

八、豫備後備者召集ニ應スル時
第二類 第一章 旅費

九、旅費等級六等以下ニ當ル軍人軍屬職務上自己ノ不注意若クハ誤謬ニ原因スル事件ニ付質問説明等ノ爲メ召喚セララル、時

第二十四條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ汽車料船舶料ノ定價及前條同額ノ車馬賃ヲ給シ日當ハ給セス

一、准士官以上學術受験ノ爲メ召喚セララル、時

二、准士官以上公暇上陸中ニ本艦出港ノ際追尾歸艦若クハ所管廳ニ歸到セシムル時若クハ軍醫ノ診斷ニ依リ入院或ハ陸地療養ノ後歸艦スル時

三、准士官以上ノ軍人及軍屬被告事件ニ依リ軍法會議ニ於テ審問ノ爲メ召喚セララル、時

四、會葬式ニ依リ施行スル准士官以上ノ葬式幹事若クハ其補助若クハ陪柩者ニ指名サレタル時

五、旅費等級五等以上ニ當ル軍人軍屬職務上自己ノ不注意若クハ誤謬ニ原因スル事件ニ付質問説明等ノ爲メ召喚セララル、時

六、職工八夫ヲ派遣シ使役スル時(二十三年十月二十九日海軍省達第
三百五十五號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第二十五條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ一日陸路十二里陸路ヲ以テ計算セサル渡海ノ
場所ハ海路ニ哩ヲ陸路一里ニ
改算ヲ以テ下士ハ日當五十錢卒及從僕割烹剃夫ハ日當四十錢ヲ給ス官有若クハ官備ノ汽車船舶等ニテ旅行セシムルトキハ其日數ニ應シ本條ノ日當半額ヲ給ス但旅行ノ各種

ニ跨ル當日ハ日當ノ多額ヲ給ス又重傷或ハ病症ニ依リ別ニ船舶車馬或ハ肩輿等ヲ要スルトキハ所轄長ノ認可及軍醫ノ診斷ニ依リ其實費ヲ給ス

一、豫備兵後備兵又ハ歸休兵ノ歸郷シ若クハ召集セララル、時

二、下士卒滿期ニ依リ現役ヲ退キ若クハ免官免役トナリ歸郷スル時

三、從僕割烹剃夫解備トナリ其備入地ニ歸到スル時但品行不正若クハ犯罪ニ因ル者ハ此限ニアラス

第二十六條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ休泊助料及其他ノ諸費トシテ旅費等級二
等以上ニ當ル者ニハ日當八十錢四等以上ニ當ル者ニハ日當五十錢五等以下ニ當ル者ニ
ハ日當二十錢以内休憩ノミニ止ル
トキハ二錢以内ノ實費ヲ給ス又船舶車馬ヲ要スル場合ニハ汽車料船舶
料ノ定價又ハ船舶車馬賃ノ實費ヲ給ス(二十三年一月十六日海軍省達
第十七號ヲ以テ本條中改正ス)

一、演習行軍或ハ端舟乗組出張衛兵交代其他隊伍ヲ組ミ旅行スル時及行軍演習ノ際
旅費等級二等以上ニ當ル者ノ從者隨行スル時但隊伍ニ屬スル者及艦船ノ乗員本
項ニ掲クル職務ヲ以テ單身旅行スルトキハ本條ニ依ル(上)

二、生徒下士卒從僕割烹剃夫四人以上同地ニ旅行スル時及准士官以上之ヲ引率スル
時但第十一條第四項第十五條第十六條第二十三條第六項及第二十七條ノ場合ハ
此限ニアラス(二十三年三月二十日海軍省達第百一號ヲ以テ本項中ヲ改
正シ二十四年五月二十九日同第百一號ヲ以テ改正ス)

第二十七條 生徒下士卒及雇員以下被告事件若クハ懲罰處分ニ依リ旅行シ又ハ刑期滿限
第二類 第一章 旅費

ニ依リ歸廳廳トハ艦隊校モ包含ス以下同シスルトキハ汽車料船舶料ノ定價及第二十三條ニ掲クル車馬賃ト同額ノ車馬賃ノミヲ給ス但滞在或ハ途中宿泊ヲ要スルトキハ其泊數ニ應シ別ニ一日二十五錢ヲ給シ單ニ食事ノミヲ要スルトキハ一食ニ付四錢ヲ給ス(二十三年一月十六日海軍省達第十七號ヲ以テ本條中改正ス)

第二十七條 被告人ノ護送者被告人ヲ護送スル爲メ同車同船ヲ要スル場合ニ於テ被告人ノ旅費等級護送者ノ旅費等級ヨリ上級ナルトキハ之ニ被告人ト同等ノ汽車料船舶料ノ定價ヲ給ス(二十四年五月二十九日海軍省達第十七號ヲ以テ本條ヲ追加ス)

第二十八條 軍法會議ニ於テ證人鑑定人醫師若クハ通辨人ヲ呼出シタルトキハ刑法附則第四十九條第五十條ニ依リ旅費ヲ給ス

第二十九條 公務ノ爲メ華土族及平民ニ旅行セシムルトキハ華族及從六位勳六等以上ノ者ニハ旅費等級四等正七位勳七等以下ノ者ニハ旅費等級六等無位無勳ノ者ニハ旅費等級八等ノ額ヲ給ス

第三十條 備外國人ニ旅行セシムルトキハ其身分取扱ニ依リ勅任官相當ノ者ニハ旅費等級二等奏任官相當ノ者ニハ旅費等級三等判任官相當ノ者及別ニ身分取扱ヲ定メサル敎師ニハ旅費等級四等其他ノ者ニハ總テ旅費等級七等ノ額ヲ給ス

第三十一條 車馬賃ヲ給スル爲メ里數ヲ計算スルニハ出發地ノ原標若クハ中央ヨリ指定地ノ原標若クハ中央マテヲ通算スヘシ

發著地ノ市町村原標若クハ中央ト汽車停車場又ハ船舶ニ乗組ム阜頭トノ間一里ニ滿タス若クハ其間該市町村原標若クハ外ニ渉ル場所アルモ一里ニ滿タサルトキハ總里數ニ算入セス旅行ノ各種ニ跨ル場合ニ於テモ亦同シ(二十二年十月九日海軍省達第四百一十一號ヲ以テ本條中改正追加ス)沿道中ニ在ル河海灣等ノ渡船場ニシテ海里ヲ以テ計算セサル場所ハ總テ陸路里數ニ算入ス但甲乙地間ノ里數ニ包含スル場所ハ別ニ算入スルノ限ニアラス但總里數ニ一里以上ノ里數ヲ算入スルトキ里ノ端數ハ總テ切捨トス(二十三年一月十六日海軍省達第十七號ヲ以テ追加ス)

第三十二條 第十三條第十七條第二十三條第六項ノ事項及其他轉勤轉乘等ニ依リ旅行スル場合ニ於テ本人ノ請求アルトキハ前廳ニ於テ見積額以内ヲ以テ其旅費ヲ支給決算シ其給額ヲ後廳ヘ通知スヘシ(二十三年一月十六日海軍省達第十七號ヲ以テ本條中改正ス)後廳ハ前廳ノ通知ニ依リ其給額ヲ精算シ追給スヘキモノハ之ヲ給シ過給ハ追徴スヘシ但前廳ニ於テ旅費ヲ支給セサルトキ及會計ヲ異ニスル廳ヘ轉シタルトキハ總テ後廳ニ於テ支給ス(全上ヲ以テ本項中刪除ス)

下士卒及雇員以下刑期限歸廳旅費ノ支給ハ前二項ニ同シ(二十二年十月九日海軍省達第四百一十一號ヲ以テ本項ヲ追加ス)第二十三條 甲廳職員乙廳ヲ兼務シ往返スルトキハ本人到達ノ廳ニ於テ其旅費ヲ給シ一日以内ニ往返スルトキハ往返トモ出發廳ニ於テ之ヲ給ス但臨時委員ヲ兼ル者ハ此限ニアラス

第三十四條 甲廳職員ヲ乙廳ニ於テ借用スルトキハ往返トモ借用廳ニ於テ其旅費ヲ給ス
 其他借用中旅行セシムルトキモ亦同シ
 團隊ニ在リ各廳ニ勤務スル下士卒勤務廳ノ公務ニテ旅行スルトキハ勤務廳ニ於テ其旅費ヲ給ス(二十三年一月十六日海軍省達第十七號ヲ以テ本項ヲ追加ス)
 第三十五條 旅費ハ第三十二條以下ノ各條ニ依リ支給スルトキヲ除クノ外總テ本人所轄ノ廳ニ於テ支給ス
 第三十六條 旅行ノ兩會計年度ニ跨ルトキハ船舶料及汽車料ハ其船舶又ハ汽車ノ發程當日ノ年度ニ編入シ日當及車馬賃ハ年度分界ノ日ニ依テ區分スヘシ
 第三十七條 他官廳ノ官吏ヲ借入レ旅行セシムルトキハ本則ニ依テ其旅費ヲ給スルノ限ニアラス

附則

第三十八條 本則ハ本年九月一日ヨリ施行ス

旅費等級表	
旅費等級	一 等
官等職名等	親任官
	勅任官
	上長官
	士官
	候補生
	下士官
	卒
	雇員以下
旅費等級	二 等
	三 等
	四 等
	五 等
	六 等
	七 等
	八 等

第一號表

旅費等級	一 等	二 等	三 等	四 等	五 等	六 等	七 等	八 等
日當	四圓	三圓	貳圓	壹圓四拾錢	九拾錢	七拾錢	五拾錢	三拾五錢
車馬賃	五拾錢	四拾錢	貳拾六錢	貳拾錢	拾錢	八錢	七錢	六錢

第二號甲表

船舶料

地名	旅費等級							
	一 等	二 等	三 等	四 等	五 等	六 等	七 等	八 等
横須賀長浦間	〇、六〇	〇、五〇	〇、四〇	〇、二〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇
横濱長崎間	八七、五〇	六五、六〇	五一、〇〇	二九、二〇	一八、二〇	一八、二〇	一八、二〇	一八、二〇
横濱半田間	二二、九〇	一七、二〇	一三、四〇	七、六〇	四、八〇	四、八〇	四、八〇	四、八〇
横濱四日市間	二四、〇〇	一八、〇〇	一四、〇〇	八、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇
横濱清水間	一三、六〇	一〇、二〇	七、九〇	四、五〇	二、八〇	二、八〇	二、八〇	二、八〇
横濱函館間	六三、五〇	四七、六〇	三七、〇〇	二二、二〇	一三、二〇	一三、二〇	一三、二〇	一三、二〇
神戸吳間	一七、六〇	一三、二〇	一〇、三〇	五、九〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇
神戸廣島間	一八、六〇	一四、〇〇	一〇、九〇	六、二〇	三、九〇	三、九〇	三、九〇	三、九〇
神戸長崎間	四五、八〇	三四、四〇	二六、七〇	一五、三〇	九、六〇	九、六〇	九、六〇	九、六〇
神戸馬關間	二八、八〇	二二、六〇	一六、八〇	九、六〇	六、〇〇	六、〇〇	六、〇〇	六、〇〇

第二類 第一章 旅費

吳廣島間	一一〇	〇八〇	〇六〇	〇四〇	〇二〇
吳石河原江田島用小間	一一〇	〇八〇	〇六〇	〇四〇	〇二〇
廣島江田島間	一一〇	〇八〇	〇六〇	〇四〇	〇二〇
廣島馬關間	一二〇	九〇〇	七〇〇	四〇〇	二五〇
馬關長崎間	一七〇	一二八〇	九九〇	五七〇	三六〇
長崎殿原間	一五九〇	一二七〇	九五〇	六三〇	四二〇
長崎佐世保間	五五〇	四一〇	三二〇	一八〇	一二〇
長崎鹿兒島間	一九四〇	一四六〇	一一三〇	六五〇	四一〇
函館小樽間	二六五〇	一九九〇	一五五〇	八八〇	五五〇
鹿兒島那霸間	四四八〇	三三六〇	二六一〇	一四九〇	九三〇
清水神戸間	三三五〇	二五一〇	一九五〇	一一二〇	七〇〇
四日市神戸間	二七四〇	二〇六〇	一六〇〇	九一〇	五七〇
馬關博多間	七二〇	五四〇	四二〇	二四〇	一五〇
橫濱神戸間	四一六〇	三一二〇	二四二〇	一三九〇	八七〇

第二號乙表

汽車料

地名	旅費等級	一	二	三	四	五	六	七	八	九	等
東京品川間	四	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
品川橫濱間	四	一七〇	一三〇	一〇〇	〇六〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
橫濱大船間	四	一三〇	一〇〇	〇八〇	〇六〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
大船逗子間	四	〇六〇	〇五〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
逗子橫須賀間	四	〇五〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
大船國府津間	四	二三〇	一七〇	一三〇	〇八〇	〇六〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇
國府津江尻間	四	七七〇	五八〇	四五〇	二六〇	一六〇	一〇〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇
江尻大府間	四	一三〇〇	九八〇	七六〇	四四〇	二七〇	一七〇	一〇〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇
大府武豐間	四	一四〇	一一〇	〇八〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
大府名古屋間	四	一四〇	一一〇	〇八〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
名古屋米原間	四	五八〇	四三〇	三四〇	一九〇	一二〇	〇七〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇
米原長瀨間	四	〇五〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
長瀨金ヶ崎間	四	三三〇	二三〇	一八〇	一〇〇	〇七〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇
京都大阪間	四	三三〇	二三〇	一八〇	一〇〇	〇七〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇
大阪神戸間	四	二四〇	一八〇	一四〇	〇八〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇

第二類 第一章 旅費

箱崎博多間	〇、一五〇	〇、一〇〇	〇、〇八〇	〇、〇五五	〇、〇三〇	〇、〇一五	〇、〇〇〇
赤間箱崎間	二、〇〇〇	一、五〇〇	一、二〇〇	〇、七〇〇	〇、四〇〇	〇、二〇〇	〇、〇四〇
大宮高崎間	五、五〇〇	四、一〇〇	三、二〇〇	二、二〇〇	一、二〇〇	〇、八〇〇	〇、二〇〇
大宮小山間	三、七〇〇	二、八〇〇	二、二〇〇	〇、七〇〇	〇、四〇〇	〇、二〇〇	〇、〇三〇
赤羽大宮間	一、二〇〇	〇、九〇〇	〇、七〇〇	〇、四〇〇	〇、二〇〇	〇、一〇〇	〇、〇三〇
東京野上赤羽間	〇、七〇〇	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一〇〇	〇、〇五〇
品川目黒間	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇	〇、〇七〇	〇、〇四〇	〇、〇二〇
雜餉限二日市間	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇	〇、〇五〇
鳥栖久留米間	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇	〇、〇七〇	〇、〇四〇
二日市鳥栖間	一、一〇〇	〇、八〇〇	〇、六〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一〇〇
博多雜餉限間	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇	〇、〇五〇
岩切鹽竈間	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇	〇、〇五〇
小山水戸間	四、九〇〇	三、七〇〇	二、九〇〇	二、一〇〇	一、六〇〇	一、一〇〇	〇、七〇〇
輕井澤直江津間	一、一〇〇	八、三〇〇	六、四〇〇	四、四〇〇	三、七〇〇	三、〇〇〇	二、三〇〇
高崎横川間	二、三〇〇	一、六〇〇	一、三〇〇	一、〇〇〇	〇、七〇〇	〇、五〇〇	〇、三〇〇
兵庫姫路間	四、〇〇〇	三、〇〇〇	二、三〇〇	一、七〇〇	一、三〇〇	〇、九〇〇	〇、六〇〇

松山三津間	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇	〇、〇五〇
丸龜多度津間	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇	〇、〇七〇	〇、〇四〇	〇、〇二〇
多度津琴平間	〇、八〇〇	〇、六〇〇	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇
姫路有年間	一、九〇〇	一、四〇〇	一、一〇〇	〇、八〇〇	〇、六〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇
難波堺間	〇、七〇〇	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇
湊町龜瀬間	一、六〇〇	一、二〇〇	〇、九〇〇	〇、七〇〇	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇
目黒新宿間	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇	〇、〇五〇
新宿八王子間	二、六〇〇	二、〇〇〇	一、五〇〇	一、一〇〇	〇、八〇〇	〇、六〇〇	〇、四〇〇
新宿赤羽間	〇、七〇〇	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇
小山宇都宮間	二、〇〇〇	一、五〇〇	一、二〇〇	〇、九〇〇	〇、七〇〇	〇、五〇〇	〇、四〇〇
宇都宮岩切間	一、八、五〇〇	一、三、九〇〇	一、〇、八〇〇	〇、七、〇〇〇	〇、六、二〇〇	〇、五、三〇〇	〇、四、四〇〇
宇都宮日光間	三、〇〇〇	二、三〇〇	一、八〇〇	一、四〇〇	一、〇〇〇	〇、七〇〇	〇、五〇〇
岩切一ノ關間	六、一〇〇	四、六〇〇	三、六〇〇	二、八〇〇	二、二〇〇	一、七〇〇	一、三〇〇
小山前橋間	六、〇〇〇	四、五〇〇	三、五〇〇	二、八〇〇	二、二〇〇	一、七〇〇	一、三〇〇
前橋高崎間	〇、六〇〇	〇、五〇〇	〇、四〇〇	〇、三〇〇	〇、二〇〇	〇、一五〇	〇、一〇〇
米原草津間	三、四〇〇	二、五〇〇	二、〇〇〇	一、五〇〇	一、一〇〇	〇、七〇〇	〇、五〇〇

第二類 第一章 旅費

草津京都間	一九〇	一四〇	一一〇	〇六〇	〇四〇
四日市草津間	五九〇	四四〇	三四〇	二〇〇	一一〇
有年岡山間	四七〇	三五〇	二七〇	一六〇	一〇〇
門司赤羽間	三二〇	二四〇	一九〇	一一〇	〇七〇
久留米高瀬間	四一〇	三一〇	二四〇	一四〇	〇九〇
一ノ關盛岡間	六七〇	五〇〇	三九〇	二二〇	一四〇

○備外國人及備員以下内國旅費定則
十九年七月五日 司法省訓令第十三號
 備外國人及備員以下内國旅費定則左ノ通相定ム

但七月十日ヨリ施行スヘシ

備外國人及備員以下内國旅費定則

第一條 旅費支給ノ方法ハ閣令第十四號内國旅費規則ニ據ル

第二條 備外國人ハ旅費額三等ヲ給ス

但勅任取扱ノモノハ此限ニアラス

第三條 備月給金拾貳圓以上日給金四拾錢以上ハ旅費額六等ヲ給ス

第四條 備月給金拾貳圓以下日給金四拾錢以下及給仕小使等ハ左ノ表面金額ヲ給ス

第五條 赴任旅費ヲ給スルハ始審裁判所管内本支廳治安裁判所ノ間轉在勤ニ限ル

第六條 官吏ニアラサル者ニ官ノ用務ヲ以テ旅行セシムルトキハ其旅費ハ左項ニ依ル(二十年十一月十八日司法省訓令第二十五號ヲ以テ本條ヲ追加ス)

- 一 從六位及勳六等以上ノ輩ハ十九年閣令第十四號旅費額ノ四等ヲ給ス
- 二 正七位及勳七等以下ノ輩ハ同斷六等ノ額ヲ給ス
- 三 無位無勳ノ輩ハ本則第四條表面雇ノ額ヲ給ス

第七條 備員 月俸拾貳圓以下 日給四拾錢以下 及給仕小使等ハ旅行ノ性質ニ依リ實費拂フ許可スルトキハ左

項ニ依ル(同上)

- 一 本則第四條表面ノ雇ハ汽車汽船賃ハ中等以下トス
- 二 同斷給仕小使等ハ凡テ下等トス

附屬雇寫字省中取 締門番玄關番駁者等	汽車賃		汽船賃		管外車馬賃		管内車馬賃		管外日當		管内日當	
	一哩每ニ	一海里每ニ	一里每ニ	一里每ニ	一日每ニ	一日每ニ	一日每ニ	一日每ニ	一日每ニ	一日每ニ	一日每ニ	一日每ニ
給仕小使馬丁職工等	六錢	六錢	八錢	六錢	五拾錢	四拾錢	三拾錢	貳拾五錢	三拾錢	貳拾五錢	貳拾五錢	貳拾五錢

○外國旅費規則
二十年五月六日 閣令第十二號 各官廳
 外國旅費規則左ノ通相定本年七月一日ヨリ施行ス

外國旅費規則

第二類 第一章 旅費

第一條 外國旅費ハ官吏公務ニ依リ外國ニ旅行スルトキ其行程日數ニ應シ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス

第二條 外國旅費ハ船舶料、汽車料、客舍料、食卓料、日當及支度料ノ六種トス

第三條 客舍料、食卓料、日當、支度料ハ各官等ニ依リ分テ五等トシ第一號表ニ照シ船舶料、汽車料ハ勅奏判任官ハ一等、備員ハ二等ノ額ヲ以テ第二號表ニ照シ之ヲ支給ス

第四條 表面外ノ地ニ旅行スルトキ勅奏判任官ハ汽船、汽車賃ノ一等定價、備員ハ二等定價ヲ支給ス其二等ナキ場合ハ一等ヲ支給ス

汽船、汽車ノ設ナキ地方ヲ旅行スルトキハ舟、車、馬賃ノ實費ヲ支給ス
定價及實費ヲ支給スル場合ニ於テハ私屬ノ荷物三十五貫目マテノ運賃ハ官費支給スルコトヲ得

第五條 前條ノ場合ニ於テハ旅行者ヨリ旅行日記、受取書等精確ナル證明書ヲ出サシメ之ニ基キ支給スヘシ

旅行者ハ精密ナル旅行日記ヲ作り毎日ノ行程、宿泊ノ場所、旅店名稱、船名、賃銀等ヲ記入スヘシ

旅行者ハ成ルヘク運輸會社或ハ運輸營業人ノ受取書其他舟、車、馬賃ノ證明トナルヘキモノヲ取置ヘシ

第六條 船舶料、汽車料ハ官ヨリ船、車ヲ供スルトキハ之ヲ支給セス

第七條 食卓料ハ官ヨリ船舶ヲ供スルモ賄ヲ爲サ、ルトキニ限り航海ノ日數ニ應シ之ヲ支給ス

食卓料ハ客舍料ト重複ニ支給セス

第八條 客舍料ハ陸地宿泊ノ數ニ應シ之ヲ支給ス

航海途中汽船ノ寄港シタル場合ニ於テ自己ノ便宜ヲ以テ上陸宿泊スルトキハ客舍料ヲ支給セス

第九條 日當ハ本邦出發港拔錨ノ日ヨリ本邦歸着港ニ投錨ノ日マテ日數ニ應シテ支給ス

第十條 支度料ハ各省大臣ニ於テ豫メ旅程ノ遠近、日數ノ多少、公務ノ性質等ヲ斟酌シ第一號表ニ掲ケル範圍内ニ於テ相當ノ額ヲ定メ支給スヘシ

支度料ハ本邦ヨリ外國へ旅行ヲ命シタルトキ之ヲ支給シ其外國ニ在テ甲國ヨリ乙國へ旅行ヲ命スルコトアルモ之ヲ支給セサルモノトス

第十一條 奏任官四等以上ノ者從者ヲ伴ヒ外國ニ旅行スルトキ從者一人ニ限り願ニ依リ表面二等ノ船舶料、汽車料表面外ノ地ハ及五等ノ食卓料ヲ支給スルコトアルヘシ

第十二條 外國へ旅行ヲ命セラレタル者出發前死去又ハ官ノ都合ニ由リ旅行ヲ免シタルトキハ支度料ノ半額ヲ支給ス

第十三條 外國旅行中退官ノ者ハ其地ヨリ本邦出發地マテ舊官相當ノ旅費ヲ支給ス但自己ノ便宜又ハ刑事裁判ニ由リ退官ノ者ハ此限ニアラス

外國旅行中死亡ノ者ハ其地ヨリ本邦出發港マテ舊官相當ヲ以テ第二號表汽車料、船舶料ノ一割増ヲ支給シ第一號表ノ旅費ハ支給セズ
(二十三年十月二十二日勅令第二) 在外各廳在勤中死亡ノ者モ前項ニ準ス(百五十九號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第十四條 外國旅行中許可ヲ得テ公務ヲ終ルノ後尙私事ノ爲メ滞在スルトキ其間ハ一切旅費ヲ支給セズ但病氣ハ此限ニアラス
許可ヲ得テ私事ノ爲メ迂路ヲ經過スルトキハ其迂路ニ就キタル日若クハ場所ヨリ其再ヒ順路ニ就クノ日若クハ場所マテハ順路ニ應スル船舶料、汽車料ノ一割増ヲ支給シ日當、客舍料ハ支給セズ

第十五條 第十三條及第十四條ニ據リ死亡者及許可ヲ得テ迂路ヲ經過スル者ニ順路船舶料、汽車料ヲ支給スルトキ表面外ノ地ニ於テハ陸地ハ一英里ニ付金七錢海路ハ一海里ニ付金六錢ノ割ヲ以テ支給ス

表面外ノ地ノ里程ハ各地運輸會社或ハ各國政府ノ公認セル里程表ニ基キ旅行者或ハ遺族ヨリ精確ノ證明書ヲ出サシムルモノトス

第十六條 備員中特別ノ取扱ヲ要スル者(備外國人等)及其他本則ニ明文ナキモノ、旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シ之ヲ定ムヘシ

第十七條 交際官、領事等別段ノ旅費規則アルモノニハ本則ヲ適用セズ

第十八條 各省大臣ハ大藏大臣ト協議シ定額ノ旅費ヲ減少スルコトヲ得

附則

外國旅費ハ內國旅費ト重複ニ支給スルコトナシ

外國旅行ノ爲メ本邦内ヲ通過シ及出發港ニ滞在スルキハ內國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支給ス

出發港拔錨ノ後郵船ノ都合ニ由リ本邦内ニ寄港シ上陸滞在スルトキハ其間ハ內國旅費規則ニ據リ日當ヲ支給ス

歸朝ノ際目的ノ港ニ達スヘキ直航船ナキカ爲メ一旦本邦内ニ寄港シ其地ヨリ汽船ヲ乗替ルトキハ其寄港シタル日以後ニ起ル旅行ハ內國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支給ス
第一號

官級	旅費		客舍料		食卓料	日當支度料
	等	級	外國	支那朝鮮國		
親任官	一	等	八	圓七	圓四	圓六百圓以内
勅任官	二	等	七	圓六	圓三	圓四百圓以内
奏任官	三	等	六	圓五	圓三	圓四百圓以内
判任官	四	等	五	圓四	圓三	圓三百圓以内
備員	五	等	四	圓三	圓二	圓三百圓以内

第二號表ノ甲 汽船賃表

	一 等	二 等
橫濱 香港 間	百四圓	八拾三圓貳拾錢
同 柴 棍 間	百九拾五圓	百五拾六圓
同 新 嘉 坡 間	百九拾五圓	百五拾六圓
同 マニラ 間	貳百五拾三圓五拾錢	貳百貳圓八拾錢
同 バタアイヤ 間	貳百四拾七圓	百九拾七圓六拾錢
同 カルカツタ 間	三百五拾壹圓	貳百八拾圓八拾錢
同 ボンデチユリス 間	三百三拾壹圓五拾錢	貳百六拾五圓貳拾錢
同 マドラス 間	三百拾貳圓	貳百四拾九圓六拾錢
同 コロンボ 間	三百九拾圓	三百拾貳圓
同 亞丁 間	三百七圓	四百五圓六拾錢
同 蘇西 間	五百貳拾圓	四百拾六圓
同 ポルトサイト 間	五百三拾九圓五拾錢	四百三拾壹圓六拾錢
同 那不列 間	四百六拾八圓	貳百八拾六圓
同 馬耳塞 間		
同 メルボルン 間		

第二號表ノ乙

歐米各所汽車賃表

同 アリソン 間	五百拾三圓五拾錢	貳百九拾貳圓五拾錢
同 シドネー 間	四百六拾八圓	貳百八拾六圓
同 サンフランシスコ 間	三百貳拾五圓	貳百圓
同 上海 間	六拾五圓	三拾九圓
同 天津 間	九拾七圓五拾錢	五拾七圓貳拾錢
同 芝罘 間	八拾四圓五拾錢	四拾九圓四拾錢
同 元山 間	七拾圓貳拾錢	四拾壹圓六拾錢
同 金山 間	五拾五圓貳拾錢	三拾貳圓五拾錢
同 仁川 間	七拾圓貳拾錢	四拾壹圓六拾錢
同 浦潮斯德 間	八拾八圓四拾錢	五拾貳圓
同 米國 桑港 間	九拾七圓五拾錢	三拾貳圓五拾錢
同 米國 紐育 間	百三拾圓	五拾貳圓
同 橫濱 英國 間	五百四拾六圓	三百貳拾五圓

第二類 第一章 旅費

一 等	二 等

佛國馬耳塞リオン間	拾壹圓貳拾錢	八圓三拾錢
佛國馬耳塞巴里間	貳拾七圓六拾錢	貳拾圓五拾錢
佛國ソオンバ里間	拾六圓四拾錢	拾貳圓貳拾錢
佛國巴里英國倫敦間	拾九圓五拾錢	拾四圓六拾錢
佛國巴里和蘭海牙間	拾三圓八拾錢	拾圓拾錢
佛國巴里英國倫敦間	拾九圓五拾錢	拾四圓六拾錢
佛國巴里伊國羅馬間	四拾七圓八拾錢	三拾五圓九拾錢
佛國巴里伊國羅馬間	五拾五圓七拾錢	四拾圓
佛國巴里伊國ナール間	六拾圓六拾錢	四拾三圓四拾錢
佛國巴里瑞西國ベルン間	拾七圓七拾錢	拾三圓三拾錢
佛國巴里瑞典國ストックホルム間	五拾九圓三拾錢	四拾四圓七拾錢
佛國巴里丁抹國コペンハーゲン間	四拾貳圓九拾錢	三拾貳圓
佛國巴里白耳義國アラセル間	拾圓拾錢	七圓五拾錢
佛國巴里西班牙國マドリット間	五拾壹圓	三拾八圓七拾錢
佛國巴里葡萄牙國リスボン間	七拾六圓七拾錢	五拾八圓
佛國巴里那威國クリスチヤンナ間	六拾六圓八拾錢	四拾九圓七拾錢
佛國巴里獨國伯林間	三拾三圓	貳拾四圓貳拾錢

佛國巴里土國コンスタンチノール間	百三拾壹圓六拾錢	九拾八圓
佛國巴里露國彼得堡間	八拾三圓七拾錢	六拾貳圓拾錢
露國彼得堡モスコー間	貳拾貳圓四拾錢	拾壹圓七拾錢
露國彼得堡オデッサ間	七拾九圓	五拾四圓六拾錢
露國彼得堡アボー港間	貳拾壹圓四拾錢	拾貳圓七拾錢
露國彼得堡獨國クラコー間	四拾八圓七拾錢	三拾六圓拾錢
露國彼得堡獨國エードクネン間	三拾圓貳拾錢	貳拾貳圓四拾錢
獨國エードクネン伯林間	拾九圓貳拾錢	拾四圓三拾錢
獨國伯林澳國維也納間	拾九圓八拾錢	拾四圓九拾錢
獨國伯林白耳義國アラツセル間	貳拾圓八拾錢	拾三圓三拾錢
獨國伯林英國倫敦間	三拾六圓四拾錢	貳拾六圓六拾錢
獨國伯林蘭國アムステルダム間	拾壹圓四拾錢	八圓四拾錢
伊國ナイブル羅馬間	六圓八拾錢	四圓九拾錢
伊國羅馬ウエニス間	拾七圓四拾錢	拾貳圓
伊國ウエニス澳國維也納間	拾八圓七拾錢	拾三圓八拾錢
伊國ウエニス澳國トリースト間	四圓四拾錢	三圓拾錢

澳國トリスド維也納間	貳拾圓八拾錢	拾五圓六拾錢
澳國維也納クラコ間	拾貳圓三拾錢	九圓拾錢
英國倫敦リバプール間	九圓四拾錢	七圓拾錢
英國倫敦サウサンプトン間	五圓	三圓六拾錢
瑞典ストツクホルムマルモ間	拾五圓六拾錢	拾壹圓六拾錢
丁抹國コペンハーゲンコルセル間	貳圓九拾錢	貳圓貳拾錢
米國奈港華盛頓間	貳百〇四圓拾錢	百三拾六圓五拾錢
米國奈港紐育間	貳百〇四圓拾錢	百三拾六圓五拾錢

○海軍外國旅費定額表及附則
 海軍外國旅費定額表及附則ヲ定ムルコト左ノ如シ
 二十年十月二十七日
 海軍省令第二十七號海軍一般

官等	旅費等級	客舍料			食卓料	日當支度料
		諸外國	支那	朝鮮		
親任官	一等	八圓	七圓	四圓	錢一圓七十	四圓
將官及同等官	二等	七圓	六圓	三圓	錢一圓五十	三圓
上長官	三等	六圓	五圓	二圓五十	錢一圓二十	二圓三十
士	四等	錢五圓五十	錢四圓五十	錢二圓二十	一圓十錢	二百圓以內
准士官	五等	錢五圓	錢四圓	錢一圓八十	八十錢	二百圓以內
准士	六等	錢四圓五十	錢三圓五十	錢一圓四十	七十錢	百三十圓以內
下士	七等	錢四圓	錢三圓	錢一圓	六十錢	八十圓以內
卒	七等	四圓	三圓	壹圓	五十錢	五十圓以內

官等	旅費等級	客舍料			食卓料	日當支度料
		諸外國	支那	朝鮮		
親任官	一等	八圓	七圓	四圓	錢一圓七十	四圓
將官及同等官	二等	七圓	六圓	三圓	錢一圓五十	三圓
上長官	三等	六圓	五圓	二圓五十	錢一圓二十	二圓三十
士	四等	錢五圓五十	錢四圓五十	錢二圓二十	一圓十錢	二百圓以內
准士官	五等	錢五圓	錢四圓	錢一圓八十	八十錢	二百圓以內
准士	六等	錢四圓五十	錢三圓五十	錢一圓四十	七十錢	百三十圓以內
下士	七等	錢四圓	錢三圓	錢一圓	六十錢	八十圓以內
卒	七等	四圓	三圓	壹圓	五十錢	五十圓以內

附則

- 一文官奏任三等以上ハ上長官同四等以下ハ士官判任一等ハ准士官同二等以下ハ下士生徒及傭員ハ卒ニ準シ表面ノ旅費ヲ支給ス
- 一船舶料及瀛車料ハ本年五月閣令第十二號外國旅費規則第二號表ニ依リ武官准士官及文官判任以上ハ一等ノ額其他ハ總テ二等ノ額ヲ支給ス
- 一船舶料及汽車料ノ實費ヲ給スルトキモ亦前項ノ區別ニ從ヒ其一等定價又ハ二等定價ヲ支給ス但二等ナキ場合ニ在テハ總テ一等定價ヲ支給スヘシ
- 一將校准將校ノ生徒ニ船舶料及汽車料ノ實費ヲ給スルトキハ一等定價ヲ支給ス
- 一傭外國人ハ其身分ノ取扱ニ依リ勅任相當ノ者ハ旅費等級ノ二等奏任相當ノ者ハ同三等判任相當ノ者及別ニ身分取扱ヲ定メサルモ教師ハ同四等ノ額ヲ支給シ其他ハ總テ同七等ノ額ヲ支給ス但船舶料及瀛車料ハ判任相當以上ノ者及教師ハ一等其他ハ總テ二等ノ額ヲ支給シ其實費ヲ給スルトキモ亦之ニ準ス

第二類 第一章 旅費

- 一 在外國ノ我艦船ニ乗組ヲ命シタル者ニハ支度料ヲ支給セズ
- 一 海軍艦船ニテ渡航スルトキハ其艦船乗員ト同一ノ食料ヲ支給シ表面ノ食卓料ハ支給セズ
- 一 行軍及隊伍ノ旅行ハ總テ實費ヲ支給ス單身旅行ト雖モ其職務ヲ帶フル者ハ尙ホ之ニ準ス
- 一 下士以下四人以上同地ニ旅行セシムルトキ及之ヲ引卒セシムル准士官以上ニハ總テ實費ヲ支給ス但特命アル者ハ此限ニ在ラス(廿二年四月二十九日海軍省達第百十二號ヲ以テ改正ス)正廿三年二月一日同第四十號ヲ以テ本項中改正ス
- 一 在留ノ都府若クハ一市内ノ旅行ニハ特令アル者ノ外舟車馬賃ヲ給セズ(二十三年二月二十日海軍省達第六十三號ヲ以テ本項ヲ追加ス)
- 一 外國航海中陸地療養ノ未歸國若クハ歸艦スル者ニハ總テ實費ヲ給ス犯罪ニ依リ歸國若クハ歸艦スル者モ亦之ニ準ス(二十二年四月二十九日海軍省達第百十二號ヲ以テ本項中追加ス)
- 一 外國旅行中非職退職或ハ罷役又ハ退役免役トナリ歸國スル者ハ總テ退官者歸國ノ例ニ依ル
- 一 旅費支給廳ノ區別ハ海軍内國旅費規則第三十二條以下ノ例ニ依ル(二十三年二月一日海軍省達第四十號ヲ以テ本項中改正ス)
- 一 旅行中任官進級等ニ依リ旅費等級變シタルトキハ准士官以上及文官ニハ辭令書日付ノ當日ヨリ相當ノ旅費ヲ給シ下士卒及雇員以下ニハ辭令書本人ニ到達ノ日ヨリ相當ノ旅

費ヲ給ス(二十三年二月一日海軍省達第四十號ヲ以テ本項中改正)

一 前各項ニ該當スルモノ、外ハ總テ本年五月閣令第十二號外國旅費規則ノ支給法ニ依ルモノトス

○旅費其外概算渡前金渡ノ件二十二年十一月二十日勅令第百二十一號

朕旅費其外概算渡前金渡ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第百二十一號

第一條 内國及外國出張ヲ命シタル者ノ旅費ハ旅行ノ見積リ行程及日數ニ依リ概算渡ヲ爲スコトヲ得

第二條 外國留學ヲ命シタル者ニ支給スル學資金及諸手當ハ給額半箇年分以内ニ於テ前金渡ヲ爲スコトヲ得

第三條 地方税ノ補助トシテ國庫ヨリ支出スル府縣警察費連帶支辨金ハ豫算ニ依リ概算渡ヲ爲スコトヲ得

第四條 本令ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

●沿革要領

明治二年八月遠國路費規則ヲ定ム○同年十月前令中ヲ改正ス●四年五月布告ヲ以テ旅費支度料並滞在中宿代月手當等ヲ改正ス●五年二月旅費定則更正ヲ布告ス○同年三月第九十六號布告ヲ以テ旅費定則中第三章ヲ改正ス○同年

第二類 第一章 旅費 沿革要領

五月第五百五十七號布告ヲ以テ旅費定則第四章第八節更正ス○同年十月第三百九號布告ヲ以テ本年二月以後ノ指令ヲ廢止シ更ニ旅費定則ヲ定ム○同年十一月第三百四十八號布告旅費定則條款中ヲ改正ス●六年七月布告第二百四十三號ヲ以テ五年第三百九號布告旅費定則第十章但書中へ増補ス○同年十月布告第三百四十三號ヲ以テ前令第三章中北海道日當ヲ改定ス○同年十一月第三百七十四號達ヲ以テ旅費定則中ニ増加ス●七年二月第二十一號達ヲ以テ旅費定則中着後日當表及第十二章第廿一章ヲ廢シ更ニ滞留日當表及第三章以下ヲ改正ス○同年三月二十九號達各府縣官員管内並旅行並滞留ノ日當表ヲ定ム○同月第三十八號達ヲ以テ旅費定則中第十四章ヲ改定ス○同年四月第四十四號達ヲ以テ前令ヲ改正ス○六年第七十二號達ヲ以テ第二百二十四號達ヲ廢シ旅費定則附録ヲ定ム○同年五月第六十七號達ヲ以テ定則第十章但書ヲ増補ス○同年六月第七十五號達ヲ以テ五年第三百九號布告ヲ廢シ自今一般ノ規則ニ依ラシム○同月第七十七號達ヲ以テ本年第廿一號旅費定則改正第四章中へ但書ヲ追加ス○同月第八十號達ヲ以テ本年第廿一號旅費定則改正第五章但書ヲ改正ス○同年七月第九十號達ヲ以テ同上改正中第三章但書ヲ更正ス○同月第九十一號達ヲ以テ證人トシテ裁判所ニ呼出シタル者旅費日當支給方ヲ定ム○同月第九十七號ヲ以テ定則第九章并日當表中改定ノ旨ヲ達ス○同月第一百一號達ヲ以テ六年第三百四十三號布告第三章ノ内稱大日當一日五里詰ノ廉ヲ廢シ一般ノ日當ヲ賜フ●八年一月第七號達ヲ以テ旅費定則第三章第四章第十一條中ヲ改定ス○同年四月第四十五號達ヲ以テ定則第七章但書ヲ改正ス○同年八月第三百三十九號達ヲ以テ旅費定則ニ外國行ノ部ヲ増補ス●九年一月第三號達ヲ以テ七年第二十九號達中ニ追加ス○同年六月第六十四號達ヲ以テ旅費定則ヲ更定ス○同年九月第八十八號達ヲ以テ八年第四十九號達中ヲ改正ス○同年十二月第十三號達ヲ以テ本年第六十四號達旅費定則中ヲ改正増補ス○同月第二百二十號ヲ以テ定則中内國ノ部へ第廿一章増加ノ旨ヲ達ス●十年二月第二十四號ヲ以テ前令中へ但書追加ヲ達ス○同年八月第五十五號達ヲ以テ旅費定則第二章へ増加ス○同年十月定則第八章第二項ヲ刪除ス●十一年一月第三號達ヲ以テ定則第八章中神官旅費等級ヲ改正ス○同年十月第四十三號達ヲ以テ定則第十九章へ但書ヲ追加ス●十二年十一月第四十三號達ヲ以テ定則第十六章第十七章へ追加ス○同年十二月第四十七號達ヲ以テ定則第二章第六項ヲ改

正ス●十四年十二月第十號達ヲ以テ旅費定則外國ノ部第一章ニ一項ヲ追加ス●十六年二月第七號布告ヲ以テ郡區長旅費支辨方ヲ定ム○同年十二月第五十四號達ヲ以テ旅費定則第七章第十四章中ヲ改正ス○同月第五十六號ヲ以テ定則第八章中神官旅費等級改正ヲ達ス●十七年一月第六號達ヲ以テ定則第五章第七章第九章中ヲ改正ス○同年二月第十九號達ヲ以テ定則第九章ヲ改正ス●十九年六月閣令第十四號ヲ以テ内國旅費規則ヲ定ム○同月内務省令第一號ヲ以テ警察官吏同獄官吏神官及等外吏雇員内國旅費規則ヲ定ム○同年九月同省令第十五號ヲ以テ郡區書記ノ旅費支給方ヲ定ム●二十年五月閣令第十二號ヲ以テ外國旅費規則ヲ定ム

第二章 登用 進級 服務 懲罰 非職

○文官試驗試補及見習規則 二十年七月二十三日 勅令第三十七號

朕文官試驗試補及見習規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
御名 御璽

勅令第三十七號

文官試驗試補及見習規則

第一 通則

第一條 本令ニ於テ文官ト稱スルハ奏任判任ノ文官ヲ總稱シ試補ト稱スルハ勅令第十三號學位令ニ依リ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケ又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ヲ卒業シ又ハ高等試驗ヲ經營選シテ高等官ノ實務ヲ練習スル者ヲ云ヒ見習トハ官

第二類 第二章 登用

立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試験ヲ經當選シテ判任官ノ事務ヲ練習スル者ヲ云フ

本令ニ於テ司法官ト稱スルハ裁判官及檢察官ヲ總稱ス

第二條 第三條第四條ニ掲グルモノヲ除クノ外本令ニ依リ定規ノ試験ヲ經當選シタル者ニアラサレハ試験及見習ニ任命スルコトヲ得ス又實務練習ヲ終リタル者ニアラサレハ本官ニ任スルコトヲ得ス

第三條 三年以上分科大學ノ教授ニ任シタル者ハ高等試験及實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任シ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ノ卒業生ハ高等試験ヲ要セス試験ニ任スルコトヲ得

司法官タルノ資格ヲ有スル者ニシテ他官ヨリ司法官ニ轉スルトキ又ハ司法官タルノ資格ヲ有シ三年以上代官タル者ハ實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第四條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試験ヲ要セス判任官見習ヲ命スルコトヲ得

第五條 試験ヲ分テ高等試験普通試験ノ二種トス

高等試験ハ試験ニ任用セラレンコトヲ望ム者ノ爲ニシ普通試験ハ判任官見習ニ任用セラ

レンコトヲ望ム者ノ爲ニス

第六條 試験ハ筆記口述ノ二様トス筆記試験ニ落第シタル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第七條 試験ハ筆記口述ノ二様ニ就キ各科目ノ點數ヲ合算シタル一定ノ平均點數ヲ以テ合格ヲ定メ時々官廳ノ需要ニ應シ人員ヲ限リ内閣ニ於テ合格者中ヨリ選抜シテ當選者ヲ定ム但一科目ニ付一モ點數ナキ者ハ合格者トスルコトヲ得ス

第八條 前條ノ選抜ニ當ラサル者ハ合格者ト雖モ再ヒ文官ノ任用ヲ望ムトキハ更ニ本令ニ依リ試験ヲ受クヘシ

第九條 試験ニ必要ノ參考書類及紙墨ハ試験室ニ備ヘ置キ受験人之ヲ攜帶スルコトヲ許サス

第十條 試験當選者ノ姓名ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十一條 第九條ヲ犯シ若クハ不正ノ方法ヲ以テ當選シ他日其事ノ發覺シタルトキハ當選ノ効ナキモノトス

第十二條 第九條ヲ犯シタル者及第十一條ノ處分ヲ受ケ又ハ不正ノ方法ヲ以テ當選セント企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十三條 第十八條第二十三條第三十三條第三十六條ノ履歷書中事實ヲ隱匿シ又ハ之ヲ偽リタル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十四條 試験ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 本令施行ノ後五箇年間ハ事務練習中ト雖モ本官ノ缺アルトキハ其練習ノ滿期ヲ待スシテ本官ニ任スルコトアルヘシ

五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者ニシテ高等試験ヲ經當選シタル者ハ事務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第二 高等試験

第十六條 高等試験ハ各官廳ノ須要ニ從ヒ時々東京ニ於テ試験委員之ヲ行フ其期日及場所ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十七條 高等試験ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ

- 一 丁年以上ノ男子
 - 一 外國ニ於テ大學校又ハ之ト同等ナル學校ノ卒業證書ヲ有シ又ハ三年以上其學科ヲ修學シタル旨ヲ證明スル證書ヲ有スル者
 - 一 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者
 - 一 高等中學校及東京商業學校ノ卒業證書ヲ有スル者
 - 一 五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者
- 第十八條 試験願書ハ其時々官報ヲ以テ公告スル期日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ試験委員長

ニ差出スヘシ

一 出願者ノ履歷書

一 第十七條ニ掲グル卒業證書及修學證書ノ寫

一 身分職業年齢及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第十九條 高等試験ノ科目ハ試験ヲ行フ年毎ニ司法官又ハ行政官ノ別ニ依リ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ文官試験局長官之ヲ選定シ試験ノ期日三箇月前ニ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第二十條 第三條第四條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外教官技術官其他特別ノ學術技藝ヲ要スルモノハ別段ノ試験法ヲ定ムルマテ各官廳ノ需要ニ從ヒ試験ヲ經スシテ之ヲ任用スルコトヲ得

第三 試補

第二十二條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ定限ヨリ短カラサル期間事務ヲ練習スヘシ

第二十二條 各官廳試補ノ定員ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第二十三條 法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ノ卒業生ニシテ行政官又ハ司法官ノ試補ヲランコトヲ望ム者ハ左ノ書類ヲ取添其旨ヲ文官試験局長官ニ出願スヘシ
(二十一年十二月二十八日勅令第九十八號ヲ以テ(取添)ノ下(高等試験期日三十日前ニ)十一字ヲ削除ス)

一 出願者ノ履歷書

第二類 第二章 登用

一 學位又ハ卒業證書ノ寫

一 身分年齢

第二十四條 行政官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ地方官廳一箇年半ハ中央官廳ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十五條 司法官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半ハ治安裁判所一箇年半ハ始審裁判所ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十六條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習スルニ付テハ其主務長官ノ指揮監督ヲ受クヘシ

第二十七條 主務長官ハ事務練習ノ終ニ於テ試補練習ノ功程ヲ所屬大臣ニ具狀シ其意見ヲ提出スヘシ

第二十八條 所屬大臣ハ練習期限中ト雖モ試補官吏ニ必要ナル品位ヲ失ヒタルモノト認ムルトキハ試補ヲ免スヘシ

第二十九條 在職ノ判任官ニシテ高等試験ヲ經當選シタル者ハ事務練習ヲ要セス缺員アル場合ニ於テハ直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第三十條 試補ノ命ヲ承ケ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習セサル者ハ試補ヲ免スヘシ

第四 普通試験

第三十一條 中央官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ各官廳ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々其官廳ヨリ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十二條 地方官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ又官廳ノ需ニ應シ府縣ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々普通試験委員長ヨリ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十三條 試験願書ハ本人自ラ之ヲ認メ其時々公告スル期日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ普通試験委員長ニ差出スヘシ

一 出願者ノ履歴書

一 身分職業年齢及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第三十四條 普通試験ノ科目ハ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ普通試験委員之ヲ選定シ文官試験局長官ノ認可ヲ經テ試験ノ期日一箇月前ニ官報又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第五 判任官見習

第三十五條 各官廳ハ其需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試験ニ及第シタル者ニ判任官見習ヲ命スヘシ

判任官見習ヲ命セラレタル者ハ所屬長官ノ指命スル所ニ就キ二箇年ヨリ短カラサル期限

第二類 第二章 登用

間事務ヲ練習シ判任官ノ缺員ヲ待テ本官ニ任セラルヘシ

第三十六條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受ケル私立法學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ判任官見習タランコトヲ望ム者ハ普通試験期日三十日前ニ左ノ書類ヲ添ヘ主務官廳ニ出願スヘシ

一 出願者ノ履歷書

一 卒業證書ノ寫

第三十七條 所屬長官ハ判任官見習官吏ニ必要ナル品位ヲ失ヒタル者ト認ムルトキハ判任官見習ヲ免スルコトヲ得

第三十八條 本令施行ノ前二箇年以上各官廳ニ於テ雇員トナリタル者ニシテ事務ニ熟練シタル者ト本屬長官ニ於テ認ムルトキハ試験ヲ要セス直ニ判任官ニ任スルコトヲ得

第三十九條 本令ハ明治二十一年一月ヨリ施行ス

○文官試験試補及見習規則ニ關スル細則 二十年七月二十三日 閣令第十八號

勅令第三十七號文官試験試補及見習規則ニ依リ細則ヲ定ムルコト左ノ如シ

文官試験試補及見習規則ニ關スル細則

第一條 高等試験ハ左ノ科目中司法官ハ五科目以上行政官ハ三科目以上ヲ以テ試験ヲ行

フノ定限トシ試験ノ期日及場所ト共ニ三箇月以前ニ文官試験局長官官報ヲ以テ之ヲ公告ス (二十二年七月二日閣令第二十二號ヲ以テ第二項ヲ削除ス)

- 一 民法
- 二 訴訟法
- 三 刑法
- 四 治罪法
- 五 商法
- 六 憲法
- 七 行政
- 八 財政
- 九 理財
- 十 國際法

第二條 (同上ヲ以テ本條ヲ削除ス)

第三條 高等試験ハ國語及漢字交リノ文ヲ以テ之ヲ行フ特ニ外國語及外國文ヲ以テ試験ヲ受ケンコトヲ願フ者ハ豫メ文官試験局長官ノ許可ヲ受ケヘシ

第四條 勅令第三十七號文官試験試補及見習規則第三條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外敎官技術官其他特別ノ學術技藝ヲ要スル者ノ試験ヲ爲ストキハ其試験ノ科目ハ試験ノ期

第二類 第二章 登用

日及場所ト共ニ三箇月以前ニ文官試験局長官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第五條 高等試験ハ勅奏任官ニシテ文官試験局長ノ許可ヲ得タル者ノ外傍聽ヲ許サス

第六條 筆記試験ハ受験人總員ヲ一室又ハ數室内ニ閉鎖シ一室毎ニ試験委員一名監視シテ之ヲ行フヘシ但受験人一名ナルトキハ試験委員二名監視スルヲ要ス

第七條 筆記試験ノ問題ハ試験局長官定ムル所ノ方法ニ依リ各受験人ヲシテ之ヲ知悉セシメ豫定ノ時間内ニ答辯書ヲ差出サシムヘシ

第八條 筆記試験ノ問題ノ數ハ各科目ニ付試験委員ノ議定シタル所ニ依ル

第九條 試験室ニ備ヘ置クヘキ必要ノ參考書類ハ法律類集官報其他公然ノ法章ニ限ル

第十條 口述試験ハ筆記試験ヲ終リタル後試験委員長ノ上席ヲ以テ試験委員半數以上ノ列席ニ於テ受験人一名毎ニ試問シテ即時答辯ヲ爲サシムヘシ(二十二年七月二日閣令第二十一號ヲ以テ本條中改正ス)

第十一條 口述試験ハ各受験人ニ付半時間以上一時間以内トス

第十二條 高等試験ハ受験人ノ果シテ學理上ノ原則ニ通曉スルヤ現行ノ法律命令ヲ解得スルヤ又法律命令ヲ實務ニ應用シ及之ヲ口述スルニ確實敏捷ナルヤ否ヲ試験スルヲ以テ目的トスヘシ

第十三條 高等試験ヲ經タル各科目ノ點數及其全體ノ効果ニ關シ合格者ヲ定ムルハ試験委員ノ議定シタル平均點數ニ依ル

第十四條 當選者ハ各合格者ニ就キ試験委員長ノ具狀スル所ニ依リ各官廳ノ需要ニ應シ

人員ヲ限リ内閣ニ於テ之ヲ定ム

第十五條 前條ノ合格者中ヨリ當選者ヲ查定スルハ其試験ヲ行ヒタル日ヨリ四週間以内ニ之ヲ結了シ官報ヲ以テ其姓名ヲ公告スヘシ

第十六條 試験委員長ハ試験委員ノ職務ニ屬スル議決ノ數ニ入ラス若シ其議決ニ關シ試験委員ノ説可否相半スルトキハ試験委員長ノ定ムル所ニ依ル

第十七條 受験人ハ其試験ヲ受クルノ際試験手續ニ關スル規則及試験委員ノ命令ヲ遵守スヘシ犯ス者ハ監視ノ試験委員ニ於テ退室ヲ命シタルノ後之ヲ試験委員長ニ報告シ其試験ヲ拒ムコトヲ得

第十八條 高等試験ノ手續ニ關スル細目ハ文官試験局長官ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 普通試験ニ關スル細則ハ文官試験局長官ノ認可ヲ經各官廳ノ普通試験委員ノ定ムル所ニ依ル

○高等試験手續 二十一年十二月二十六日 文官試験局定
高等試験手續左ノ通相定

高等試験手續

第一條 文官試験試補及見習規則第十八條ノ試験願書ハ書式ニ從ヒ試験期日二十日前迄ニ差出スヘシ其履歷書ニハ生年月住所ノ移動學事及職業ノ經歷賞罰身代限ノ有無等ヲ詳記シ品行ニ關スル證書アラハ其寫ヲ添ヘシ

第二類 第二章 登用

- 第二條 外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ノ卒業證書ヲ有シ又ハ三年以上其學科ヲ修メタル旨ヲ證明スル書類ヲ有スル者ハ內國若クハ外國ニ於テ修メタル大學豫備ノ學科又ハ其他特ニ修メタル學科アルトキハ之ヲ履歷書中ニ詳記シ證書アラハ其寫ヲ添ヘシ
- 第三條 高等中學校及高等商業學校(舊東京商業學校)ノ卒業證書ヲ有スル者別ニ法律政治又ハ理財ノ學科ヲ修メタルトキハ之ヲ履歷書中ニ詳記シ證書アラハ其寫ヲ添ヘシ
- 第四條 五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者法律政治又ハ理財ノ學科及之ニ要スル豫備ノ學科ヲ修メタルトキハ之ヲ履歷書中ニ詳記シ證書アラハ其寫ヲ添ヘシ
- 第五條 兵役ニ關スル區戶長ノ證書ハ免役及猶豫ヲ證明シタル者タルヘシ
- 第六條 試験出願者文官試験局ニ於テ定メタル日時ニ出席セサルトキハ當期ノ試験ヲ受クルコトヲ得ス
- 第七條 受験人多クシテ同日ニ試験ヲ施行スル能ハサルトキハ試験委員ニ於テ試験期日ヲ異ニスルコトヲ得ヘシ
- 第八條 高等試験ノ科目ハ文官試験局長官各官廳ノ須要ニ從ヒ所定ノ科目中ヨリ之ヲ定メテ公告スルモノトス
- 第九條 試験委員ハ受持試験ノ二日前ニ筆記試験問題ヲ試験委員長ニ差出スヘシ
- 第十條 試験ハ午前九時ニ始リ正午ニ終ル試験室ハ九時十分前ニ開キ九時ニ閉ツルモノトス但口述試験ハ午後ニ亘ルコトアルヘシ

- 第十一條 文官試験局ハ受験人名簿ヲ調製シ各受験人ノ番號ヲ定メテ記入シ之ヲ受験人ニ通知スルモノトス
- 第十二條 試験委員ハ筆記試験ノ終リタル後二週間以内ニ答辯書ヲ添ヘテ試験成績ノ報告ヲ試験委員長ニ差出スヘシ
- 第十三條 試験委員ハ口述試験ヲ終リタル後二日以内ニ試験成績ノ報告ヲ試験委員長ニ差出スヘシ
- 第十四條 各科目ノ點數ハ一百ヲ以テ滿點トシ各科目ノ點數ヲ通計シ得ル所ノ和ヲ科目ノ數ヲ以テ除シ得タルモノヲ平均點數トス平均點數ハ六十點ヲ以テ最下限トス但一科目ノ點數五十二達セサル者ハ合格者トスルコトヲ得ス
- 第十五條 高等試験ハ通常毎年十月ニ於テ之ヲ施行スルモノトス
- 第十六條 受験人ハ試験時間中退室スルコトヲ得ス退室シタルトキハ當期ノ試験ヲ受クルヲ得サルモノトス
- 第十七條 受験人ハ室内ニ在リテ靜肅ヲ旨トシ舉措進退總テ試験委員ノ指揮ニ遵フヘシ
- 第十八條 受験人ハ試験問題ニ就キ試験委員ニ質問スルコトヲ得ス
- 第十九條 受験人ハ午前八時三十分マテニ受験人控所ニ參集シ當日ノ試験ヲ了リタル後ハ直ニ退出スヘシ
- 第二十條 答辯書ハ其主意ヲ明瞭ニ記載シ文字ハ楷書若クハ行書ニテ分明ニ記スヘシ

第二十一條 受験人ハ試験答辯書ニ豫定ノ番號ヲ記スヘシ其姓名ヲ掲クルコトヲ得ス
第二十二條 受験人ハ書類ヲ携帶シテ室内ニ入ルコトヲ得ス

(書式略之)

○文官試験方

二十三年二月四日
勅令第八號

朕文官試験ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第八號

第一條 前ニ奏任文官ヲ勤メタル者及滿三年以上判任文官ヲ勤續シタル者ハ明治二十年
勅令第三十七號ニ依リ高等試験ヲ受クルコトヲ得

第二條 明治二十年勅令第三十七號ニ依リ高等試験ヲ受ケテ合格シタル者ハ文官試験局
長官ヨリ高等試験合格證書ヲ付與スヘシ

高等試験合格證書ヲ得タル者ハ官廳ノ需要アルニ當リ高等官試補ニ任スルコトヲ得
第三條 滿三年以上奏任文官ヲ勤メ退官シタル者及滿五年以上判任文官ヲ勤メ退官シタ
ル者ハ試験及事務練習ヲ要セスシテ前官同等若ハ其ノ以下ノ文官ニ任スルコトヲ得

第四條 奏任又ハ判任ノ文官ヨリ轉任シタル官立學校ノ教官及府縣立學校ノ職員ハ更ニ
前官同等若ハ其ノ以下ノ文官ニ轉任スルコトヲ得

第五條 各官廳ハ其ノ需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ此ト同等ナル官立府縣立學校及

特別認可學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ明治二十年勅令第三十七
號ニ依リ普通試験ニ及第シタル者ヲ擧ケテ直チニ判任文官ニ任スルコトヲ得

第六條 試験ハ本邦ノ成法慣例及一般ノ學理ヲ以テ問題ト爲スヘシ但シ受験者應答ヲ爲
スニ當リ外國ノ法例ヲ參照ニ引擧スルコトヲ得

特別ノ必要ニ依リ外國語ヲ試験問題ト爲スハ前項ノ限ニ在ラス
第七條 本令ハ明治二十年勅令第三十七號第二十條ニ依リ試験ヲ經スシテ任官シタル者
並ニ明治二十一年以後郡區長ノ試験ニ及第シテ任官シタル者ニ適用セス

○文官試補及見習ノ待遇並ニ任用方
二十年十一月五日
勅令第五十七號

朕試補及見習ノ待遇並ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第五十七號

本年七月勅令第三十七號文官試験試補及見習規則ニ據リ試補見習ヲ命セラレタル者ノ待遇
ハ試補ヲ奏任トシ見習ヲ判任トス

同則ニ據リ試補及見習ヲ本官ニ任用スルニハ試補ハ奏任官四等以下トシ見習ハ判任官五
等以下トス

○會計検査官任用資格

二十二年六月五日
勅令第八十號

朕會計検査官資格ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第二類 第二章 登用

御名 御璽

勅令第八十號

會計検査院法第六條ニ依リ會計検査官ハ左ノ資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス

第一 年齢滿三十歳以上ノ者

第二 五年以上検査官補又ハ五年以上他ノ高等行政官タル者但試補勤務年數ハ之ヲ算ス

○高等試験及實務練習ヲ要セス司法官ニ任スルノ件

二十年七月二十三日 閣令第十九號

四箇年以上裁判官檢察官ノ職ヲ奉シ他ニ轉官シ又ハ四箇年以上舊參事院議官又ハ議官補ノ職ヲ奉シタル者四箇年以上司法省ノ民事局長刑事局長又ハ參事官ノ職ヲ奉シタル者及
代言人試験ニ及第シ五箇年以上代言人タル者ハ當分ノ内高等試験及實務練習ヲ要セスシ
テ司法官ニ任スルコトヲ得

○教官技術官ノ資格ヲ有スル者行政官ニ任用ノ件

二十年十一月五日 勅令第五十八號

朕教官技術官ノ資格ヲ有スル者ヲ以テ行政官ニ任用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第五十八號

各般ノ學務及特別ノ學術技藝ニ關スル行政官ハ教官技術官ノ資格ヲ有スル者ヲ以テ之ニ

任用スルコトヲ得

○技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル者任用方

二十年十二月二十八日 閣令第二十八號

本年七月 勅令第三十七號文官試験試補及見習規則第二十條ニ據リ別段ノ試験法ヲ定ムルマ
テハ技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル者ヲ任用スルニハ左ノ例規ニ依ルヘシ

一 奏任官ハ本則第三條ニ準シ各種ノ學術技藝ニ就キ一定ノ資格アル者又ハ第十七條ニ
準シ其經歷ニ依リ相當ノ資格アリト認ムヘキ者ヲ選ヒ本人ノ履歷學術技藝ニ關スル
證書ノ寫身分年齢等ノ書類ヲ添ヘ文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經各省大臣ヨリ奏聞ノ
手續ニ及フヘシ (二十三年三月二十七日閣令
第二號ヲ以テ本項ヲ改正ス)

一 判任官ハ本則第四條ニ準シ各種ノ學術技藝ヲ修メ一定ノ資格アル者ヲ命シ其他ノ者
ハ經歷ニ依リ相當ノ資格アリト認ムヘキ者ヲ選ヒ本人ノ履歷學術技藝ニ關スル證書
ノ寫身分年齢等豫メ普通試験委員長ノ調査ヲ經テ之ヲ命スヘシ

本年七月 勅令第三十七號文官試験試補及見習規則其他之ニ關スル法令中試験ニ關スル條項
ノ外通則試補判任官見習ニ就キ規定シタルモノハ技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スルモノ
ニモ適用スルモノトス

○技術官タルノ資格ヲ有スル者本官ニ任用方

二十四年九月十四日 勅令第九十一號

朕技術官タルノ資格ヲ有スル者ヲ直チニ本官ニ任用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第九十一號

技術官タルノ資格ヲ有スル者ハ實務練習ノ必要ナシト認ムル場合ニ限り直チニ本官ニ任用スルコトヲ得

○郡區長任用方

二十三年二月四日 勅令第九號

朕郡區長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第九號

第一條 郡區長ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官五等以上ノ現職ニ在ルモノニ限り當分ノ内試験ヲ要セス郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經テ郡區長ニ任用シタル者他ノ道廳府縣ノ郡區長ニ轉任スルトキハ更ニ郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經ヘシ

第三條 郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經テ任用シタル郡區長ハ高等試験ヲ經ルニアラサレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○郡區長ノ試験ニ關スル條規

二十年十二月二十九日 內務省令第五號

郡區長ノ試験ニ關シ左ノ條規ヲ定ム

第一條 郡區長ノ試験ハ左ノ科目ヲ以テ內務省ニ於テ之ヲ行フ

一 就職スヘキ地方ノ風土慣例及物産

一 郡區長職務ニ必要ナル法令

一 郡區長職務ニ關スル公文ノ立案

第二條 郡區長ノ試験ヲ受クルハ滿二十年以上ノ者タルヘシ但該地方ニ於テ五箇年以上奏任官又ハ郡區長ノ職ヲ奉シタル者ハ此限ニアラス

第三條 試験出願者ハ願書ニ就職スヘキ地名ヲ記入シ履歷書ヲ取添ヘ北海道廳又ハ府縣廳ヲ經テ試験委員長ニ差出スヘシ

第四條 試験委員ハ內務大臣內務省ノ高等官若クハ他官廳ノ高等官ヨリ選テ之ヲ命シ又ハ囑託シ內務省總務局長ヲ以テ委員長トス

第五條 試験委員ハ必要アル場合ニ於テハ問題ヲ選定シテ北海道廳長官府縣知事ニ送付シ該地方高等官二名以上ノ列席ニ於テ其應答ヲ爲サシムルコトヲ得

第六條 試験ノ手續ニ關スル細目ハ試験委員長ノ定ムル所ニ依ル

○北海道郡區長試験ヲ要セス判任官ヨリ任用方
二十二年一月二十五日 閣令第三號
北海道廳ノ郡區長ハ當分ノ内三箇年以上北海道廳ノ官務ニ從事シ判任官五等以上ニ叙セラレ現ニ在官セル者ニ限り試験ヲ要セス郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經テ郡區長ニ任スルコトヲ得

○北海道集治監分監長及北海道廳典獄特別任用方

二十四年七月二十四日 勅令第一百三號

第二類 第二章 登用

朕北海道集治監分監長及北海道廳典獄特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第百十三號

第一條 北海道集治監分監長及北海道廳典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ現ニ判任官六級以上ノ俸給ヲ受クル者ニ限り當分ノ内試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル北海道集治監分監長及北海道廳典獄ハ高等試験ヲ經ルニ非サレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

附則

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○府縣參事官及典獄特別任用令

二十三年十月十日
勅令第百二十七號

朕府縣參事官及典獄特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第百二十七號

府縣參事官典獄特別任用令

第一條 府縣參事官並典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官三等以上ノ現職ニ在ル者ニ限り當分ノ内試験ヲ要セス高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル府縣參事官並典獄ハ高等試験ヲ經ルニ非レハ各他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○府縣立師範學校長特別任用令

二十四年八月十八日
勅令第百七十三號

朕府縣立師範學校長特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第百七十三號

府縣立師範學校長特別任用令

第一條 府縣立師範學校長ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者若クハ本令施行ノ際尋常師範學校長ノ現職ニ在ル者又ハ五箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シ現ニ四拾圓以上ノ月俸ヲ受クル判任官又ハ判任待遇ノ者ニ限り當分ノ内試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ任用シタル府縣立師範學校長ハ高等試験ヲ經ルニ非サレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

附則

第三條 本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

○高等商業學校卒業證書ヲ有スル者判任官見習ニ任用方

二十二年三月二十日
閣令第十號

高等商業學校主計專修科ノ卒業證書ヲ有スル者普通試験ヲ要セス各官廳判任官見習ヲ命

第二類 第二章 登用

スルコトヲ得

○認可學則ニ依リ卒業證書ヲ有スルモノハ普通試験ヲ要セス判任官見習ヲ命スル件二十二年十月十二日 閣令第二十六號

文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試験ヲ要セス各官廳判任官見習ヲ命スルコトヲ得

○東京農林學校及舊駒場農林學校卒業生任用方二十二年十月三日 二十三年六月十一日 勅令第一百十號

令第九十二號ヲ以テ東京農林學校ヲ帝國大學文科トス

朕東京農林學校及舊駒場農學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第一百十號

東京農林學校及舊駒場農學校本科卒業生ハ高等試験ヲ要セス其修メタル學科ニ關スル行政官試補ニ同校別科、舊速成科、舊簡易科、及舊駒場農學校別科卒業生ハ普通試験ヲ要セス其修メタル學術ニ關スル判任官見習ニ採用スルコトヲ得

○札幌農學校卒業生任用方二十二年十二月二十五日 勅令第一百三十七號

朕札幌農學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第一百三十七號

札幌農學校農學科及工學科卒業生ハ高等試験ヲ要セス其修メタル學科ニ關スル行政官試補ニ採用スルコトヲ得

○判任官高等試験ヲ受ケ本官ニ任スルノ件二十年十二月二十五日 勅令第六十四號

朕判任官高等試験ヲ受クルコトヲ得ルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六十四號

本年七月 勅令第三十七號文官試験試補及見習規則施行ノ後五箇年間又ハ五箇年以上官務ニ従事シ判任官五等以上ニ叙セラレタル者ハ同則第十七條第五項ニ準シ高等試験ヲ受クルコトヲ得其當選シタル者ノ本官ニ任スルハ同則第二十九條ニ據ル

○在職判任官ニテ直ニ本官ニ任スル年限二十年十一月七日 閣令第二十三號

本年七月 勅令第三十七號文官試験試補及見習規則第二十九條在職判任官ニシテ直ニ本官ニ任スルヲ得ル者ハ在職二年ニ滿ル者ニ限ル若二年ニ滿サル者ハ先試補ニ任用シ前後通算シテ二年ニ滿ルヲ待テ本官ニ任スルモノトス

○外務省派遣清國留學生判任官ニ任用方二十二年二月二十五日 閣令第五號

外務省派遣清國留學生卒業生ニシテ在清國公使領事館又ハ在香港領事館附語學生ト爲リ事務ヲ練習シタル者ハ直ニ同省判任官ニ任スルコトヲ得

○稅關監吏及監吏補任用方二十三年七月二十四日 勅令第四百四十四號

第二類 第二章 登用

朕税關監吏及監吏補任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第四百四十四號

税關監吏及監吏補ハ大藏大臣別ニ試験規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ得其規則ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉任スルコトヲ得ス

○鐵道廳驛長任用方二十三年九月五日 勅令第二百號

朕鐵道廳驛長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二百號

鐵道廳驛長ハ鐵道廳長官別ニ試験規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ得
本令發布以前ヨリ驛長ノ職ニ就キ現ニ其事務ヲ執ルモノハ試験ヲ要セス直ニ驛長ニ採用スルコトヲ得
前二項ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試験ヲ經ルニ非ラサレハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

○陸海軍士官並同等官以上試験ヲ要セス文官ニ任用方二十年十二月二十五日 勅令第六十三號

朕陸海軍士官並同等官以上ノモノ文官ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六十三號

陸海軍士官並同等官以上ノモノハ更ニ試験ヲ要セス文官ニ任用スルコトヲ得

○陸軍下士文官採用規則二十年十二月二十八日 勅令第八十三號

朕陸軍下士文官採用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第八十三號

陸軍下士文官採用規則

第一條 陸軍下士ニシテ左ニ掲クル者ハ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得(二十三年五月二十日勅令第八十六號ヲ以テ本條ヲ改正ス)

一 戰役若クハ公務上ノ傷痍疾病ニ因リ免官シ尙文官ノ勤務ニ堪ヘ且伎倆證明書ヲ所持スル者(同上)

二 現役七箇年以上服役滿期ノ下士ニシテ伎倆證明書ヲ所持スル者(同上)

第二條 陸軍下士ハ本人ノ請願ニ因リ前條恰當ノ者ハ試験ヲ要セスシテ判任官トナルコトヲ得(同上)

第三條 海軍省ヲ除クノ外各官廳ニ於テ判任官ヲ任用スルニハ少クモ五人ニ付一人ハ陸軍下士ノ文官請願者ヲ以テス可キモノトス

第二類 第二章 登用

第四條 文官タラシクコトヲ望ム者ハ服役滿期前一箇月間又滿期若クハ免役後三箇月間ニ之ヲ請願ス可シ(二十三年五月二十四日勅令第八十六號ヲ以テ本條改正ス)

第五條 請願者ニ於テ教官技術官タラシクコトヲ望ム者アルトキハ之ヲ採用セントスル官廳ニ於テ相當ノ試験ヲ施行スルコトヲ得

第六條 請願者ノ名簿ハ本人請願ノ順序ニ從テ調製シ之ヲ陸軍省ニ備置ク可シ

第七條 請願者ノ採用ハ其同年内ニ係ルモノハ第一條各項ノ順序ニ從ヒ其同項内ニ於テハ服役時日ノ多キ者ヨリ採用シ其服役時日ノ同シキ者ハ請願時日ノ順序ニ從ヒ採用ス可シ

第八條 各官廳ニ於テ請願者ヲ採用スルキハ陸軍省ニ照會シ直ニ本人ヲ其廳ニ呼出ス可シ本人ノ伎倆及任務ノ必要ニ依リテハ前項ノ順序ニ拘ハラズ採用スルコトアルヘシ(同上ヲ追加ス)

第九條 陸軍省ニ於テハ前條ノ照會ニ依リ第七條ニ照シ請願者ノ氏名及履歷書ヲ其官廳ニ交付ス可シ

第十條 請願者ニ於テ其請願ヲ取消サント欲スルトキハ陸軍省ニ届出可シ

第十一條 本則施行ニ要スル細則及伎倆證明書ノ規程ハ陸軍大臣之ヲ定ム可シ(同上ヲ以テ改正ス)

○陸軍下士文官採用細則二十一年二月二十三日 陸軍省令第二號

陸軍下士文官採用細則左ノ通定ム

陸軍下士文官採用細則

第一條 本則本則トアルモノハ陸軍下士文官採用規則ヲ云フ以下倣之 第一條ニ因リ文官奉職ヲ請願セント欲スル者ニシテ第一項ニ該當スル者ハ第一書式第二項ニ該當スルモノハ第二書式及第三書式ニ據ルヘシ

第一書式料紙美濃紙以下倣之

某 儀

某戰役(公務上)ノ傷痕(疾病)ニ因リ過ル年月日免官相成候ニ付陸軍下士文官採用規則ニ因リ文官奉職仕度候間御採用相成度別紙履歷書陸軍出身後ノ經歷及賞罰等ヲ詳細ニ記載シ正副ニ通差出スヘシ以下履歷書トアルモノ倣之 並ニ診斷書診斷書トハ傷痕若クハ疾病ヲ證スルメ豫テ下附セラレタルモノヲ云フ 及伎倆證明書寫相添此段奉願候也(二十三年八月令第二十五號ヲ以テ本項中改正ス)

道廳(府)(縣)(國郡)(區)(町)(村)族籍

元何官

年月日

姓名印

年號月日生
年號月何年何箇月

陸軍大臣爵姓名殿

前書之趣調査候處相違無之候也

第二類 第二章 登用

道廳(府)(縣)郡(區)町(村)戶長

姓 名 印

年月日
第二書式

某 儀

來ル(過ル)年月日現役滿期相成候ニ付陸軍下土文官採用規則ニ因リ文官奉職仕度候
間御採用相成度別紙履歷書並ニ伎倆證書寫相添此段奉願候也(二十三年八月三十日陸軍省令
第二十五號ヲ以テ本項中改正)

兵種隊號(所管)豫備役(後備軍)(艦員)

官 姓 名 印

年 號 月 日 生
年 號 月 何 年 何 箇 月

(所管長官)

職官姓名殿

第三書式

某 儀

過ル年月日現役滿期相成候ニ付陸軍下土文官採用規則ニ因リ文官奉職仕度候間御採
用相成度別紙履歷書並ニ伎倆證書寫相添此段奉願候也(上)(同)

道廳(府)(縣)國郡(區)町(村)族籍

元何官

年月日

姓

名 印

年 號 月 日 生
年 號 月 何 年 何 箇 月

陸軍大臣爵姓名殿

前書之趣調査候處相違無之候也

道廳(府)(縣)郡(區)長(村)戶長

姓 名 印

年月日

第二條 本則第五條ニ因リ教官技術官タラシコトヲ望ム者及其官廳ニ限リ奉職センコト
ヲ望ム者ハ其志願ノ廳名ヲ願書中ニ記載シ又教官技術官志願ノ者ニ在テハ其習得セシ
學術ヲ履歷書中ニ記載シテ差出ス可シ

但教官技術官タルノ志願ヲナシ合格セサル者ハ更ニ普通判任官タルヲ請願スルコト
ヲ得

第三條 本則第一條ノ資格ヲ有スト雖モ服役以來左ノ項目ニ觸ル、者ハ請願スルヲ得ス
又既ニ請願ノ者ハ其請願無効ニ屬ス

- 一 禁錮ノ刑ニ處セラレタル者
- 一 賭博犯ニ付懲罰ニ處セラレタル者

第四條 本則第一條ニ因リ請願スル者アルトキハ所管長官又ハ北海道廳長官府縣知事ニ
於テ其請願書類ヲ審査シ陸軍大臣ニ進達ス可シ

第五條 本則第五條ニ因リ各官廳ニ於テ試験ヲ爲セシトキハ其試験ノ科目及ヒ合格不合
第二類 第二章 登用

格ノ旨ヲ直ニ陸軍省ニ通牒スルモノトス

第六條 各官廳ニ於テ請願者ヲ採用セシ上ハ直ニ其官等ヲ陸軍省ニ通牒スルモノトス
第七條 教官技術官ヲランコトヲ望ム者受験ノ爲メ官廳ニ往復スル旅費ハ總テ自辨タルヘシ

第八條 本則第十條ニ因リ其請願ヲ取消サント欲スルトキ又ハ請願者ノ身上ニ異動ヲ生シ或ハ轉居轉籍若クハ處刑等ニテ履歷上改正ヲ要スルコトアルトキハ其旨ヲ詳記シ最初願出ノ手續ニ因リ届出ツ可シ

○海軍准士官並服役滿期ノ下士判任官ニ任用方

二十一年十二月二十五日 勅令第六十五號

朕海軍准士官並服役滿期下士判任文官ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六十五號

海軍准士官並服役滿期ノ下士ハ普通試験ヲ要セス海軍省遞信省鐵道局ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

○陸地測量官任用規則

二十二年三月十四日 勅令第三十五號

朕陸地測量官任用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第三十五號

陸地測量官任用規則

第一條 陸地測量師ハ陸地測量手中其任ニ適スル者ヲ選ニ陸地測量部修技所ニ於テ二箇年以上高等ノ學科ヲ修業セシメ卒業シタル者ヲ以テ之ニ任ス

第二條 陸地測量部修技所生徒ノ卒業シタル者ヲ以テ之ニ任ス

第三條 本則ニ依リ陸地測量官ニ任セラレタル者他ノ技術官ニ轉任セントスルトキハ技術官任用ノ例規ニ依ル但他ノ技術官ヨリ轉任シタル者ハ此限ニアラス

第四條 本則第一條第二條ニ掲クルモノ、外技術官其他學術技藝優等ノ者ニシテ陸地測量部ニ於テ實地試業ノ上適當ト認ムルトキハ陸地測量官ニ轉任セシメ若クハ任用スルコトヲ得

第五條 本則施行ノ前陸地測量部ニ出仕スル技術官陸軍屬又ハ官員ニシテ陸地測量事業ニ從事シ學術技藝優等ナル者ハ陸地測量官ニ轉任セシメ若クハ任用スルコトヲ得

○理事主理試験及試補ノ事務練習方

二十一年三月十五日 勅令第十號

朕理事主理ノ試験及試補ノ練習ニ關スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第十號

理事及主理ハ高等試験ニ於テ司法官ノ例ニ依リ理事試補ハ陸軍省若クハ陸軍軍法會議主理試補ハ海軍省若クハ海軍軍法會議ニ於テ二年以上事務ヲ練習セシム

○海軍高等武官任用條例

二十二年七月四日 勅令第九十一號

第二類 第二章 登用

朕海軍高等武官任用條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第九十一號

海軍高等武官任用條例

- 第一條 海軍高等武官ハ少尉候補生少機關士候補生少軍醫候補生少藥劑官候補生少主計候補生ヨリ任用ス(二十四年一月四日勅令第二號ヲ以テ少尉候補生ノ下ニ少機關士候補生ノ七字ヲ加フ)
海軍ノ官費生徒ト爲リ外國ニ留學シ適當ノ卒業證書ヲ得タル者ハ其成績ニ應シ特ニ其學科相當ノ本官ニ任スルコトアルヘシ
- 第二條 候補生ハ現役海軍軍人トシ其身分ハ奏任ノ待遇ヲ受クルモノトス
- 第三條 候補生ハ各其本官ノ職務ヲ實地ニ於テ練習スルモノトス
- 第四條 少尉候補生ハ海軍兵學校ノ全學科ヲ卒業シタル者ヨリ採用ス(同上ヲ以テ本條中追加ス)
- 第五條 少技士候補生ハ造船造機造兵及火藥製造ノ各學科ヲ卒業シタル海軍技術學生若クハ相當ノ卒業證書ヲ有シ少技士候補生タランコトヲ志願シ身體検査學術試驗ニ合格シタル者ヨリ採用ス
- 第六條 少軍醫候補生ハ海軍軍醫學校ノ全學科ヲ卒業シタル者ヨリ採用ス
- 第七條 少藥劑官候補生ハ藥舖開業免狀藥劑師免狀或ハ醫科大學藥學科ノ卒業證書ヲ有シ少藥劑官候補生タランコトヲ志願シ身體検査學術試驗ニ合格シタル者ヨリ採用ス

第八條 少主計候補生ハ總テ海軍少主計候補生採用規則ニ依リ採用ス

第九條 左ニ掲クル事項ノ一二當ル者ハ少技士候補生及少藥劑官候補生ヲ出願スルコトヲ得ス

- 一 年齢二十年未滿及二十八年以上ノ者
- 二 禁錮以上ノ刑ヲ受ケタル者
- 三 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者
- 四 身代限ノ處分ヲ受ケ其辨償ヲ終ヘサル者

- 第十條 候補生ヲ本官トスルニハ一箇年以上試用ノ後學術試驗ヲ行ヒ合格者ニ就キ海軍省ニ於テ候補名簿ヲ作り本官ニ缺員アル毎ニ順次海軍大臣ヨリ奏上シ之ヲ任ス
- 第十一條 候補名簿ハ學術試驗毎ニ合格者ヲ武官名簿ノ順序ニ從ヒ記列ス但停年同キ者ハ試驗成績ノ順序ニ從フ
- 第十二條 候補生ヲ直轄スル各長官ハ一箇年以上試用セル各候補生ノ材能品行及勤惰等ノ事實ヲ詳記シ毎年一回海軍大臣ニ報告スヘシ
- 第十三條 候補生ヲ直轄スル各長官ハ品行不正或ハ傷痍疾病等ノ故ヲ以テ高等武官ニ適セスト認ムル候補生アルトキハ海軍大臣ニ具申スヘシ
- 第十四條 候補生學術試驗ニ合格セサルトキハ六箇月ノ後再試驗ヲ行ヒ仍ホ不合格ノ者ハ之ヲ免ス

附則

第十五條 現今海軍主計學校ニ在ル生徒ハ全學科卒業ノトキ海軍少主計候補生ニ採用ス
 第十六條 明治二十八年マテハ少尉候補生ヲ少機關士ニ任用スルコトヲ得(二十四年一月四日勅令第二號ヲ以テ本條中追加ス)

○海軍少主計候補生採用規則 二十二年二月二十五日勅令第十八號

朕海軍少主計候補生採用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第十八號

海軍少主計候補生採用規則

- 第一條 海軍少主計候補生タラントヲ欲スル者ハ海軍大臣ノ告示ニ遵ヒ出願ス可シ
 海軍大臣ハ委員ヲ設ケ身體検査學術試験ヲ行ヒ合格ノ者ヲ採用ス
 第二條 左ニ掲ル事項ニ當ル者ハ候補生ヲ出願スルコトヲ得ス
 一 年齢二十年未滿及二十八年以上ノ者
 二 有妻ノ者
 三 禁錮以上ノ刑ヲ受タル者
 四 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者
 五 身代限ノ處分ヲ受ケ其辨償ヲ終ヘサル者

第三條 候補生ニ採用シタル者ハ一箇年間海軍主計學校ニ於テ修學セシメ卒業ノ後ハ實地ニ試用シ本官ニ缺員アルトキ順次本官ニ採用ス

第四條 候補生海軍主計學校ニ於テ卒業試験ニ落第スルトキハ候補生ヲ免ス但成業ノ目的アルモノハ六箇月以内修學セシメ再試験ヲ行フコトアルヘシ

第五條 候補生海軍主計學校ニ於テ修學中傷痍疾病等ニ因リ課程ヲ踐ミ難クシテ定期中學科ヲ修得シ能ハサル者ハ尙ホ六箇月以内修學セシメ卒業試験ヲ行フコトアルヘシ但此試験ニ落第スルトキハ候補生ヲ免ス

第六條 候補生ハ情願ヲ以テ辭退スルコトヲ許サス

第七條 候補生中左ニ掲クル事項ニ當ル者ハ候補生ヲ免ス

- 一 品行不正ニシテ改悛ノ目的ナキ者
- 二 傷痍疾病等ニ罹リ卒業ノ目的ナキ者

○志願軍吏獸醫生ヲ陸軍軍吏部並獸醫部豫備士官ニ補任方 二十三年九月三日

勅令第九十五號

朕志願軍吏生志願獸醫生ヲ陸軍軍吏部並獸醫部豫備士官ニ補任スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第九十五號

第二類 第二章 登用

一 志願軍吏生ニシテ陸軍豫備後備將校補充條例第六條ニ依リ實地ノ試験ニ及第シタル者ハ當該監督部長本人所屬隊ノ軍吏ヨリ其勤務勉勵品行方正學術適當ノ者ニシテ軍吏部士官タルヲ得ヘキ保證書ヲ出サシメ且自ラ是認シタル後其意見書ヲ添ヘ三等軍吏ニ補任ノコトヲ會計局長ニ稟申ス會計局長ハ之ヲ審査シ意見ヲ附シ陸軍大臣ニ進達ス若シ監督部長之ヲ否認シタルトキハ其事由ヲ悉シ會計局長ニ稟申シ會計局長ハ更ニ理由ヲ具ヘ陸軍大臣ニ進達シ大臣ニ於テ見習士官ノ分限ヲ除クコトヲ裁定ス此裁定ヲ受ケタル者ハ一等書記ニ任シ豫備役ニ編入ス

二 志願獸醫生ニシテ陸軍豫備後備將校補充條例第六條ニ依リ實地ノ試験ニ及第シタル者ヲ獸醫部豫備士官ニ補任スルハ陸軍獸醫部現役士官補充條例第十五條ニ依ル但シ獸醫部士官タルノ資格ナシト認ムルモノハ獸醫長ヨリ其事由ヲ具シテ軍務局獸醫課長ニ呈シ獸醫課長ハ之ヲ審査シテ軍務局長ニ上申シ軍務局長ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達シ大臣ニ於テ見習士官ノ分限ヲ除クコトヲ裁定ス此裁定ヲ受ケタル者ハ蹄鐵工長ニ任シ豫備役ニ編入ス

○判事檢事登用試験規則二十四年五月十五日
司法省令第三號

判事檢事登用試験規則左ノ通相定ム
判事檢事登用試験規則

第一章 試験委員

第一條 判事檢事登用試験委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條 判事檢事登用試験委員長及委員ハ大審院控訴院ノ判事檢事司法省高等官ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第三條 判事檢事登用試験委員長ハ委員ヲ監督シ試験ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス

第四條 試験委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第二章 受験資格

第五條 判事檢事登用試験ヲ受クルコトヲ得ル者ハ成年以上ノ男子ニシテ左ノ各項ノ一ニ該ル者ニ限ル

一 第一及第三高等中學ニ於テ法科ヲ卒業シタル者

二 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

三 外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

第六條 裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二章 第一回試験

第七條 第一回試験ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ試験ノ期日ハ試験委員長之ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第二類 第二章 登用

第八條 試驗志願者ハ其志願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ之ヲ試驗委員長ニ差出スヘシ

一 履歷書

二 身分年齢及兵役ニ關スル證明書

三 第五條ニ定メタル要件ノ證明書

第九條 試驗ハ受験者ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二様トス

第十條 筆記試験ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ各法ニ就キ之ヲ施行ス

第十一條 試験委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試験ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試験ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ

第十二條 口述試験ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十三條 受験者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試験口述試験ノ成績ニ對スル委員過半数ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

第十四條 志願者口述試験ニ闕席シタルトキハ試験ハ成立タサルモノトス

第十五條 試験委員長ハ及第者ノ氏名及其試験ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十六條 帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第八條ノ規程ヲ準用シ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第四章 實地修習

第十七條 試補ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ一名若ハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習スヘシ

第十八條 修習事務直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲ス檢事ノ事務ヲ修習スルトキハ檢事正之ヲ爲ス

裁判所長若ハ檢事正ハ毎年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀並執務ニ關ル成績ノ證明書ヲ作り控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十九條 試補ハ修習目錄ヲ作り其取扱ヒタル事件ヲ記載スヘシ

此目錄ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閲ヲ受クヘシ

第二十條 試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以内ハ修習日數ニ算入ス

賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以内亦同シ

第二十一條 試補ノ直接指揮監督者ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘシ此場合ニ於テハ指揮監督者ハ諭告ヲ爲シタルコトヲ試補ノ履歷ニ記入スヘシ

第二十二條 試補職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ニシテ第二回試験ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第五章 第二回試験

第二十三條 第二回試験ハ控訴院ニ於テ之ヲ行フ

試験ノ場所ハ司法大臣之ヲ定メ試験ノ期日ハ試験委員長之定ム

第二十四條 試補第二回試験ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

志願書ニハ修習目錄ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フヘシ

第二十五條 司法大臣ハ第二回試験ヲ受クヘキ試補ノ氏名ヲ試験委員長ニ通知シ試験ヲ行ハシム

第二十六條 第二回試験ハ受験者ノ實務ニ習熟シタルヤ否ヲ試験スルヲ以テ主タル目的トシ筆記口述ノ二様トス

第二十七條 試験委員ハ試補ニ筆記試験ノ爲メ二件以上ノ訴訟記録ヲ付與スヘシ

第二十八條 受験者ハ付與セラレタル訴訟記録ニ就キ事實及理由ヲ詳示シタル判決案ヲ

答案トシテ差出スヘシ

答案ハ二十日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ若シ此期間内ニ答案ヲ差出サハルトキハ試験ハ成立タサルモノトス

第二十九條 口述試験ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ二科目ニ就キ之ヲ施行ス

又訴訟記録ニ就キ問ヲ發シ之ヲ答ヘシムヘシ其記録ハ試験期日ノ二日前ニ之ヲ付與ス

第三十條 左ノ場合ニ於テハ司法大臣ハ試験委員長ノ報告ニ因リ試補ヲ免ス

一 第二回試験ニ及第セサルトキ

二 第二回試験ノ成立タサルトキ

第三十一條 前條第二ノ場合ニ於テ試補已ムヲ得サル事故アリシコトヲ證明シ試験委員之ヲ正當ト認メタルトキハ其旨ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ其試補ニ一回ヲ限リ次期ノ試験マテ引續キ修習ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第三十二條 第一回試験ニ關ル第十一條及第十三條乃至第十五條ノ規程ハ第二回試験ニモ亦之ヲ適用ス

○裁判所書記登用試験規則

二十四年五月十五日
司法省令第四號

裁判所書記登用試験規則左ノ通相定ム

第二類 第二章 登用

裁判所書記登用試験規則

八百七十

第一章 試験

第一條 裁判所書記登用試験ハ文官試験ニ關ル勅令ノ外本則ノ規程ニ從フ

第二條 試験ハ各控訴院ニ於テ之ヲ行フ

第三條 試験委員ハ控訴院判事檢察書記長又ハ其管内地方裁判所ノ判事檢察ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス

試驗委員長ハ委員中官等最モ高キ者ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 試験ハ作文筆寫書取算簿記ノ外民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中ニ就キ之ヲ施行ス

第五條 試験委員長ハ受験者ノ申立アルトキハ地方裁判所ニ於テ筆記試験ヲ受ケシムルコトヲ得此場合ニ於テ試験問題ノ答案ハ其裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム

第六條 試験委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試験ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試験ノ爲メ受験者ヲ呼出スヘシ

第七條 受験者口述試験ニ闕席シタルトキハ試験ハ成立タサルモノトス

第八條 試験ニ及第シタル者ニハ試験委員長及試験委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第二章 實地修習

第十條 試験ニ及第シタル者ハ裁判所書記見習ヲ命セララル、コトヲ得

裁判所書記見習ハ區裁判所及地方裁判所並其檢察局ニ於テ實地修習ヲ爲スヘシ

第十一條 實地修習ノ順序ハ控訴院長檢察長協議シテ之ヲ定ム

第十二條 實地修習ノ指揮監督ハ地方裁判所長若ハ檢察正又ハ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事若ハ檢察之ヲ爲ス

指揮監督者ハ修習ノ事務ヲ直接ニ指示スヘキ官吏ヲ定ムヘシ

第十三條 裁判所書記見習職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ指揮監督者之ヲ諭告スヘシ

第十四條 裁判所書記見習職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ナリト認ムルトキハ指揮監督者ハ控訴院長檢察長ニ之ヲ報告スヘシ

第十五條 指揮監督者ハ裁判所書記見習其指揮監督ニ係ル修習ヲ終リタルトキハ修習ニ關ル證明書ヲ作り修習ノ成績並職務上及職務外ノ行狀ヲ記載シテ之ヲ控訴院長檢察長ニ差出スヘシ

若シ行狀ニ就キ諭告シタルコトアルトキハ其旨ヲ證明書ニ附記スヘシ

第十六條 本章ノ規程ハ試験ヲ經スシテ裁判所書記見習トナリタル者ノ實地修習ニモ亦之ヲ適用ス

第二類 第二章 登用

八百七十一

○警察署長ニ補スヘキ警視特別任用方二十四年四月一日 勅令第三十七號

朕警察署長ニ補スヘキ警視特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第三十七號

第一條 警察署長ニ補スヘキ警視ハ五箇年以上警部ニ奉職シ判任官三等以上ノ現職ニ在ル者ニ限り當分ノ内試験ヲ要セス高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ任用シタル警視ハ高等試験ヲ經ルニ非レハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○巡查ヲ警部(警部補)ニ任用方二十三年二月四日 勅令第十號

朕巡查奉職滿五年以上ノ者ヲ警部警部補ニ任用スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第十號

巡查奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試験試補及見習規則第二條ノ規定ニ據ラス文官普通試験委員長ノ銓衡ヲ經テ警部(警部補)ニ任用スルコトヲ得

但試験ヲ經スシテ任用シタル警部(警部補)ハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉スルヲ得ス(二十三年十月十日勅令第二百二十五號ヲ以テ地方官官制改正ニ付警部補消滅ス)

○看守ヲ看守長ニ(看守副長)任用ノ件二十三年七月二十五日 勅令第四百四十六號

朕看守奉職滿五年以上ノ者ヲ看守長(看守副長)ニ任用スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第四百四十六號

看守奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試験試補及見習規則第二條ノ規定ニ據ラス文官普通試験委員長ノ銓衡ヲ經テ看守長看守副長ニ任用スルコトヲ得

但試験ヲ經スシテ任用シタル看守長看守副長ハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

○陸軍現役滿期下士巡查志願ノ者採用方二十二年七月十七日 內務省訓令第三十號

陸軍現役滿期下士ニシテ巡查志願ノ者ハ學術試験ヲ要セス採用スルコトヲ得

○巡查採用規則二十四年九月三日 內務省訓令第二十一號

巡查採用規則

第一條 巡查ハ必試験ノ上採用スヘキモノトス但巡查精勤證書ヲ有スル者ハ此限ニアラス

第二條 巡查志願者ハ品行方正年齢二十三年以上四十年未滿ニシテ徵兵ニ相當セス且ツ左ノ諸項ニ牴觸セサル者タルヘシ

一重罪ノ刑又ハ重禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ同上ノ刑ニ處セラルヘキ罪ヲ犯シ單ニ監視ニ附セラレタル者及輕禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經過セサル者但舊法ニ依リ施體ノ刑ニ處セラレタル者ハ總テ本文ノ權衡ニ準ス

二賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタル者

三巡查懲罰例又ハ官吏懲戒例ニ依リ免職セラレ若クハ故ナク巡查ヲ辭職シ二年ヲ經過セサル者

四身分不相應ノ負債アル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

五酒癖アル者又ハ暴行ノ癖アル者

第三條 巡查體格ノ検査ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一體質善良ナル者即チ左ニ記載スル等ノ缺所ナキ者

四肢完具セサル者但執筆把握ニ差支サル指ノ萎小彎屈強直等ノ類ハ此限りニアラス

胸腔機關及腹内臟器若クハ皮膚病較著ノ疾病アル者但較著ノ疾病ニアラサルモ全身諸機關ノ機能減衰ノ者亦同シ

服裝又ハ運動ニ不便ナル者

贅生物畸形等容貌體勢醜惡ナル者

二身幹五尺一寸以上ニシテ胸圍大約身長ノ半ニ等シク呼吸縮長ノ差一寸以上ノ者

三兩眼共視力三分ノ二以上ニシテ辨色力完全ノ者

四聽力六尺ノ距離ニ於テ低語ヲ聽識シ得ル者

五言語應答明瞭ニシテ充分ノ發聲ニ堪ユル者

六精神完全ナル者即チ精神病及神經病(鬱癡癲狂癡獸及舞踏病癲癇等ノ病)ナキ者

第四條 巡查技藝ノ試験ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一刑法刑事訴訟法警察法規等ノ大要ニ通スル者

二本邦歴史及地理ノ大略ニ通スル者

三假名交リノ論文及普通往復文ヲ作り得ル者

四算術加減乗除ヲ爲シ得ル者

五普通ニ楷書又ハ行書ヲ書キ得ル者

第五條 巡查ノ試験ハ廳府縣巡查教習所ニ於テ警部二名以上立合ノ上巡查教習所長之ヲ施行スヘシ

第六條 試験ノ上巡查ニ採用スヘシト定リタル者ハ警視廳ニ於テハ巡查本部長北海道廳及府縣ニ於テハ警部長親ク左ノ諸件ヲ宣告シ誓書ヲ徵シタル上採用ス可シ

一巡查タル者ハ官吏服務紀律ヲ恪守スヘキハ言ヲ俟タス常ニ上官ノ命令ヲ遵守シ勤務

第二類 第二章 登用

中ハ勿論勤務ニ服セサルトキト雖モ猥ニ政治ノ是非得失ヲ論評スルカ如キコト決シテアルマシキ事

一 巡查タル者ハ常ニ人民ノ保護者タルコトヲ記臆シ之ニ對シ丁寧親切ヲ旨トシ而モ之ト相狎職スルカ如キコトナク職務上ニ於テ負擔スル百般ノ責務ハ最モ嚴正忠實ニ之ヲ踐行スヘキ事

一 巡查タル者ハ一端奉職ノ上ハ他念ナク職務ニ從事シ五箇年未滿ニシテ一身ノ故ヲ以辭職スルカ加キコト決シテアルマシキ事

一 巡查タル者ハ自身ハ勿論家族ニ至ル迄専ラ品行ヲ正シクシ警察官吏タリ又其家族タル體面ヲ汚損スルカ如キ所業決シテアルマシキ事

第七條 巡查タルヘキ者ヨリ呈セシムヘキ誓文ハ左ノ如シ但前條各官ノ面前ニ於テ本人ヲシテ自書捺印セシム可シ

誓文

某儀

今般何(廳府縣)巡查志願仕候ニ付御採用ヲ被ルニ於テハ官吏服務紀律ヲ恪守仕ルヘキハ勿論人民ニ對シテハ丁寧親切ニ職務ヲ執行シ且ツ總テノ法律命令ヲ遵守シ職任上百般ノ責務ハ嚴正忠實ニ踐行仕ルヘク又奉職五箇年ニ滿タヌシテ一身ノ故ヲ以テ自ラ職務御免相願候様ノ儀決シテ無之且ツ自身ハ勿論家族ニ至ル迄品行方正ニ相保チ警察官吏タリ又

其ノ家族タル體面ヲ汚損致シ候様ノ所業決シテ仕マシク依テ誓文如件

明治 年 月 日

府縣國郡市町村番地身分

何 某實印

第八條 新ニ採用スル巡查ハ先ツ三級俸ヲ給スヘシ其陸軍現役滿期ノ下士及巡查精勤證書ヲ有スル者ニ係ルトキハ直ニ二級俸ヲ給スルコトヲ得但陸軍現役滿期ノ下士ニシテ士官適任證書ヲ有スル者ハ特ニ一級俸ヲ給スルコトヲ得

○營林主事補及森林監守任用方二十年十二月二十八日勅令第八十二號

朕營林主事補及森林監守任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第八十二號

林區署所在地方ニ居住シ近接森林ノ狀況並ニ土地ノ慣習ニ通曉セル者ヲ營林主事補及森林監守ニ選任スルノ必要アルトキハ農商務大臣定ムル所ノ採用規則ニ依リ之ヲ選任スルコトヲ得但該規則ニ依リ選任シタル營林主事補及森林監守ハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

○營林主事補及森林監守特別採用規則二十三年三月十四日農商務省令第四號

明治二十一年農商務省令第三號營林主事補及森林監守特別採用規則左ノ通改正ス

第二類 第二章 登用

八百七十七

營林主事補及森林監守特別採用規則

第一條 大林區署所轄内ニ居住シ森林ノ狀況竝ニ土地ノ慣習ニ通曉セル者ヲ營林主事補及森林監守ニ選任スヘキ必要アルトキハ第二十六條ニ掲クル者ヲ除クノ外左ノ科目ニ就キ試験ヲ行フ

一 現行法令講讀

二 作文

三 算術

四 筆寫

五 當該大林區署所轄内森林ノ狀況及土地ノ慣習

六 簿記〔特別ノ必要アルトキ又ハ受

七 地圖〔驗者ノ望ニ依リ之ヲ試験ス

第二條 試験ヲ受ケント欲スル者竝ニ第二十六條ニ依リ試験ヲ要セスシテ任用セラル、者ハ相當ノ期限内當該大林區署所轄内ニ現住スル者又ハ居住セシコトアル者ニ限ル

第三條 試験ハ大林區署長ニ於テ署員二名以上ヲ選定シ委員ヲ命シテ之ヲ行ハシム

第四條 試験ノ期日ハ大林區署長之ヲ定メ試験期日二十日前便宜ノ方法ヲ以テ公告スヘシ

第五條 受験者ノ人員ハ採用スヘキ人員ノ五倍ヨリ少カラサル數ニ限ルコトヲ得但シ此

場合ニ於テハ試験ノ期日ト共ニ其ノ人員ヲ公告スヘシ

第六條 試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験期日七日前迄ニ履歷書及第七條ノ證明書ヲ添ヘ願書ヲ當該大林區署ニ差出スヘシ其ノ願書履歷書ハ第一號及第二號書式ニ據リ本人自ラ之ヲ認ムヘシ

第七條 試験出願者ハ身分職業年齢及免役延期豫備徵員一年志願兵等ニ關スル事項ヲ證明シタル市區町村長ノ證明書ヲ要ス

第八條 第五條ノ場合ニ於テ受験出願者満員ノトキハ試験期日七日前ト雖モ其ノ願書ヲ受理セス

第九條 試験問題試験日時割及受験人心得ハ大林區署長之ヲ定メ各受験人ニ知悉セシムヘシ

第十條 試験ノ問題ハ林務ニ關スル事項ヲ參酌シ專ラ實務ニ適應セシムルコトヲ要ス

第十一條 大林區署長ハ營林主事補ト森林監守ト試験問題ヲ異ニシ或ハ同一トナスコトヲ得

第十二條 試験ハ筆記及口述ノ二種トス口述試験ハ筆記試験ヲ終リタル後之ヲ行フ

第十三條 受験人ハ其ノ試験ヲ受クルノ際受験人心得及試験委員ノ命令ヲ遵守スヘシ犯ス者ハ當該試験委員ヨリ直ニ退場ヲ命スヘシ其ノ退場ヲ命セラレタル者ハ當期ノ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十四條 不正ノ方法ヲ以テ合格シ其ノ事ノ發覺シタルトキハ合格ノ効ナキモトス
第十五條 第十四條ニ依リ合格ノ効ヲ失ヒ又ハ不正ノ方法ヲ以テ合格セント企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 履歷書中事實ヲ隱匿シ又ハ之ヲ偽リタル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條 試験各科目ノ點數ハ一百ヲ以テ最上點トシ各科目ノ點數ヲ通計シ得ル所ノ和ヲ試験科目ノ數ヲ以テ除シ得タルモノヲ諸科目平均點數トス諸科目平均點數六十點ヲ以テ最下限トシ諸科目平均點數六十點未滿又ハ一科目ノ點數五十點未滿ナルトキハ合格者トスルコトヲ得ス

第十八條 試験ヲ經タル各科目ノ點數及其ノ全體ノ效果ニ關シ合格者ヲ定ムルハ大林區署長上席ヲ以テ試験ニ列席シタル委員ノ議定シタル平均點數ニ據ル

第十九條 大林區署長ハ試験ノ終リタル後二十日以内ニ各科目試験ノ成績ヲ取調ヘ其ノ需用ニ應シ人員ヲ限リ合格者中ヨリ選抜シテ當選者ヲ定メ應答ノ書類ヲ添付シテ上申スヘシ

第二十條 試験合格者ノ氏名ハ其ノ試験ヲ終リタル日ヨリ七日以内ニ便宜ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第二十一條 本則ニ依リ試験ヲ受ケテ合格シタル者ハ大林區署長ヨリ營林主事補又ハ森林監守試験合格證書ヲ附與スヘシ

第二十二條 試験ニ及第シ合格證書ヲ得テ當選シタル者ヲ採用スルトキハ見習ヲ命シ又ハ本官ニ任ス

第二十三條 營林主事補ト森林監守ト試験問題ヲ異ニシ森林監守ノ試験ニ及第シ採用セラレタル者ト雖モ事務熟練ノモノト認メタルトキハ別ニ試験ヲ要セス營林主事補ニ任用スルコトアルヘシ

第二十四條 試補合格證書ヲ得テ其ノ際當選セサル者ハ他日當該大林區署ニ於テ需用アルトキ別ニ試験ヲ要セス採用スルコトアルヘシ
合格證書有効ノ年限ハ其ノ日付ヨリ滿三年トス

第二十五條 試験合格者中其ノ試験ノ成績ニ據リ營林主事補ノ志願者ヲ森林監守ニ森林監守ノ志願者ヲ營林主事補ニ任用スルコトアルヘシ

第二十六條 左ニ掲クル者ハ試験ヲ要セス營林主事補及森林監守ニ任用ス
一 前ニ判任文官ヲ勤メタル者

二 陸軍滿期ノ下士及陸軍滿期ノ上等兵ニシテ下士適任證書ヲ有スル者

三 滿二年以上巡查又ハ看守ヲ勤續セシ者

四 滿二年以上府縣立中學校公立小學校ノ教員ヲ勤續セシ者

五 本則施行ノ前ヨリ各官廳ノ雇員トナリ滿二年勤續ノ者

第二十七條 本則ニ依リ任用スルモノハ大小林區署判任官官等俸給令別表ニ據リ其ノ初
第二類 第二章 登用

任營林主事補ハ九等上級以下森林監守ハ十等三級以下ノ月俸ヲ支給ス
見習ヲ命シタルトキハ拾圓以下ノ月俸ヲ支給ス

第二十八條 本則ニ掲クルモノ、外試験ニ關スル手續ハ大林區署長ノ定ムル所ニ據ル
書式用紙美濃紙字體楷行ノ内ニテ
明瞭ニ記載シ一號ニ號各一通

(第一號)

受験願

族籍戶主又ハ何某嗣子二三男兄弟

職業 氏 名

生 年 月

私儀(營林主事補)(森林監守)志願ニ付御試験被下度別紙履歷書及兵役ニ關スル證明書
相添此段相願候也

現住所 氏 名 印

年 月 日

(何)大林區署長何某宛

(第二號)

履歷書

何府縣華士族平民

氏 名

生 年 月

本籍

一何府縣何市區郡何町村何番地戶主又ハ何某男兄弟伯叔父等現ニ本籍地ニ居住スルトキハ(現
今本地ニ居住)ノ數字ヲ加ヘ次項
ノ現今寄留地
ヲ省クヘシ

現今寄留地

一何府縣何市區郡何町村何番地(何某方)寄留

住所ノ移動

一何年何月何日何地ニ生レ何年何月マテ居住

一何年何月何地ニ移轉シ何年何月マテ居住

(住所ヲ移轉セシ毎ニ之ヲ記スヘシ)

學事

一何年何月ヨリ何地何某ニ就キ又ハ官公立何學校ニ於テ何學ヲ修メ何年何月ニ至ル所
修ノ科目大略何々

一何年何月ヨリ何地官公立學校ニ入り何學科ヲ修メ何年何月卒業ス其證書ノ寫別紙
ノ如シ修業何年何月間ニシテ其ノ科目ハ何々

一何年何月何地何學校若クハ其ノ他ニ於テ何々ノ試験ヲ受ケ及第ス其ノ證書若クハ免

第二類 第二章 登用

許狀ノ寫別紙ノ如シ受験ノ科目ハ何々

職業

一何年何月何日官公私立何學校何科教員トナリ教授ニ從事シ何年何月辭職其ノ間何々ヲ兼勤シ何々ノ事務ニ從事ス其ノ辭令書寫左ノ如シ

(辭令書寫ハ各其ノ全文ヲ掲クヘシ又私立學校等ニテ辭令書ナキモハ其ノ俸給等ヲ本文ニ記スヘシ)

一何年何月何日何官廳ニ於テ何々拜命何年何月何日マテ何々ノ事務ニ從事シ何年何月何日辭職其ノ官記辭令書寫左ノ如シ

(官記辭令書寫ハ各其ノ全文ヲ掲クヘシ)

一何年何月ヨリ何地何會社ニ備ハレ(給料何圓)何々ノ業務ニ從事シ何年何月ニ至テ解備何年何月何圓増給減額

一何年何月ヨリ何年何月マテ何業ニ從事ス

一何年何月ヨリ何々ノ著譯ニ從事シ何年何月ニ至ル其ノ著譯スル所ノ書名左ノ如シ(洋書ハ其ノ著譯ノ原名ヲモ掲クヘシ)

賞罰

一何年何月何地ニ於テ何々ノ事由ニ依リ賞ヲ受ク其ノ辭令書寫左ノ如シ

(辭令書寫ハ其ノ全文ヲ掲ケ辭令書ナキモハ本文中ニ受賞ノ事由ヲ記スヘシ)

一何年何月何地ニ於テ何々ノ事由ニ依リ罰ヲ受ク其ノ辭令書寫宣告書要領左ノ如シ

(辭令書アルモハ其ノ全文ヲ掲ケ辭令書ナキモハ本文中ニ其ノ事由ヲ記シ又裁(判所)宣告書ハ其ノ要ヲ記シ總テ罰ハ其ノ受罰ノ日數(料罰金ノ額等)ヲ記スヘシ)

身代限處分ノ有無

一何年何月何地ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ク

(裁判所ノ申渡書寫ヲ記スヘシ)

一身代限ノ處分ヲ受ケタルコトナシ

右之通相違無之候也

右

氏名印

年月日

○東京郵便電信學校卒業生任用方二十四年九月十四日 勅令第百九十二號

朕東京郵便電信學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第百九十二號

東京郵便電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ文官普通試験及事務練習ヲ要セス直ニ郵便電信ニ關スル判任官ニ任用スルコトヲ得

但本令ニ依リ任用セラレタルモノハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

○郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補任用方二十三年七月十六日 勅令第百三十號

第二類 第二章 登用

郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補任ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
御名 御璽

勅令第三百二十號

郵便電信書記補郵便書記補電信書記補並郵便爲替貯金局書記補ハ遞信大臣別ニ試験規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ得其規則ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉任スルコトヲ得ス

○郵便及電信局並ニ郵便爲替貯金局書記補試験規則 二十三年八月十五日 遞信省令第十六號

明治二十三年七月勅令第三百二十號ニ據リ郵便及電信局並ニ郵便爲替貯金局書記補試験規則左ノ通之ヲ定ム

郵便及電信局並ニ郵便爲替貯金局書記補試験規則

第一條 年齡滿十七歲以上四十五歲以下ニシテ一年以上郵便電信又ハ郵便爲替貯金ノ業務ニ從事シタル者ハ書記補ノ試験ニ應スルコトヲ得

第二條 郵便電信局郵便局電信局並ニ郵便爲替貯金局ニ於テ書記補ノ任用ヲ要スル時ハ其局長ハ第一條ニ適合スル者ニ就キ別ニ定ムル試験手續ニ依リ試験ヲ執行シタル上其成績ヲ遞信大臣へ申出ツヘシ

遞信大臣ハ遞信省文官普通試験委員ニ下附シテ之ヲ點查セシメ合格者中所要ノ人員ヲ採用スルモノトス

第三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ試験ヲ要セス直ニ書記補ニ任用スルコトヲ得

- 一 本規則施行ノ前二年以上郵便電信局郵便局電信局又ハ郵便爲替貯金局ノ雇員トナリ現ニ其職ニ在ル者ニシテ遞信大臣ニ於テ事務ニ熟練シタルト認ムル者
- 二 遞信省規定ノ電氣通信技術員養成規則ニ依リ電氣通信技術ノ傳習ヲ卒業シ六箇月以上其業務ニ從事シタル者

○東京電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者遞信技手ニ任用方 二十一年五月二十八號 閣令第八號

東京電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ事務練習ヲ要セス直ニ遞信技手ニ任スルコトヲ得

○三等郵便局長任用方 二十年十二月二十五日 勅令第六十六號

朕三等郵便局長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六十六號

三等郵便局長ハ其地ニ在住シ相當ノ資産アル者ヲ選任スルノ必要アルヲ以テ遞信大臣別ニ採用規則ヲ定メテ之ヲ選任スヘシ但該規則ニ依リ選任シタル三等郵便局長ハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

○三等郵便局長採用規則 二十一年四月二十七日 遞信省令第二號

明治二十年^{十二}勅令第六十六號ニ據リ三等郵便局長採用規則左ノ通之ヲ定ム

三等郵便局長採用規則

第一條 三等郵便局長ハ左ノ各款ヲ具備スル者ヨリ之ヲ採用スヘシ

第二類 第二章 登用

第一款 其三等郵便局所在地ニ在住スル者

第二款 實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者

但滿三年以上郵便又ハ電信事務ニ従事スル官吏ハ記名公債證書ヲ以テ之ニ

充用スルコトヲ得(二十三年五月二十九日選信省令第十一號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第三款 日常ノ算筆ニ通スル者

第四款 別ニ定ムル三等郵便局長服務規約ヲ遵奉スル者

第五款 年齡滿二十年以上ノ男子

第二款 誠實ニ職務ヲ奉シタル三等郵便局長老年又ハ疾病其他ノ事故ニ依リ其職ヲ辭スルカ或ハ在官中死亡セシトキ其嗣子又ハ相續人タル男子年齡滿十六年以上ニ及フモノ

ハ第一款第五款ノ制限ニ拘ハラヌ特ニ採用スルコトアルヘシ

第三款 非戸主ニシテ其戸主實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者保證スルニ於テハ其本人ノ資産第一條第二款ニ適合セサルモ特ニ之ヲ採用スルコトアルヘシ

○北海道廳管下三等郵便局長採用方

二十二年四月一日選信省令第五號

北海道廳管下ノ三等郵便局長ハ當分ノ内三等郵便局長採用規則第一條第二款ノ制限ニ滿タサル者ト雖採用スルコトアルヘシ

○三等郵便局長採用ニ關シ郡區長戸長處辨方

二十一年五月一日選信省訓令第三號北海道廳府縣

三等郵便局長ノ採用ニ關シ郡區長戸長ハ遞信管理局長ノ照會又ハ依託ニ應シ便宜處辨候様豫メ郡區長戸長ニ達示スヘシ

○三等郵便局長採用手續

二十一年五月一日選信省訓令第四號遞信管理局

三等郵便局長ヲ採用スルトキハ左ノ手續ニ依リ之ヲ執行スヘシ

第一條 三等郵便局長ノ採用ヲ要スルトキ遞信管理局長ハ三等郵便局長採用規則ニ合格スルモノ、中ニ就キ郵便事務ニ適當ナリト認ル者ヲ撰出シ被撰人ノ諸否及身元引受人ノ有無ヲ取調履歴書(書式二號)ヲ添ヘテ之ヲ推薦スヘシ

但辭職出願者又ハ死亡者若クハ犯罪ニ依リ官職ヲ失ヒタル者アルトキ後任ヲ要スル場合ヲ除ク外ハ本大臣ノ指揮ヲ待テ後選出スヘシ

第二條 遞信管理局長ハ時宜ニ依リ三等郵便局長ノ選出ヲ郡區長ニ囑托スルコトヲ得

第三條 遞信管理局長ニ於テ三等郵便局長ノ任官辭令書ヲ傳達スルトキハ受書(書式二號)及身元引受證書(書式三號)本人非戸主ナルトキハ戸主ノ保證(書式四號)ヲ差出サシメ之ヲ本大臣ニ報告シ且採用ノ旨ヲ其地方長官及郡區長ニ通知スヘシ其免官ノトキ亦同シ

第四條 三等郵便局長ヲシテ爲替又ハ貯金ヲ取扱ハシムルトキハ遞信管理局長ニ於テ別ニ定ムル規程ノ保證品ヲ徵收スヘシ

第五條 被選人ヨリ差出シタル書類及前條ノ保證品ハ遞信管理局ニ保管スヘシ

○三等電信局長選任及手當方

二十一年六月勅令第四十五號

朕三等電信局長ノ選任及手當ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

第二類 第二章 登用

勅令第四十五號

三等電信局長ハ三等郵便局長ノ例ニ依リテ選任シ手當ヲ支給スヘシ

八百九十

●沿革要領

明治元年八月四日布告賄賂私認ヲ以テ推舉登用スルヲ禁ス○同年十月諸官ニ令シテ初メテ登用ノ者ハ先雇出仕トシ才能ヲ試ミ後本官ニ任セシム○二年正月二十四日布告シテ人材公選方ヲ示ス○同年四月二十二日六等官以下ハ諸官知事副知事ノ見込ヲ以テ選任ス○同年五月八日諸縣判事ノ選舉ヲ民政部ニ委任セララル○同年二十七日藩士登用ノ節ハ該藩ニ照會シテ任用セシム○三年六月轉任並免職ノ者選舉ノ時ハ前官ノ模倣ヲ照會セシム○四年三月辨官達ス判任官選舉ノトキハ平日ノ行狀才識等ヲ取調尚其管廳ヘモ照會ノ上登用スヘシ○同年四月七日布告雇ノ稱ヲ廢シ何等出仕ノ稱ヲ廢ス○五年十月第二百九十六號免職ノ者ヲ更ニ登用スルトキ取扱方ヲ達ス○八年五月第七十六號達ヲ以テ各廳ニ於テ採用ノ者アルトキ管廳ヘ照會方ヲ心得シム○九年十二月第一百五號ヲ以テ徵兵名簿ニ記載ノ壯丁官吏採用禁止ノ期限ヲ達ス○十七年十二月第二百二號達ヲ以テ判事登用規則ヲ定ム○十八年六月第十二號布達ヲ以テ舊海陸軍刑律ニ依リ奪官及回籍ノ刑ニ該リ文武又ハ武官大小ノ員ニ補スルヲ禁セラレタル者解禁年限ヲ定ム○同年十一月第六十二號達ヲ以テ判事登用規則第九條ニ但書ヲ追加ス○二十年四月閣令第九號ヲ以テ辭職ノ官吏再就職ノ年限ヲ定ム○同年七月勅令第三十七號ヲ以テ文官試驗試補見習規則ヲ定ム○同月閣令第十八號ヲ以テ前規則ニ關スル細區長ノ試驗科目ハ内務大臣ノ指定スル所ニ據ラシム○同年十一月勅令第五十七號ヲ以テ試補見習待遇並任用方ヲ定ム○同月勅令第五十八號ヲ以テ學務及學術技藝ニ關スル行政官任用方ヲ定ム○同月閣令第二十三號ヲ以テ在職判任官ニテ直ニ本官ニ任スルノ年限ヲ定ム○同年十二月勅令第六十三號ヲ以テ陸海軍士官並同等以上試驗ヲ要セス文官ニ任用ヲ得セシム○同月勅令第六十四號ヲ以テ判任官高等試驗ヲ受ケ本官ニ任用方ヲ定ム○同月閣令第二十五號ヲ以テ文官試驗試補見習規則中司法省舊法學校正則部生徒ニ適用方ヲ定ム○同月閣令第二十八號ヲ以テ技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル者任用方ヲ定ム○同月内務省令第五號ヲ以テ郡區長試驗ニ關スル條規ヲ定ム○二十一年三月閣

令第二號ヲ以テ文官試補見習ヲ命シタル者給料額ヲ定ム○同年十二月勅令第九十八號ヲ以テ文官試驗試補及見習規則中ヲ刪除ス○二十二年一月閣令第三號ヲ以テ北海道郡區長試驗ヲ要セス判任官ヨリ任用方ヲ定ム○同年三月二十二日閣令第十號ヲ以テ高等商業學校卒業證書ヲ有スル者判任官見習ニ任用方ヲ定ム

○宮内省判任官中陞叙年限 二十三年六月十二日 宮内省達第六號
 宮内省判任官中屬醫員藥劑師掌典補警部警部補准判任中内舍人監守ノ陞叙年限ハ二等三等ハ每等在職四年四等五等六等ハ每等在職二年トス

奉 勅

○陸軍武官進級令 二十二年五月六日 勅令第六十一號

朕陸軍武官進級條例ヲ廢止シ陸軍武官進級令制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍武官進級令

- 御 名 御 璽
- 勅令第六十一號
- 第一條 陸軍武官ノ進級ハ級ヲ逐テ歷進セシム又缺員ナキトキハ補除スルコトナシ
- 第二條 陸軍武官ハ實役停年最下期限ヲ超ユルニアラサレハ進級スルコトヲ得ス
- 第三條 實役停年最下期限ヲ定ムルコト左ノ如シ
- 二等軍曹ヨリ一等軍曹ニ進ムハ實役停年半年一等軍曹ヨリ曹長ニ進ムハ實役停年一年曹長ヨリ少尉ニ進ムハ實役停年二年
- 少尉ヨリ中尉ニ中尉ヨリ大尉ニ進ムハ實役停年各二年大尉ヨリ少佐ニ進ムハ實役停年四年

第二類 第二章 進級

八百九十一

年
少佐ヨリ中佐ニ進ムハ實役停年三年中佐ヨリ大佐ニ大佐ヨリ少將ニ進ムハ實役停年各二年

少將ヨリ中將ニ進ムハ實役停年三年

中將ノ大將ニ進ムハ歴戰者ニ就キ特旨ヲ以テ親任スルヲ例トシ最下期限ヲ定ムルコトナシ

第四條 戰時ニ在テハ各官ノ實役停年ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第五條 休職停職ノ年月ハ實役停年ニ算入セス但敵ノ捕虜トナリ休職ニ入ル者正當ノ理由アルトキハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得

第六條 陸軍武官進級ノ法ニアリ一ヲ停年補除トシ一ヲ拔擢補除トス

第七條 停年補除トハ實役停年最下期限ヲ超エタル順次ニ依リ進級セシムルヲ云ヒ拔擢補除トハ實役停年最下期限ヲ超エタル者ニ就キ拔擢進級セシムルヲ云フ其區別左ノ如シ

二等軍曹ヨリ一等軍曹ニ一等軍曹ヨリ曹長ニ進ムハ皆拔擢トス

少尉ヨリ中尉ニ進ムハ停年三分二拔擢三分一トス

中尉ヨリ大尉ニ進ムハ停年拔擢相半ス

大尉ヨリ少佐ニ少佐ヨリ中佐ニ中佐ヨリ大佐ニ進ムハ皆拔擢トス

第八條 將校ハ職權ニ依テ部下ヲ拔擢スルノ權ヲ有ス但直屬長官アル者ハ其監督ノ下ニ在

テ之ヲ行フ

第九條 將官ノ進級及將官ニ進級スルハ上裁ニ出ルト雖モ先ツ内旨ヲ陸軍大臣ニ諭スヲ例トス

第十條 曹長ノ少尉ニ進級スルハ特例トス此選ニ當ルヲ得ル者ハ功績拔群ニシテ士官タルノ學力ヲ有スルモノニ限ル

第十一條 陸軍大臣ハ毎年將校ノ實役停年名簿ヲ作り之ヲ奏上スヘシ

第十二條 將校ノ拔擢進級候補ハ上裁ニ出ルモノトス陸軍大臣ハ上旨ヲ奉シテ決定候補名簿ヲ調製スヘシ

第十三條 下士ノ進級候補ハ師團長及之ト同等以上ノ權アル長官並ニ會計局長醫務局長之ヲ裁決シテ決定候補名簿ヲ調製スヘシ

第十四條 決定候補名簿ハ其調製ノ日ヨリ次年決定候補名簿調製ノ日迄之ヲ用ユヘシ

第十五條 左ノ場合ニ在テハ前諸條ノ例ニ依ラス進級セシムルコトヲ得

一 敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者

二 敵前ノ軍隊ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

第十六條 興軍ノ日ニ方リテ戰地ニ臨ムノ首將ニハ特ニ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシ

第十七條 將校相當官並ニ軍吏部衛生部下士騎砲輜重兵諸工長騎砲輜重兵諸工下長ノ進

級ハ本令ヲ適用ス(二十三年三月十九日勅令第二十九號ヲ以テ本條ヲ改正ス)

軍樂部準士官下士及砲工兵監護ノ進級ハ別ニ定ムル所ニ依ル

○海軍高等武官進級條例二十四年八月十八日勅令第七十八號

朕海軍高等武官進級條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十八號

海軍高等武官進級條例

第一條 海軍高等武官トハ海軍少尉以上及其相當官ヲ云フ

第二條 高等武官ノ進級ハ超級ノ陞進ヲ許サス而シテ在ニ掲クル實役停年海上勤務ヲ經タル者ニアラサレハ陞進セシメス又缺員ナキトキハ除任ヲ行ハス

官		名		實役停年	實役停年中海上勤務最下期限		
少尉	少機關士	少技士	少軍醫	少藥劑官	少主計	三年	二年
大尉	大機關士	大技士	大軍醫	大藥劑官	大主計	五年	三年
少佐	機關少監	少技監	軍醫少監		主計少監	三年	二年
大佐	機關大監	大技監	軍醫大監		主計大監	四年	二年
少將						三年	一年

海上勤務トハ航行シ得ル艦船ニ乗組ミ服務スルヲ云フ但機關大監軍醫大監軍醫少監主計大監主計少監大技監少技監大技士少技士及大藥劑官少藥劑官ハ海上勤務ヲ要セス

實役停年最下期限ヲ終フルモ海上勤務日數ハ其最下期限ニ足ラサルコトアルニ當リ前官ニ於テ其海上勤務最下期限外ニ上官ノ職ヲ奉シタル海上勤務日數アルトキハ之ヲ其不足日數ニ併算スルコトヲ得

第三條 中將ノ大將ニ進ムハ歴戰者或ハ遠征ニ從事シタル者ニ就キ特旨ヲ以テ親任セラ

ル、ヲ例トス

第四條 海上勤務ノ者ニシテ公務ニ原因セサル傷痍疾病其他公務ニ非サル事故ニ依リ陸

上ニ在ルノ日數ハ海上勤務ニ算入セス

第五條 休職停職收禁及處刑中ノ日數ハ實役停年ニ算入セス

第六條 敵ノ捕虜ト爲ルモ正當ノ理由アル者ハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得

第七條 戰時ニ在テハ各官ノ實役停年海上勤務最下期限ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第八條 進級ハ總テ拔擢ヲ以テス但停職中ノ者ハ進級セシメス

第九條 將官ノ進級並ニ大佐及相當官ノ少將及相當官ニ進ムハ上裁ヲ以テ除任セラ

ル、ヲ例トス

第十條 海軍大臣ハ上長官士官進級順序ヲ定ムル爲メ各所管長官ヲシテ候補名簿ヲ出サ

シメ須要ニ應シ之ヲ進級會議ノ調査ニ附シ決定候補名簿ヲ作ルモノトス

第二類 第二章 進級

決定候補名簿ヲ作ルノ法ハ候補名簿中ヨリ進級セシムヘキ者ヲ選抜シ其順序ニ依リ列序ヲ定ム

進級會議ハ各司令長官將官會議議員及軍醫總監主計總監ヲ以テ編制ス

決定候補名簿ハ其調製ノ日ヨリ次年決定候補名簿調製ノ日マテ之ヲ用ユヘシ

第十一條 海軍高等武官決定候補名簿ハ海軍大臣ヨリ奏上シ置キ補給ヲ要スル毎ニ其順序ニ從ヒ除任ノ事ヲ奏上スヘシ

第十二條 准士官ハ士官ニ進級スルヲ得サルヲ例トスト雖モ志操確實士官タルニ堪ヘ且學術技藝拔群ノ者ハ臨時検査ノ上士官ニ進級セシムルコトヲ得

第十三條 戰役ニ於テ功勞アル者若クハ多年軍務ニ從事シ進級資格ヲ備ヘタル者ニシテ海軍將校分限令第六條第一項第二項第四項第五項及第七條第八條ニ依リ現役ヲ退クトキハ其際特ニ進級セシムルコトヲ得但恩給ヲ受クル資格ニ在テハ前官ニ依ル

第十四條 左ノ場合ニ在テハ定規ニ依ラス進級セシムルコトヲ得
一 敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者
二 戰地ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

第十五條 輿軍ノ日ニ方リ戰地ニ臨ムノ首將ニハ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシ

○陸海軍將校同等官名譽進級方二十三年三月十日勅令第二十四號
朕陸海軍將校及同相當官退役ノ際名譽進級ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二十四號

陸海軍將校及同相當官現役中多年軍務ニ從事シ且ツ戰役ニ於テ功勞アル者ニシテ陸海軍將校分限令第五條第一項第二項第四項第五項及第六條第七條ニ依リ現役ヲ退クトキハ特ニ官等ヲ進ムルコトヲ得但恩給ヲ受クル資格ニ在テハ前官等ニ依ル

○海軍下士任用進級條例二十三年七月三十日勅令第五十二號

朕海軍下士任用進級條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第五十二號

海軍下士任用進級條例

第一條 海軍下士ハ三等ヲ初任トシ海上勤務一箇年半以上若クハ陸上勤務二箇年以上ノ實役停年ヲ經タル一等卒中ヨリ左ノ區別ニ從ヒ任用ス

- 一 二等兵曹ハ砲術練習艦若クハ水雷術練習艦卒業ノ一等水兵若クハ兵曹適任證書ヲ有スル一等水兵又ハ學術検査ニ合格シタル一等水兵ヨリ任用シ二等信號手ハ信號卒業證書ヲ有スル一等信號兵又ハ學術検査ニ合格シタル一等信號兵ヨリ任用ス(二十四年三月三十日勅令第三十號ヲ以テ本項ヲ改正ス)
- 二 二等機關手ハ機關學校卒業ノ一等火夫又ハ水雷術練習艦ニ於テ水雷教程ヲ卒業シ

第二類 第二章 進級

タル一等火夫一等鍛冶ヨリ任用ス

三 三等軍樂手ハ一等軍樂生中二等船匠手ハ一等木工中二等鍛冶手ハ一等鍛冶中三等主帳ハ一等尉夫中海軍大臣ノ定ムル所ノ教育規則ニ依リ卒業シタル者ヨリ任用ス

四 三等看護手ハ學術検査ニ合格シタル一等看病夫ヨリ任用ス

技工ハ前項ニ依ラス造船工學校卒業ノ生徒又ハ海軍大臣ノ定ムル任用試験ニ及第シタル者ヨリ任用ス

第二條 年齢二十年未滿ノ者ハ下士ニ任用スルコトヲ得ス(二十四年三月三十日勅令第三十一號ヲ以テ本條ヲ改正ス)

第三條 進級ハ超級ノ陞進ヲ許スコトナク缺員アルニアラサレハ進級セシムルコトナシ又機關學校ヲ卒業シタル機關手特別教育規則ニ依リ卒業シタル主帳ノ外ハ學術検査ニ合格シタル者ニアラサレハ進級セシムルコトヲ得ス

第四條 三等下士ニシテ海上勤務一箇年半以上若クハ陸上勤務二箇年以上二等下士ニシテ海上勤務二箇年以上若クハ陸上勤務二箇年八箇月以上一等下士ニシテ海上勤務三箇年以上若クハ陸上勤務四箇年以上ノ實役停年ヲ經タル者ハ各其上級ノ官ニ進級セシムルコトヲ得

第五條 戰時ニ在テハ實役停年最下期限ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第六條 敵ノ捕虜トナリ正當ノ理由アル者ハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得

第七條 收禁處刑及歸休中ノ日數ハ實役停年ニ算入セス

第八條 停年ヲ算スルニハ三月一日ヲ以テ終期トス

第九條 海上勤務ト稱スルハ軍艦ニ乗組ミ服務スルヲ云フ

第十條 公務ニ原因セサル傷疾疾病ニ依リ上陸療養ノ日數ハ海上勤務ニ算入セス

第十一條 海上勤務ヨリ陸上勤務ニ轉シタル者ノ停年ハ海上勤務日數ノ三分一ヲ加算シ陸上勤務ヨリ海上勤務ニ轉シタル者ノ停年ハ陸上勤務日數ノ四分一ヲ減算スルモノトス

第十二條 下士ノ任用進級ハ海兵團在籍ノ區別ニ從ヒ各鎮守府司令長官之ヲ行フモノトス但艦隊ニ屬スル下士ノ任用進級ハ艦隊司令長官之ヲ行ヒ一等下士ノ進級及造兵廠火藥工廠水路部ニ勤務セシムル技工ノ任用進級ハ海軍大臣之ヲ行フモノトス

第十三條 艦團隊長各廳長ハ毎年學術検査終ルノ後部下ノ下士及一等卒中進級セシムヘキ者ヲ選抜シ下士任用進級候補名簿ヲ調製シ所屬ノ鎮守府司令長官艦隊司令長官ニ出ス可シ但練習生タル下士ノ進級候補名簿ハ在籍海兵團ヲ管スル鎮守府司令長官ニ出スヘシ

鎮守府ニ屬セサル艦長廳長ノ調製セル下士任用進級候補名簿ハ候補者ノ在籍海兵團ヲ管スル鎮守府司令長官ニ出ス可シ但技工ノ候補名簿ハ海軍大臣ニ出ス可シ

第十四條 兵曹機關手ノ任用進級候補名簿技工ノ進級候補名簿ハ左ノ如ク區別ス可シ

甲 兵曹

- 一 掌砲ノ職ニ充ツ可キ者
- 二 掌水雷ノ職ニ充ツ可キ者
- 三 掌帆ノ職ニ充ツ可キ者
- 四 按針ノ職ニ充ツヘキ者(二十四年三月三十日勅令第三十一號ヲ以テ本項ヲ改正ス)

乙 機關手

- 一 汽關部員ノ職ニ充ツ可キ者
- 二 水雷工ノ職ニ充ツ可キ者

丙 技工

- 一 造船ノ職ニ充ツ可キ者
- 二 汽機汽罐製造ノ職ニ充ツ可キ者
- 三 造兵ノ職ニ充ツ可キ者
- 四 火藥製造ノ職ニ充ツ可キ者
- 五 水路測量ノ職ニ充ツ可キ者

第十五條 鎮守府司令長官ハ部下ノ軍港司令官參謀長軍港内ニ在ル部下艦團隊長ヲ會同シ艦隊司令長官ハ部下ノ司令官參謀長同港ニ在ル部下ノ艦長ヲ會同シ下士任用進級候補名簿ニ就キ候補者ノ技能ノ優劣ニ依リ順序ヲ定メ下士任用進級決定候補名簿ヲ調製シ

シ海軍大臣ニ出ス可シ

艦隊司令長官決定候補名簿ヲ調製スルニハ軍艦ノ本管ニ依リ鎮守府毎ニ區別ス可シ鎮守府司令長官他鎮守府本管ノ艦ヲ管轄スルコトアルトキ亦同シ

第十六條 決定候補名簿ノ効ハ次回ノ決定候補名簿調製迄ノモノトス

決定候補名簿ニ登載ノ後任用進級セシムル能ハサル事由ヲ生シタル者ハ之ヲ除名ス可シ

第十七條 定員外ノ下士ハ陞進ノ順次ニ當ルト雖モ定員ニ充テタル後ニ非サレハ敘任スルコトヲ得ス

練習生ハ豫備艦非役艦ノ定員ニ充ツ可キ現員不足アルトキニ進級セシムルコトヲ得

第十八條 左ノ場合ニ在テハ前諸條ノ例ニ依ルコトナク任用シ又ハ進級セシムルコトヲ得

一 敵前ニ在テ殊勳ヲ奏セシ者アル時

二 戰地ニ在テ人員多ク缺乏シ補給定規ヲ履ム能ハサル時

第十九條 鎮守府司令長官艦隊司令長官司令官ハ與軍ノ日ニ方リ戰地ニ派遣スル艦長ニ下士任用進級ノ權ヲ假スコトヲ得

○官吏服務紀律

二十七年七月二十九日勅令第三十九號

朕官吏服務紀律ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ施行セシム

第二類 第二章 服務

勅令第三十九號

官吏服務紀律

第一條 凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ法律命令ニ從ヒ各其職務ヲ盡スヘシ

第二條 官吏ハ其職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但其命令ニ對シ意見ヲ述ルコトヲ得

第三條 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス

官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス威權ヲ濫用セス謹慎懇切ナルコトヲ務ムヘシ

第四條 官吏ハ己ノ職務ニ關スルト又ハ他ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハス官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ禁ス其職ヲ退ク後ニ於テモ又同様トス

裁判所ノ召喚ニ依リ證人又ハ鑑定人ト爲リ職務上ノ秘密ニ就キ訊問ヲ受クルトキハ本屬長官ノ許可ヲ得タル件ニ限り供述スルコトヲ得

第五條 官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ス

第六條 官吏ハ本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職務ヲ離レ及職務上居住ノ地ヲ離ル、コトヲ得ス

第七條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ社長又ハ役員トナルコトヲ得

ス

第八條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務ニ關シ慰勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハス總テ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス

官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス

第九條 左ニ掲ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其饗燕ヲ受クルコトヲ得ス

一官廳ノ工事ヲ受負フ者

一官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者

一官廳ノ補助金ヲ受クル起業者

一官廳ノ用品ヲ調達スル者

一官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者

第十條 凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハス所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス

第十一條 官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハス商業ヲ營ムコトヲ得ス

第十二條 官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス

第十三條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フ

コトヲ得ス

第十四條 浪費シテ産ヲ破リ其分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ

第十五條 官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乗船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 凡ソ局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ其過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ内ニ在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ルトキハ事狀ヲ具ヘテ之ヲ本屬長官ニ稟告スヘシ其情ヲ知リ隱蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免レヌ

第十七條 本紀律ハ高等官判任官及俸給ヲ得テ公務ヲ奉スル者ニ任用ス

○官吏商業制禁 八年四月二十三日
太政官達第六十五號

官吏商賈ノ營業不相成ハ勿論ニ候處其區分判然タラサルニ付自今左ノ通被定候條此旨相達候事

但從前ノ指令之レニ牴觸スルモノハ廢止ト可心得事

第一條

一 凡ソ官吏タルモノ并ニ其家族トモ他ノ物品ヲ買入レ之ヲ餘人ニ賣以テ利ヲ獲ルモノ或ハ他ノ生産ヲ買入レ製作ヲ加ヘ之ヲ販賣シテ利ヲ獲ル等ノ業一切禁止ノ事

但神官教導職區戶長郵便取扱人學區取締役及ヒ等外吏ノ分ハ此限ニアラス (八年十月十二日太政官

達第七十六號ヲ以テ本項ヲ改正ス

第二條

一 (官吏ノ家族自己ノ財ヲ以テ商賈ノ業ヲ營マント欲スル者ハ分籍別居ノ上相營ムヘキ事) (二十年七月三十日勅令第
三十九號ニ依リ消滅ス)

第三條

一 左ノ數件ハ商賈ノ業ニアラサルニ付官吏タル者ト雖トモ禁制ニアラサル事
但商賈同様ノ塵ヲ開クハ不相成候事

一 鑛山借區營業及ヒ田地ヲ所有シ其利ヲ獲ル事 (八年五月二十四日太政官達第
八十七號ヲ以テ本項ヲ改正ス)

一 田地家屋ヲ貸シテ地代宿賃ヲ獲ル事

一 金銀ヲ貸シテ利息ヲ獲ル事

一 所有地ヨリ生スル物産ニ製作ヲ加ヘ賣拂事

○官吏會社ノ株主トナルヲ得ルノ區分 十四年五月六日
太政官達第三十七號

官吏商業區分ノ儀ニ付テハ兼テ相違候趣モ有之候處自今道路河港ノ修築海陸ノ運輸土地ノ開墾及ヒ殖産ノ事業ヲ以テ目的ト爲シ設立スル會社ノ株主トナルハ不苦候條此旨相達候事

○官地官林不用物品公賣ノ節其官廳ニ屬スル官吏投票ヲ禁ス 八年八月二
十七日

太政官達第五百十
二號院省使廳府縣

第二類 第二章 服務

官地官林及ヒ不用ノ物品等公ノ入札法ヲ以テ拂下ケ候節其官廳ニ屬スル官員ニ限リ本人ハ勿論其代理人ト雖モ投票爲致候儀不相成候條此旨相達候事

○官吏公衆ニ對シ政事上學術上ノ意見演述ノ件二十二年一月二十四日 内閣訓令各官廳

凡ソ官吏タル者ハ自今其職務外ト雖モ公衆ニ對シ政事上又ハ學術上ノ意見ヲ演說シ又ハ之ヲ敘述スルコトヲ得但各長官ノ監督ニ從屬スヘシ

法律規則ヲ以テ特ニ制限セラレタル官吏ハ前項ノ限ニ在ラス

○議員タルヲ得サル官吏非職休職者ニシテ議員タラントスル件二十二年六月四日 閣令第十八號

府縣會規則第十三條市制町村制第十五條衆議院議員選舉法第九條第十條ニ記載シタル官吏ハ在職者ノミニ限ルモノトス

非職者休職者ニシテ議員又ハ市町村ノ吏員タラントスルトキハ本屬長官ノ許可ヲ受ク可シ

○試補判任官見習ニテ一年志願兵トナル者服役方二十二年三月二十五日 閣令第十一號

試補及判任官見習ニシテ一年志願兵トナル者ハ在職ノ儘服役スルコトヲ得

但服役時日ハ實務練習ノ期限ニ算入セス有給者ニハ俸給ヲ給セサルモノトス

○外交官等賜暇歸朝規則二十四年七月八日 勅令第七十四號

朕外交官領事官貿易事務官公使館書記生及領事館書記生賜暇歸朝規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ

公布セシム

御名 御璽

勅令第七十四號

外交官領事官貿易事務官公使館書記生及領事館書記生賜暇歸朝規則

第一條 外交官領事官貿易事務官公使館書記生及領事館書記生引續歐米諸國ニ滿四年以上又ハ東洋及南洋諸國ニ滿三年以上在勤シタルトキハ外務大臣ハ公務ニ差支ナキ場合ニ限リ本人ノ願ニ依リ賜暇歸朝ヲ許可スルコトヲ得

第二條 歐米諸國ト東洋及南洋諸國ノ間ニ轉勤シタル場合ニ於テハ前條ノ在勤年期ハ新任國在勤ノ例ニ依ル但轉勤ノ後滿二年以上在勤スルヲ要ス

第三條 賜暇歸朝ノ者ハ往復日數ヲ除キ滿六箇月以内ニ出發歸任スヘシ但相當ノ理由アリテ期限内ニ出發シ難キ者ハ外務大臣ニ於テ豫メ日ヲ限リ特ニ出發延期ヲ許可スルコトアルヘシ

沿革要領

明治三年十二月二十日新律綱領ヲ頒布ス綱領中職制律ニ於テ官吏職務上ノ過失及私罪等ノ件ヲ掲ク●六年六月第二百六號布告ヲ以テ改定律例ヲ頒布ス●八年四月第六十五號達ヲ以テ官吏並其家族トモ前賣ノ營業ヲ禁ス●九年四月第四十八號布告ヲ以テ新律綱領改定律例中職制律ヲ廢ス●十五年七月第四十四號達ヲ以テ行政官服務紀律ヲ定ム●同月第四十五號達ヲ以テ行政官服務紀律ハ司法官吏ニ適用セシム●二十年七月勅令第三十七號ヲ以テ更ニ官吏服務

第二類 第二章 服務

紀律ヲ改正ス

○官吏懲戒例

九年四月十四日 太政官達第三十四號院省使府縣

今般官吏懲戒例左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏懲戒例

第一條 自今私罪ヲ除クノ外ハ官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ於テ懲戒ノ權ヲ有スヘシ

第二條 懲戒ノ法三種トス第一誣實第二罰俸第三免職

第三條 誣實ハ懲戒ノ輕キモノトシテ本屬長官ヨリ誣實書ヲ付ス

第四條 罰俸ハ一月分拾分ノ壹ヨリ少カラス三月分ヨリ多カラサルノ俸ヲ奪フ(十三年一月二日大政官達第四號ヲ以テ次項共改正ス)

俸ヲ追スルノ法其一月給俸半額以下ハ一月俸中ニテ追了シ其以上ハ毎月給俸ノ半額ヲ

(領置シ數滿テ)大藏省ニ送付ス(十九年三月六日閣令第三號ニ依リ括弧ノ内消滅ス)

第五條 懲戒ヲ以テ免職スル者ハ本屬長官ノ意見ニ從ヒ其奏任ハ具狀奏請シテ之ヲ免シ位

記ヲ返上セシム

但懲戒ニ由ルニアラスシテ免職スル者ハ長官旨ヲ諒シ本人ヨリ辭職ノ願ヲ差出サシメ

然後ニ免許スヘシ

第六條 諸省長官ハ所屬奏判任官ヲ懲戒ス

第七條 (十九年五月五日勅令第四十二號及同年七月十二日勅令第五十四號ニ依リ消滅ス)

第八條 四等以下ノ判事ハ司法卿之ヲ懲戒ス府縣官判事ヲ兼ル者ノ其所屬判任官ニ於ルハ他ノ奏任以上府縣官ノ協議ヲ得タル後之ヲ懲戒ス

第九條 府縣長官警視長官其所屬判任官ヲ懲戒スルニ其誣實ヲ專行スルコトヲ得ルヲ除クノ外其罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ「內務卿」ニ届出ツヘシ

府縣官判事ヲ兼ル者其所屬判任官ノ罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ「司法卿」ニ届出ヘシ

第十條 其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ノ罪ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ本屬長官專ニ處分スルコトヲ得ス

○官吏懲戒例ハ神官并準官吏等外等へ通用ス九年六月八日 太政官達番外

本年四月第二十四號達官吏懲戒例ノ儀ニ付尙又左ノ通相達候事

一 準官吏並ニ等外吏ハ本例ニ照シテ處分シ備其他種々ノ名義ヲ以テ公事ニ關スル者ハ本屬長官ノ見込ヲ以テ適宜處分スヘシ

一 官國幣社「神官」并ニ「教導職」ノ過失發見スル時ハ所在地方官ヨリ其狀ヲ具シテ「教部省」へ届出スヘシ(十年一月十一日大政官布告第四號第十七年八月十一日布達第十九號二十年三月十八日閣令第四號ニ依リ本項中消滅ス)

一 (十三年第二十三號達ヲ以テ本項廢止)

一 巡查及ヒ學校其他諸工場等ノ如キ別ニ懲罰規則有之分ハ本例ノ限ニアラス

一 「民費」ヲ以テ給俸ニ充ル者ノ罰俸ハ各其「民費」ニ割戻スヘシ(十一年七月二十二日第十九號太政官布告ヲ以テ民費ヲ地方稅ト

第二類 第二章 懲罰 九百九

○長官懲戒處分心得

九年四月十四日
太政官達番外

今般官吏懲戒例相定候ニ付テハ各長官ニ於テ懲戒處分左ノ通可相心得此旨内達候事

長官懲戒處分心得

- 一各長官ハ平生其所屬官ヲ監督シ若シ過失アレハ懲戒例ニ依リ處分スヘシ
- 一過失トハ過誤失錯不注意ニ出ル者ヲ云、其怠惰ニ出ル者亦過失トス、其素行脩マラスシテ官吏ノ體面ヲ汚ス者、亦過失ニ准シテ懲戒ヲ加フヘシ
- 一過失ノ事ニ害アル者ハ、重キニ從テ論ス、其事ニ害アリト云ヒ猶ホ改正スヘキ者、及ヒ事ニ害ナキ者ハ、輕キニ從テ論ス、但シ其情狀ニ從ヒ輕重ヲ酌量スルハ、專ラ本屬長官ノ所見ニ任ス
- 一同僚ノ官吏、共同ノ過失ヲ犯ス者ハ、主任ノ上官(省務ハ省長、寮司務ハ寮司長、廳務ハ廳長、一科一局一掛ノ事務ハ、各々其主任長、其實ニ任スヘシ、而シテ次官以下、遞ニ從テ以テ論ス、下官其造意ヲ以テ處行シ、猶ホ上官ノ許可ヲ得タル者ハ、上下官共ニ均ク其實ニ任スヘシ、下官職權内ノ事ヲ以テ處行シタル者ハ、上官、其實ニ任セス、若シ下官其職權ヲ越エ、專斷處行シタル者ハ、重ニ從テ論ス
- 一所屬官自ラ過失ヲ覺舉シ、進退伺ヲ捧ケルルハ、本屬長官、之ヲ推糾シ、其過失ニ止マル者ハ例ニ依リ處分ス、其有心故造ニ涉リ司法官ニ付スヘシトスル者ハ、懲戒例第十條

改

ニ依リ、長官ヨリ之ヲ司法官ニ移ス司法官若クハ檢事其檢事ヲ置カサル地方ニ於テハ判事若シ司法官其有心故造ニ非ス又律ニ觸レサルコトヲ判スルハ之ヲ本屬長官ニ還付シ長官ハ仍ホ懲戒例ニ依リ處分スルコトヲ得

- 一懲戒ニ依リ免職スル者ハ、ニケ年以上ヲ經ルノ後ニ非レハ、再タヒ收用スルコトヲ許サス、
- 一懲戒ニ依ルト否トヲ論セス、凡ソ免職スル者ヲ他ノ官廳ヨリ收用セントスルルハ、必ス舊本屬長官ニ通牒シテ、其意見ヲ問ヒ答復ヲ得ヘシ、
- 一過失ニ由ラスシテ免職スル者ハ、長官ヨリ旨ヲ諭シ辭表ヲ捧ケシム、其旨ニ違ヒ辭表ヲ捧ケサル者ハ、直チニ免職スルコトヲ得
- 一舊任中過失アル者、轉任ノ後、發覺、若クハ自ラ覺舉スル者ハ、舊任本屬長官ト通牒シ新任本屬長官ヨリ之ヲ懲戒スヘシ

○有心故造私罪ニ入ル職務上ノ犯罪者處分方

九年四月二十七日
司法省達第十四號

官吏懲戒例第十條ニ其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ云々ト有之ニ付テハ以來右等ノ者ハ司法卿若クハ檢事直ニ之ヲ受ケ司法卿若クハ檢事ニ於テ其有心故造ニアラス又律ニ觸レサルコトヲ判スルルハ之ヲ本屬長官ニ還付シテ其處分ニ任スヘキ儀ト可相心得此旨相達候事

○官吏懲戒例等ハ府縣立町村立學校長教員及書記ニ適用

十六年五月二十六日
文部省達無號

官吏懲戒例並ニ(行政官吏服務紀律)等ノ儀ハ府縣立町村立學校長教員及府縣立學校書記
ヘモ適用スヘキコト勿論ニ候條此旨相達候事(二十年七月三十日勅令第三十九號)
ヲ以テ行政官吏服務規律改正ス

○公私立學校生徒集合シ躁暴奇異ノ舉動有之時ハ學校長教員ハ官吏

懲戒例ニ據リ處分ス十八年一月二十四日
文部省達第三號

文部省本年一第貳號達ヲ以テ公私立學校生徒取締ノ儀相達候ニ付テハ今後若シ右様ノ舉
動有之ニ於テハ其情狀ニ因リ生徒ハ文部省明治十六年一第拾八號達ニ據リ處分シ學校
長教員等ハ文部省明治十四年七第貳拾六號達同十六年一第九號達及官吏懲戒例ニ據リ處
分シ私立學校ハ停止スヘシ

此旨相達候事

○戶長職務上ノ過失ハ官吏懲戒例ニ依ル十八年二月六日
內務省達第四號

戶長職務取扱上過失アルトキハ總テ官吏懲戒例ニ依リ處分スヘシ但明治十一年乙第八十
號達第五項ハ廢止ス

右相達候事

○巡查懲罰例九年八月五日
內務省達第九十二號

巡查懲罰例別紙ノ通改正候條此旨相達候事

別紙

巡查懲罰例

第一條 凡職務ノ規則ニ違背シ及ヒ怠慢失誤アル者ハ其情狀ヲ審按シ俸給一ヶ月百分ノ

一ヨリ少カラス一ヶ月ヨリ多カラサル罰金ヲ科シ輕キ者ハ阿責ニ止ム

第二條 凡犯狀ノ職務ヲ耻カシムルニ係ル者ハ免職ス

第三條 凡罰金未タ完納セサル中免職死亡等ニ係ル者ハ追徴スルヲ免ス

第四條 凡罰金ハ毎月ノ俸金ヲ控除シテ完納セシム

但月俸ノ三分一ヲ過グルヲ得ス

第五條 凡官物ヲ遺失及ヒ毀損スル者ハ相當ノ罰金ヲ科シ尙其代價ヲ賠償セシム

○看守懲罰十六年四月二十一日
內務省達第十七號

看守懲罰ノ儀ハ自今巡查懲罰例ニ準據スヘシ此旨相達候事

○税關監吏補賞罰規則二十三年十月八日
勅令第二百十八號

朕税關監吏補賞罰規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二百十八號

税關監吏補賞罰規則

第一條 監吏補其職務上勤勞アル者ハ事ノ大小難易ニ由リ每事五圓以下ノ賞ヲ與

第三條 監吏補其職務上怠慢過失アル者ハ情狀ニ由リ左ノ懲罰ニ處ス

第一 譴責

第二 罰俸

第三 免職

第三條 罰俸ハ月俸額百分ノ一以上一箇月以下トス

第四條 罰俸ハ毎月俸給ヲ以テ納付セシム但月俸額三分ノ一ヲ超ルコトヲ得ス

第五條 罰俸ニ處セラレタル者罰俸完納前退官免職又ハ死去スルトキハ之ヲ追徴セ

ス

第六條 大藏大臣ハ本規則ノ執行ヲ稅關長ニ委任スルコトヲ得

○陸軍懲罰令 十四年十二月二十八日 陸軍省達シ第七十三號

陸軍懲罰令別冊ノ通相定候條此旨相達候事

別冊

陸軍懲罰令

第一章 法例

第一條 此令ハ軍人ノ故意疎虞懈怠過失ノ輕犯ニシテ刑法ニ該ラサル者及ヒ素行修マラス軍人ノ體面ヲ汚ス者アル時上官之ヲ懲戒スルノ罰典トス但他ノ法律規則ニ依テ論ス可キ者ハ各其法律規則ニ從フ

第二條 各所管ノ長官軍團長師團長旅團長及ヒ衛戍司令官ハ部下ノ軍人此令ヲ犯ス者アル時之ヲ罰ス可シ(十八年八月二十一日陸軍省達シ第百二十一號及二十一年勅令第六十三號ヲ以テ本項中改正追加ス)

第三條 各軍隊ノ隊長ハ左ノ區別ニ從テ處分スヘシ

一 聯隊長ハ部下ノ軍人三十日以内ノ謹慎營倉

二 大隊長ハ部下ノ士官十日以内ノ謹慎下士二十日以内ノ營倉兵卒三十日以内ノ營倉

三 中隊長ハ部下ノ下士十日以内ノ營倉兵卒二十日以内ノ營倉

獨立若クハ分屯ノ大隊長及憲兵隊長ハ第一項ニ獨立若クハ分屯ノ中隊長及分遣隊長タル中少尉并ニ憲兵分隊長ハ第二項ニ軍樂隊長ハ第三項ニ同シ(十八年八月三十一日陸軍省達シ第百二十一號及二十一年勅令第五十九號ヲ以テ本項ヲ改正ス)

第四條 參謀本部各局長陸軍大學校長砲工學校長陸地測量部長士官學校長砲兵會議長工

兵會議長乘馬學校長砲兵射的學校長幼年學校長要塞砲兵幹部練習所長大隊區司令官警

備隊司令官軍吏學舍長軍醫學校長近衛軍醫長師團軍醫長ハ前條第一項ニ軍馬育成所長

蹄鐵學舍長衛戍病院長教導團病院長ハ同第二項ニ砲兵工廠生徒學舍長輜重廠長武庫主

管タル尉官警備隊砲兵隊長監獄長重症病馬治療所長ハ同第三項ニ準シテ其處分ヲ爲ス

コトヲ得(十八年八月三十一日陸軍省達シ第百二十一號及二十一年八月十六日勅令第

六十三號二十二年十一月十五日勅令第百十八號ヲ以テ本條中改正追加ス)

教官ニシテ部隊ヲ率井他方ニ出ツルトキ其最高級ノ者懲罰ノ處分ヲ爲スコトヲ得其權

限大中佐ハ前條第一項ニ少佐ハ第二項ニ大尉ハ第三項ニ準ス(二十二年四月三十日勅令第五

十九號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

九百十五

第五條 前二條ニ因リ處分ヲ爲シタル時ハ各秩序ニ從ヒ其屬スル所ノ上官ニ申報ス可シ
若シ其犯行權限外ノ日數ニ該ル者ト認ル時ト雖モ先ツ其權限ニ從テ之ヲ處分シ意見ヲ
附シテ申報ス可シ(十八年八月三十一日陸軍省達七第
百二十一號ヲ以テ本條ヲ改正ス)

申報ヲ受ケタル隊長長官ハ各權限ニ從ヒ其罰ヲ變更シ若クハ日數ヲ増加スルヲ得

第六條 (二十一年八月十六日勅令第六
十三號ヲ以テ本條ヲ削除ス)

第七條 甲所ニ於テ此令ニ掲クル犯行アル者未タ處分ヲ經スシテ乙所ニ轉スル時ハ甲乙
互ニ通議シ乙所ニ於テ處分ス可シ

第八條 此令ニ掲クル所ノ犯行二箇以上俱ニ發スル時ハ各其罰ヲ科ス但一所爲二箇以上
ノ犯行ニ觸ル、時ハ其一ヲ科ス

第九條 軍屬及陸軍所屬ノ諸生徒此令ヲ犯ス者アルキハ軍人ト同ク處分ス可シ但軍屬高
等官ハ將校ニ判任官ハ下士ニ諸生徒其他ノ者ハ諸卒ニ準シテ處分ス(二十一年八月十六
日勅令第六十三號
ヲ以テ本條
ヲ改正ス)

第二章 罰令

第十條 將校及ヒ同等官ニ科ス可キ罰目

一 重謹慎

二 輕謹慎

第十一條 下士ニ科ス可キ罰目

一 重營倉

二 輕營倉

第十二條 諸卒ニ科ス可キ罰目

一 重營倉

二 輕營倉

第十三條 謹慎ハ勤務ヲ停メ他出及ヒ外人ト接見通信スルヲ禁ス其日數ハ一日以上三
十日以下ト爲ス

重謹慎ハ俸給ノ半額ヲ減シ輕謹慎ハ其四分ノ一ヲ減ス

第十四條 謹慎限内疾病アレハ醫ヲ延クヲ許シ水火等ノ災害アル時ハ防救遷徙スルヲ
ヲ許ス

第十五條 下士上等兵屢第十一條第十二條ノ處分ヲ受ケ仍ホ悛改ノ狀ナク部下ノ儀表ニ
堪ヘサル者ハ其官職ヲ免ス但兵役ハ之ヲ免セス其官職ヲ免シタル者悛改ノ効アルトキ
ハ之ヲ免シタル日ヨリ六月ノ後之ヲ復スルコトヲ得(二十一年八月十六日勅令第六
十三號ヲ以テ本條ヲ改正ス)

官職ヲ免シ又ハ之ヲ復スルハ近衛都督師團長若クハ之ト同等以上ノ權アル長官ニ於テ
之ヲ爲ス

第十六條 重營倉ハ演習ノ外勤務ヲ停メ營倉ニ錮シ寢具ヲ貸與スルヲナク唯飯及ヒ水鹽
ヲ給ス其日數ハ一日以上三十日以下ト爲ス但七十二時ノ内ニ二十四時間ハ輕營倉ニ移

ス可シ(十八年八月三十一日陸軍省達七第百二十一號ヲ以テ本條中改正ス)

第十七條 輕營倉ハ演習ノ外勤務ヲ停メ營倉ニ錮ス其日數ハ一日以上三十日以下ト爲ス

第十八條 營外居住ノ者ヲ營倉ニ處スル時ハ囚獄ノ監倉ニ於テ之ヲ行フ

第十九條 重營倉ニ處スル時營内居住ノ者ハ俸給十分ノ八ヲ減シ營外居住ノ者ハ其半額ヲ減ス

輕營倉ニ處スル時營内居住ノ者ハ俸給十分ノ六ヲ減シ營外居住ノ者ハ其四分ノ一ヲ減ス

第二十條 第二十五條ニ掲クル所ノ犯行疎虞懈怠若クハ過失ニ係ル者ハ輕謹慎輕營倉ニ處シ其故意ニ係ル者ハ重謹慎重營倉ニ處ス

第二十一條 營倉ニ處ス可キ者下士上等卒諸生徒及ヒ營外居住ノ者ナル時ハ禁足ニ在營兵卒ナル時ハ苦役ニ換フルヲ得

禁足若役ニ處スル時其日數ハ重營倉ノ一日ヲ三日ニ輕營倉ノ一日ヲ二日ニ折算ス

禁足若役ニ處スル時營内居住ノ者ハ其俸給十分ノ二ヲ減ス

第二十二條 禁足ハ勤務演習ノ外營外ニ出ルヲ禁ス

營外居住ノ者ハ勤務演習ノ外他出ヲ禁ス但水火災疾病等アル時ハ此限ニ在ラス

第二十三條 若役ハ勤務演習ノ外營外ニ出ルヲ禁シ雜役ヲ執ラシム

第二十四條 諸卒ハ犯行ノ情狀ニ因リ罰限滿ルノ後三十日以内仍ホ其佩劍ヲ禁スルヲ得

得

第三章 犯行

第二十五條 犯行ノ款目左ノ如シ

一 職務ノ權限ヲ誤ル者

二 訓導ノ道ヲ失フ者

三 上申下達其他定期アル時日ヲ稽緩スル者

四 文書計算ヲ誤ル者

五 命令ヲ誤リ若クハ之ヲ誤リ傳フル者

六 物件ノ調製貯藏運搬支給ヲ誤ル者

七 職役若クハ屯營本隊ヲ離ル、者

八 他方ニ赴キ歸著ノ期ニ後ル、者

九 行軍ニ際シ發程及ヒ乘艦ノ期ニ後ル、者

十 召集ノ期ニ後ル、者

十一 受寄ノ財物若クハ借用物ヲ典却スル者

十二 官物ヲ擅用スル者

十三 法則命令ヲ遵奉セス若クハ之ヲ誹謗スル者

十四 罵詈侮慢若クハ鬭爭スル者

- 十五暴行脅迫スル者
 - 十六猥リニ劔ヲ拔ク者
 - 十七酩酊シテ事ヲ省セサル者
 - 十八言語所爲詐僞ニ渉ル者
 - 十九疾病事故ニ託シ勤務演習ヲ免レントスル者
 - 二十抗言恃頑從順ノ道ヲ失フ者
 - 二十一犯罪アルヲ知テ之ヲ曲庇スル者
 - 二十二勤務演習集合ノ期ニ後レ若クハ之ヲ缺キ若クハ之ヲ懈ル者
 - 二十三服裝法ニ違フ者
 - 二十四敬禮ヲ闕ク者(廿一年八月十六日勅令第六十三號ヲ以テ本項ヲ改正ス)
 - 二十五官給ノ物件措置拭拂法ニ違フ者
 - 二十六物件ヲ誤毀遺失若クハ汚損スル者
 - 二十七失言過誤若クハ應答ノ事理ヲ誤ル者
 - 二十八軍人ノ態度ヲ失フ者
 - 二十九上ニ掲クル犯目ノ外素行修マラサル者
- 海軍懲罰令二十二年十二月二十三日勅令第三百三十四號
 朕海軍懲罰令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第三百二十四號

海軍懲罰令

- 第一條 本令ハ軍人ノ故意疎虞懈怠過失等ノ所爲ニシテ刑法ニ該ラサル者及ヒ素行修マラス軍人ノ體面ヲ汚ス者ヲ懲戒スルノ罰典トス但他ノ法律規則ニ依テ論ス可キ者ハ各其法律規則ニ從フ
- 第二條 司令官ト稱スルハ鎮守府司令長官軍港司令官要港司令官艦隊司令長官艦隊司令官ヲ謂フ
- 第三條 艦團隊長ト稱スルハ海軍全般ノ艦船團隊ノ長ヲ謂フ
- 第四條 各廳長ト稱スルハ海軍大臣ニ直屬スル各廳ノ長司令官ニ直屬スル參謀長部長及ヒ其他ノ長ヲ謂フ
- 第五條 所轄長ト稱スルハ各廳長ニ屬スル校部所及ヒ監獄等ノ長ヲ謂フ
- 第六條 司令官艦團隊長及ヒ各廳長ハ部下軍人ノ本令ヲ犯シタル者ヲ處分ス
- 第七條 艦團隊副長及ヒ所轄長ハ部下ノ准士官十日以内ノ謹慎下士二十日以内ノ禁足卒三十日以内ノ禁足ニ該ル者ヲ處分ス
- 分隊長及ヒ分隊長ニ同シキ職權ヲ有スル者ハ部下ノ下士十日以内ノ禁足卒二十日以内ノ禁足ニ該ル者ヲ處分ス

第二類 第二章 懲罰

第八條 懲罰權ノ全部ヲ有セサル各官部下軍人ノ犯行權限外ノ日數ニ該ルト認ムルトキハ意見ヲ附シテ上官ニ具申シ其處分ヲ請フ可シ

第九條 軍屬本令ヲ犯シタルトキハ軍人ト同シク處分ス海軍所屬ノ生徒乘艦中本令ヲ犯シタルトキ亦同シ但奏任官ハ將校ト同シク處分シ判任官一等ハ准士官ト同シク處分シ判任官二等以下及ヒ生徒ハ下士ト同シク處分シ其他ハ卒ト同シク處分ス

第十條 罰目左ノ如シ

- 一 謹慎
- 二 禁足

謹慎ハ准士官以上ニ科スル罰トシ禁足ハ下士以下ニ科スル罰トス

第十一條 謹慎ハ居宅又ハ艦團隊校内ニ於テス

居宅ニ於テスル者ハ他出及ヒ外人ト接見通信スルヲ禁ス但疾病アレハ醫ヲ延クコトヲ得

艦團隊校内ニ於テスル者ハ外出及ヒ他人ト會集通信スルヲ禁ス

謹慎ハ一日以上三十日以下トス

第十二條 禁足ハ勤務及ヒ演習ノ外艦團隊校若クハ居宅ヲ出ツルコトヲ禁ス

禁足ハ一日以上三十日以下トス

第十三條 軍中合圍ノ地若クハ艦團隊校内ニ在テハ謹慎ニ處セラレタル者ヲシテ勤務ニ

服セシムルコトヲ得其勤務日數ハ謹慎日數ニ算入ス

第十一條ノ規則ハ前項ノ場合ニ於テ亦之ヲ適用ス但其勤務ニ關シテハ此限ニ在ラス

第十四條 犯行二個以上俱ニ發スルトキハ各其罰ヲ科ス但一所爲二個以上ノ犯行ニ觸ルハトキハ其一ヲ科ス

第十五條 本令ニ依リ處分シタル軍屬ノ犯行ハ官吏服務規律ニ觸ル、モ懲戒處分ヲナスコトナシ

第十六條 甲所ニ於テ本令ヲ犯シ未タ處分ヲ受スシテ乙所ニ轉シタル者ハ乙所ニ於テ之ヲ處分ス

第十七條 本令ヲ犯シタル者未タ處分ヲ受スシテ現役ヲ離レ若クハ非職ト爲リ若クハ海軍ノ名籍ヲ除カレタルトキハ其罰ヲ科セス

第十八條 犯行ノ科目左ノ如シ

- 一 擅ニ艦船團隊校ヲ離レ若クハ職役ヲ離レ又ハ勤務ヲ缺キ若クハ之ヲ懈リタル者
- 二 職務ノ權限ヲ侵シ若クハ之ヲ誤リタル者
- 三 成規ニ違ヒタル處置ヲ爲シ若クハ命令ヲ怠リ若クハ之ヲ誤リ若クハ之ヲ誤リ傳ヘタル者
- 四 祕密ノ事件ヲ漏洩シタル者
- 五 上申下達其他定期アル事件ヲ稽延シタル者

- 六 服順ノ道ヲ失ヒタル者
- 七 演習集合ノ期ニ後レ若クハ之ニ會セサル者
- 八 徵召ノ命ヲ受ケ故ナク到着ノ期限ニ後レタル者
- 九 允許ヲ得テ他方ニ赴キ故ナク歸著ノ期限ニ後レタル者
- 十 言語所爲詐偽ニ渉ル者
- 十一 暴行脅迫シタル者
- 十二 濫ニ銃砲ヲ發シ又ハ劔ヲ拔キタル者
- 十三 罵詈侮慢若クハ鬪争シタル者
- 十四 犯罪アルコトヲ知テ之ヲ隱庇シタル者
- 十五 人ヲ懲罰ニ陥ル爲メ申告ヲ爲シタル者
- 十六 疎虞懈怠過失ニ因テ官ノ文書若クハ器具物品ヲ毀損亡失若クハ汚シタル者
- 十七 圖書計算ヲ誤リタル者
- 十八 各自擔當ノ鎖鑰ヲ忘リタル者
- 十九 兵器彈藥器械船具糧餉其他物品ノ調製貯藏運搬若クハ支給ノ法ニ違ヒ若クハ之ヲ誤リタル者
- 二十 故ラニ糧食分配ノ不平均ヲ致シタル者
- 二十一 官物ヲ濫用若クハ浪費シタル者

- 二十二 兵器其他物品ノ配置保存法ニ違ヒタル者
- 二十三 允許ヲ得スシテ官給其他渡付ノ物品ヲ貸借シタル者
- 二十四 受寄ノ財物若クハ借用物ヲ典却シタル者
- 二十五 下士卒定數ノ被服ヲ所持セサル者
- 二十六 守兵ニ對シ濫ニ談話ヲ爲シ又ハ之ニ戯レタル者
- 二十七 酩酊シテ事ヲ省セサル者
- 二十八 軍人其態度ヲ失シタル者
- 二十九 禮節式ニ違ヒタル者
- 三十 服裝式ニ違ヒ又ハ制規外若クハ命令外ノ服ヲ著シタル者
- 三十一 法則命令ヲ誹謗シ若クハ之ニ違ヒタル者
- 三十二 素行修マラサル者
- 三十三 疎虞懈怠過失ニ因リ艦船若クハ其他ノ物件ヲ毀損シ或ハ艦船ヲ擱岸坐礁其他危險ニ付シタル者
- 三十四 艦船ノ乘員不能ニ因リ其艦船ヲ擱岸坐礁其他危險ニ付シ若クハ之ヲ毀損シタル者
- 三十五 允許ヲ得サル物品ヲ艦船ニ積載セタル者
- 三十六 砲具其他凭ル可ラサル場所ニ凭リタル者

- 三十七 艦船團隊校内ニ於テ巡檢後故ナク寢所ヲ離レタル者
- 三十八 艦船團隊校内ニ於テ濫ニ他人ノ室ニ入リタル者
- 三十九 艦船團隊校内ニ於テ濫ニ庖厨ニ入リタル者
- 四十 艦船團隊校内ニ於テ允許ヲ得スシテ火藥其他破裂スヘキ物品ヲ携帯シタル者
- 四十一 艦船團隊校内ニ於テ定所外ヨリ物品ヲ出入若クハ投棄シタル者
- 四十二 艦船團隊校若クハ工場内ニ於テ醜行ヲ爲シタル者
- 四十三 舷側柵塀等ニ貼紙又ハ樂書シタル者
- 四十四 允許ヲ得スシテ艦船團隊校内ニ酒類ヲ入レ又ハ艦船團隊校内ニ於テ酒類ヲ授受若クハ賣買シ又ハ工場内ニ於テ飲酒シタル者
- 四十五 擅ニ艦船團隊校内ニ於テ鳥獸類ヲ蓄ヒ又ハ工場内ニ於テ濫ニ菓實貝藻ヲ採取シ若クハ樹木花卉ヲ折採シ又ハ魚鳥ヲ捕ル者
- 四十六 艦船團隊校内ニ於テ濫ニ定所外ニ睡眠シ又ハ工場内ニ於テ就業時間中睡眠シタル者
- 四十七 濫ニ砲門ヨリ艦内ニ出入シ又ハ柵塀牆壁等ヲ踰越シテ團隊校工場構内ニ出入シタル者
- 四十八 濫ニ團隊校工場構内ニ立入り故ナク諸方ヲ徘徊シ又ハ構内海岸へ著船シタル者

- 四十九 艦船團隊校内ニ於テ定所外ニ飲食シ又ハ工場内ニ於テ就業時間中喫飯若クハ喫飯ノ準備ヲ爲シタル者
- 五十 艦船團隊校工場内ニ於テ定時限ノ外又ハ禁制ノ場所ニ於テ燈火其他ノ火ヲ用ヒ又ハ火ノ取扱ヲ疎ニシ若クハ吸烟シタル者
- 五十一 守所又ハ整列就業中ニ在テ喧噪戲謔若クハ雜話シタル者
- 五十二 艦船團隊校若クハ工場内ニ於テ定所外ニ尿尿シタル者
- 五十三 濫ニ裸體ト爲リタル者
- 五十四 工場内ニ於テ濫ニ禁止ノ場所ニ立入りタル者
- 五十五 工場内ニ於テ火ノ始末ヲ爲サスシテ退散シ又ハ濫ニ焚火シタル者
- 五十六 工場内ニ於テ濫ニ遊戯放歌シ又ハ高聲ヲ發シタル者
- 五十七 工場内ニ於テ賭勝負及ヒ之ニ類スル所爲ヲ爲シタル者
- 五十八 工場内ニ在テ基將棋雙六骨牌等ノ戲具ヲ携帯スル者
- 五十九 就業時間中私用ノ物品ヲ製造シ若クハ他人ノ依頼ニ應シ之ヲ製造スル者又ハ之ヲ依頼シ及ヒ依頼ヲ紹介シタル者
- 六十 就業時間中濫ニ他ノ工場ニ至リ若クハ他人ノ工業ヲ妨害シ若クハ自己ノ工業ヲ休止シタル者
- 六十一 工場内ニ於テ各自使用スヘキ器具材料ヲ整頓セスシテ散亂セシメタル者

六十二 工場内ニ於テ揭示標札其他諸報告榜標等ヲ毀損シタル者
 六十三 工場内ニ於テ瓦礫等ヲ抛テタル者
 六十四 工場内ニ於テ故ラニ職札ヲ毀損シ或ハ紛失セシメ又ハ札場ニ於テ投擲シタル者
 六十五 工場内ニ於テ職札ノ掛ケ外シテ他人ニ依頼シタル者及ヒ之ヲ承諾シテ掛ケ外シテ爲シタル者

第十九條 練習所病院監獄ニ於テ犯行ノ者ハ艦團校内ニ於ケル犯行ト同シク處分ス

○判事懲戒法 二十三年八月二十日 法律第六十八號

朕判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第六十八號

判事懲戒法

第一章 總則

第一條 凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テスヘシ

第一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

第二 官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二章 懲罰

第二條 懲罰ハ左ノ如シ

第一 譴責

第二 減俸

第三 轉所

第四 停職

第五 免職

第三條 前條何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所之ヲ定ムヘシ

懲戒裁判所ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以内ヲ減ス

第五條 轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併セ科スルコトヲ得

第六條 停職ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止ス

停職中ハ俸給ヲ給セズ

第七條 免職ノ言渡ヲ受ケタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ失フ

第三章 懲戒裁判所

第八條 懲戒裁判所ハ各控訴院及大審院ニ之ヲ置ク

第九條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ控訴院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事五人ヲ以テ組立テ院

第二類 第二章 懲罰

長ヲ以テ長トス

大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事七人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

第十條 控訴院長及大審院長ハ毎年部長ト協議シ前以テ懲戒裁判所ノ判事ヲ定メ並ニ裁判所長判事差支アルトキノ代理順序ヲ定ム

第十一條 懲戒裁判所ノ判事ノ忌避回避ニ付テハ治罪法ノ規程ヲ準用ス

第十二條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ判事ノ職務ハ檢事長之ヲ行ヒ大審院ニ於ケル懲戒裁判所ノ判事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行フ

第十三條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命シ大審院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命ス

第十四條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ院長及部長ヲ除ク外其ノ院ノ判事及其ノ管轄區域内ノ總テノ下級裁判所ノ判事ニ對スル懲戒事件ヲ管轄ス

第十五條 大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ左ノ事件ヲ管轄ス

第一 第一審ニシテ終審トシテ大審院ノ判事控訴院長及控訴院部長ニ對スル懲戒事件
第二 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ裁判ニ對スル抗告及控訴

第十六條 懲戒裁判所ノ管轄ハ所犯ノ地ニ拘ラス裁判手續開始ノトキ判事ノ奉職スル裁判所ニ依テ定マルモノトス

判所ニ依テ定マルモノトス

第四章 裁判手續

第十七條 懲戒裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

第十八條 檢事ハ裁判手續ノ開始ヲ拒ミタル懲戒裁判所ノ決定ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條 抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判ス若シ抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條 開始決定ニハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示スヘシ

第二十一條 開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條 懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シタル院ノ判事若ハ管轄區域内ノ地方裁判所ノ判事ニ下調ヲ命スヘシ

第二十三條 下調ノ命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ
受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得
被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

證人ハ治罪法ノ規程ニ從ヒ之ヲ訊問スヘシ

第二類 第二章 懲罰

- 第二十四條 受命判事ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得
- 第二十五條 受命判事ハ下調結了ノ後調書及一切ノ證據ヲ懲戒裁判所長ニ差出シ裁判所長ハ二十四時内ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ
- 第二十六條 檢事ハ三日内ニ意見ヲ付シ記録ヲ懲戒裁判所長ニ還付スヘシ
- 第二十七條 懲戒裁判所ハ下調ヲ十分ナリト思料スルトキハ口頭辯論ヲ爲スノ決定ヲ爲シ又ハ免訴ノ判決ヲ爲スヘシ
- 免訴ノ理由ナキモ現時裁判ニ著手スルコトヲ得サルトキハ訴追停止ノ決定ヲ爲スヘシ
- 第二十八條 前條ノ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ
- 第二十九條 懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ
- 第三十條 辯論ハ之ヲ公行セス
- 第三十一條 口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモノトス
裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ
- 第三十二條 懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得
- 第三十三條 被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用井ルコトヲ得

- 第三十四條 懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ
- 第三十五條 判決ハ即時ニ之ヲ言渡ス若シ即時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日内ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ
- 第三十六條 被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖判決ヲ言渡スコトヲ得
- 第三十七條 評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規程ニ從ヒ證據ノ判斷ニ關シテハ治罪法ノ規程ニ從フ
- 第三十八條 被告及檢事ハ十四日ノ期間内ニ控訴ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ノ送達アリタルヨリ起算ス
- 第三十九條 控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ爲スヘシ
控訴狀ハ控訴ノ申立ヲ爲シタルヨリ十四日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ
- 第四十條 懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ謄本ヲ對手人ニ送達スヘシ
對手人ハ送達ヲ受ケタルヨリ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得
- 第四十一條 懲戒裁判所ハ前號ノ期間經過シタル後其ノ書類ヲ控訴裁判所ニ送付スヘシ
控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ
- 第四十二條 控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出テサル證據ヲ提出シタルトキハ之ヲ取調フヘシ若シ第一審ニ於テ訊問シタル證人ノ再訊問ヲ申立テタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於

テ陳述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實ヲ證言セントノ推測十分ナルトキニ限り之ヲ許ス

職權ヲ以テスル訊問ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條 第二審ニ於ケル裁判手續ハ第三十條乃至第三十七條ノ規程ヲ適用ス

第四十四條 控訴ノ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ其ノ費用ヲ控訴人ニ負擔セシムヘシ

控訴ノ理由アリトスルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴裁判所更ニ判決ヲ爲シ且其

ノ費用ニ付裁判ヲ爲スヘシ

控訴完結ノ後其ノ記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ原裁判所ニ

之ヲ還付スヘシ

第四十五條 調書ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ治罪法ノ規程ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ

第四十六條 懲戒裁判所ノ裁判ハ確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第四十七條 懲戒裁判確定シタルトキハ懲戒裁判所長ハ司法大臣ニ事件ノ情況ヲ報告シ

且判決ノ謄本ヲ差出スヘシ

第四十八條 懲戒裁判所減俸轉所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタルトキハ司法大臣其ノ執行

ノ手續ヲ爲ス

第五章 職務停止

第四十九條 判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セララルモトス

第一 刑事裁判手續ニ於テ勾留セラレタルトキ

第二 刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第三 懲戒裁判ニ依テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第五十條 刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其ノ刑期ノ終ルマテ當

然職務ヲ停止セララルモトス

第五十一條 懲戒裁判所ハ懲戒事件ノ轉所停職若ハ免職ニ該當スルモノト思料スルトキ

ハ何時ニテモ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續結了ニ至ルマテ被告ノ職

務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ職權ヲ以テ決定ヲ爲ストキハ檢事ノ意見ヲ聽ク

ヘシ

刑事裁判手續中何レノ場合ニ於テモ懲戒裁判所ハ其ノ手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務

ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

第五十二條 懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其ノ判事ノ爲シ

タル職務上ノ行爲ハ無効トス

第五十三條 被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六章 懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係

第二類 第二章 懲罰

第五十四條 刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得
ス

懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ其
ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第五十五條 刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキ
ト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルヲ妨ケス

刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ懲戒裁判手續ニ於テ
仍ホ訴追スルコトヲ得

第七章 補則

第五十六條 懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關ルモノト雖本法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第五十七條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

●沿革要領

明治九年四月第四十八號布告ヲ以テ新舊綱領改定律例中職制律ヲ廢シ自今官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ任シテ懲
戒セシム○同月第三十四號達ヲ以テ官吏懲戒例ヲ定ム○十三年一月第四號ヲ以テ前令中第四條ヲ改正ス

○官吏非職條例

十七年一月四日
太政官達第三號

官吏非職條例左ノ通相定候條此旨相達候事

官吏非職條例

第一條 官吏判任官以上并ニ出任
御用掛モ之ニ準ス 奉職中各官廳ノ事務張弛其他疾病等ノ事故ニ因リ本屬長官ハ
其僚屬ノ官吏ニ非職ヲ命スルコトヲ得但勅任官ノ非職ハ上裁ニ依リ奏任官ハ太政大臣ノ

認可ヲ經テ之ヲ命ス(十七年四月二十五日太政官達第
三十九號ヲ以テ本條中削除ス)

第二條 非職員ハ其本官ヲ奉シテ常ニ其職務ニ從事セス其他總テ在職官吏ニ異ナルトナシ
第三條 本屬長官ハ事務ノ都合ニ依リ何時ニテモ非職員ヲシテ更ニ其職務ニ從事セシムル
コトヲ得

非職員復職スルトキ勅任官ハ上裁ニ依リ奏任官ハ太政大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ命ス
第四條 非職ハ三年ヲ一期トス期滿レハ其官ヲ免ス

第五條 〔非職中ノ俸給ハ現俸二分ノ一ヲ支給ス〕(二十四年三月二十二日勅令第
二十三號ヲ以テ本條ヲ削除ス)

第六條 廢廳廢官ノ際御用滞在ヲ命スル者アルトキハ本條例ニ準據ス(十七年四月二十五日太政
官達第三十九號ヲ以テ本
條ヲ追
加ス)

第七條 非職員ハ特ニ本屬長官ノ許可ヲ得テ市町村及學校病院會社其他法人ノ業務ニ從事
シ其役員ト爲ルコトヲ得(十七年九月二十五日太政官達第七十七號ヲ以テ本條ヲ
追加シ廿二年七月二十三日勅令第百一號ヲ以テ改正ス)

非職員ハ特ニ本屬長官ノ許可ヲ得テ地方病院學校及農工商陸海運輸等會社ノ業務ニ從事
シ其役員ト爲リ又ハ商業ヲ營ムコトヲ得但此場合ニ於テハ第五條ノ俸給ヲ支給セス(十七
年九月二十五日太政官達第七十七號ヲ以テ本項ヲ追加シ二十
三年七月二十五日勅令第百三十九號ヲ以テ本項ヲ改正ス)

第八條 (同上ヲ以テ本
條ヲ削除ス)

○官吏非職給改正

二十四年三月二十一日
勅令第二十三號

朕官吏非職條例中削除ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本令ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

勅令第二十三號

官吏非職條例第五條ヲ削除ス但シ明治二十四年四月一日現在ノ非職員ニハ其非職年限内仍ホ現俸四分ノ一ヲ支給ス

○非職給改正ニ付支給額訂正仕拂命令方

二十四年三月二十七日
大藏省訓令第二十五號 北海道廳府縣

二十一年度以前非職者俸給支給額從前令達ノ分明治二十四年四月一日以降變更ヲ來スヘキモ別ニ訂正令達セサルニ付本年三月勅令第二十三號但書ニ據リ支給額訂正仕拂命令ヲ發スヘシ

○非職官吏俸給下渡轉居及商業許可

十九年二月二十七日
關令第一號

非職官吏ノ俸給下渡住居移轉及商業ニ關シ左ノ通之ヲ定ム

第一條 凡ソ非職官吏ノ俸給ハ大藏省ニ於テ下渡スヘシ

第二條 本屬長官ハ非職官吏ノ官等俸給氏名住所及非職ノ年月日等ヲ大藏大臣ニ通知スヘシ

第三條 非職官吏ハ本屬長官ニ届出テ本屬官廳所在ノ地ノ外ニ住居スルコトヲ得

第四條 本屬長官前條ノ届出ヲ受ケタルトキハ大藏大臣ニ通知シ大藏大臣之ヲ地方官ニ通知シ該廳ヲ經由シテ俸給ノ下渡ヲ爲スヘシ

第五條 非職官吏移轉地ニ到着シタルトキハ其住所ヲ本屬長官及地方官ニ届出ヘシ嗣後更ニ其住所ヲ移轉スルトキモ亦同シ

第六條 非職官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得テ商業ヲ營ムコトヲ得

○非職官吏ノ俸給ハ所屬廳ヨリ下附ス

二十二年三月二十一日
關令第八號

非職官吏ノ俸給ハ明治二十二年度以降其所屬廳ニ於テ下渡ス可シ但明治二十二年三月三十一日マテニ非職ヲ命セラレタル官吏ノ俸給ハ從前ノ通大藏省ニ於テ下渡ス可シ

○非職官吏俸給支給方

二十年三月二十四日
大藏省令第五號

客年當省令第十七號ハ本月限り廢止シ非職官吏俸給ニ箇月分ヲ積算シ年俸ニ準スノ儀ハ總テ客年當省令第十二號及ヒ第二十號高等官及ヒ判任官俸給支給細則ニヨリ支給ス

但非職俸給渡日ハ高等官ハ一箇年ヲ四期ニ分チ每期中ノ月四日、當日休暇ナル時ハ順延ナ判任官ハ毎月十五日ヨリ五日以内ト定ム

○非職官吏俸給支給期日指定

二十二年五月二十日
大藏省訓令第三十五號

本年三月關令第八號本文ニヨリ其廳ニ於テ下渡スル非職俸給支給日ハ自今明治二十年三月當省令第五號但書ニ據ラス俸給支給細則中指定ノ期日ニ據ルヘシ

○非職官吏年限滿期届出

二十年一月二十四日
大藏省訓令第四號 廳府縣

第二類 第二章 非職

非職官吏ハ年限満期ノ日ニ於テ本官自ラ消滅スヘキ筈ニ付其満期本官消滅ノ者ハ十九年
閣令第一號第二條ニ照準シ其旨當省ヘ届出ヘシ

○公吏ニシテ給料ヲ受クル非職官吏ハ俸給ヲ支給セス 二十三年八月七日
勅令第百六十一號

御名 御璽

勅令第百六十一號

非職官吏ニシテ府縣郡市町村及公共組合ノ吏員トナリ其給料ヲ受クル者ハ官吏非職條例
第五條ノ俸給ヲ支給セス

○技術官ノ休職免職非職條例 二十三年十二月二十六日
勅令第百八十六號

朕技術官ノ休職ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第百八十六號

第一條 技術官ノ休職ハ一年ヲ一期トス期滿レハ其官ヲ免ス

第二條 技術官ノ休職ニ關シ特別ノ規定ナキモノハ總テ官吏非職ノ例ニ依ル

第三條 本令ハ明治二十四年二月一日ヨリ施行ス現ニ休職中ノ者ノ休職期限モ亦同日ヨ
リ起算ス

○裁判官檢察官裁判所書記ノ官名及裁判官休職ノ件 二十三年十月十八日
勅令第百五十四號

朕裁判官檢察官裁判所書記ノ官名及裁判官休職ニ係ル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第百五十四號

第一條 裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官檢察官及裁判所書記ハ同法ニ定メタル判事
檢事及裁判所書記トス

第二條 裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官ニシテ同法ニ依リ更ニ補職セラレサル者ハ
休職トス

第三條 判事十五年以上奉職ノ者裁判所構成法實施後疾病其他ノ事故ニ因リ職務ヲ執ル
コト能ハサルニ至リ休職ヲ願出タルトキハ司法大臣ハ休職ヲ命スルコトヲ得但檢事ヨ
リ判事ニ轉任シタル者ハ檢事ノ勤務年數ヲ通算ス

第四條 休職中ノ俸給ハ現俸三分ノ一ヲ支給ス

第五條 休職判事ノ俸給支給ノ方法ニ付テハ一般非職官吏ノ例ニ依ル

○陸海軍軍人現役定限年齢 二十三年六月二十日
勅令第百九十九號

朕陸海軍軍人現役定限年齢ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第百九十九號

第一條 陸海軍軍人左ニ掲クル定限ノ年齢ニ達スルトキハ現役ヲ退クヘシ

第二類 第二章 非職

陸軍

中將	定限年齡	七十年
少將 監督長	同	六十五年
軍醫總監	同	六十年
一等監督 軍醫監	同	五十七年
憲兵屯田兵大中佐	同	五十四年
二三等監督 一二等軍醫正	同	五十四年
藥劑監 獸醫監	同	五十四年
步騎砲工輜重兵大中佐	同	五十四年
憲兵屯田兵少佐 監督補	同	五十四年
一等軍吏 一等軍醫	同	五十四年
一等藥劑官 一等獸醫	同	五十四年
步騎砲工輜重兵少佐	同	五十四年
憲兵屯田兵大尉	同	五十四年
二等軍吏 二等軍醫	同	五十四年
二等藥劑官 二等獸醫	同	五十四年
一等軍樂長 砲工兵上等監護	同	五十四年

步騎砲工輜重兵大尉	同	四十八年
憲兵屯田兵中少尉 二等軍吏	同	四十八年
三等軍醫 三等藥劑官	同	四十八年
二等獸醫 二等軍樂長	同	四十八年
砲工兵監護 諸工長	同	四十八年
諸工下長	同	四十八年
步騎砲工輜重兵中少尉	同	四十五年
憲兵屯田兵下士 軍吏部下士	同	四十五年
衛生部下士 軍樂部下士	同	四十五年
步騎砲工輜重兵下士	同	四十五年
憲兵屯田兵卒 看護手	同	四十五年
樂手補 雜卒 諸卒	同	四十五年
步騎砲工輜重兵卒	同	三十五年
海軍	同	三十五年

中將	定限年齡	六十五年
少將 機技總監	同	六十五年
軍醫總監 主計總監	同	六十年

第二類 第二章 非職

大佐	機關大監	大技監	同	五十五年
軍醫大監	主計大監	少佐	機關少監	同
少技監	軍醫少監	藥劑監	主計少監	同
上等兵曹	軍樂師	機關師	上等技工	同
船匠師	大尉	大機關士	大技士	同
	大軍醫	大藥劑官	大主計	同
	少尉	少機關士	少技士	同
	少軍醫	少藥劑官	少主計	同
	少主計	卒		同

第二條 陸海軍軍人定限ノ年齢ニ達スルモ他人ヲ以テ代フヘカラサル職ニ在ルトキハ留

任ヲ命スルコトアルヘシ

第三條 陸海軍軍人定限ノ年齢ニ達セサルモ現役「一年以上」ニシテ現役ニ堪ヘサルトキハ將官ハ上諭ニ依リ上長官士官ハ陸海軍大臣准士官ハ所管長官旨ヲ諭シテ現役ヲ退カシムルコトアルヘシ

○海軍武官待命休職條例二十四年七月二十三日
海軍省達第四百四十六號

海軍武官待命休職條例

- 第一條 將官並ニ相當官ノ待命及休職者ハ直ニ海軍大臣ニ隸シ上長官以下ノ待命及休職者ハ第一局長ノ所轄トス
- 第二條 待命及休職者ハ東京府下ニ住居スルモノトス但休職者ハ海軍大臣ノ許可ヲ受ケ鎮守府所在ノ地ニ住居スルコトヲ得
- 第三條 待命及休職者ノ旅行其他住所届出手續等ハ一般ノ定規ニ依ルヘシ
- 第四條 待命及休職者傷痍疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘ難キトキハ醫員ノ診斷書ヲ添ヘ速ニ届出ツヘシ
- 第五條 本條例ハ停職者ニ適用ス

本規則全書附錄官制部終

日本規則全書附錄官制部追錄

○大阪製煉所職制 二十四年九月十日
宮内省達甲第二號

御料局生野支廳附屬大阪製煉所職制左ノ通相定ム

奉 勅

大阪製煉所職制

第一條 大阪製煉所ハ御料局生野支廳長ノ監督ニ屬シ鑛物製煉ノ業務ヲ掌理ス

第二條 大阪製煉所ニ所長ヲ置キ左ノ職員ヲ在勤セシム

技師

技師試補

屬

技手

技手補

第三條 大阪製煉所長ハ技師ノ内ヲ以テ之ニ充テ該所ノ業務ヲ總理ス

第四條 所長ハ便宜備員ヲ置クコトヲ得

第五條 所長ハ便宜課ヲ置キ業務ノ分掌ヲ命スルコトヲ得

第六條 技師ハ所長ノ指揮ニ依リ各其業務ニ從事ス

第七條 技師試補ハ所長及技師ノ指揮ニ依リ業務ニ從事ス

追錄

第八條 屬ハ上司ノ命ニ依リ庶務計算ノ事務ニ從事ス
第九條 技手技手補ハ上司ノ命ニ依リ各其業務ニ從事ス

○府縣參事會ノ職務ニ關スル件 二十四年九月二十九日 勅令第九十六號

朕府縣參事會ノ職務ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第九十六號

第一條 土地收用法第二十九條土地收用審査委員ノ事務ハ府縣制ヲ施行シタル府縣ニ於

テハ府縣參事會之ヲ行フヘシ

第二條 所得稅法第二十條及第二十一條府縣常置委員會ノ事務ハ府縣制ヲ施行シタル府

縣ニ於テハ府縣參事會之ヲ行フヘシ

○郡長ニ特別年俸ヲ支給スヘキ各郡指定 二十三年十一月一日 內務省告示第三十九號

明治二十三年十月^十勅令第二百二十六號地方官々等俸給令第四條第八條ニ依リ左ノ郡ヲ指定

東京府 東多摩郡南豐島郡

荏原郡 北豐島郡

京都府 天田郡 紀伊郡 加佐郡

與謝郡

大阪府 西成郡 南郡日根郡 石川郡八上郡古市郡安宿郡那錦郡那志紀郡丹南郡

神奈川縣 南多摩郡 三浦郡 足柄下郡

兵庫縣 明石郡 津名郡 城崎郡美含郡

長崎縣 西彼杵郡 南高來郡 北松浦郡

新潟縣 中頸城郡 北蒲原郡 古志郡 雜太郡加茂郡羽茂郡

埼玉縣 北足立郡新座郡 入間郡高麗郡 秩父郡

群馬縣 東群馬郡南勢多郡 西群馬郡片岡郡

千葉縣 千葉郡市原郡 印旛郡下埴生郡南相馬郡

海上郡匝瑳郡 安房郡平郡朝夷郡長狹郡

追録

茨城縣

新治郡

眞壁郡

栃木縣

河內郡

下都賀郡

奈良縣

添上郡添下郡山邊郡廣瀨郡平群郡

宇智郡吉野郡

三重縣

度會郡

三重郡朝明郡

桑名郡

阿拜郡山田郡

愛知縣

渥美郡

額田郡

知多郡

愛知郡

静岡縣

長上郡敷知郡濱名郡

賀茂郡那賀郡

有渡郡安倍郡

駿東郡

山梨縣

中巨摩郡

南都留郡

滋賀縣

滋賀郡

犬上郡

岐阜縣

大野郡益田郡吉城郡

安八郡

長野縣

東筑摩郡

上水内郡

小縣郡

下伊那郡

宮城縣

牡鹿郡

志田郡玉造郡

柴田郡刈田郡

宮城郡

福島縣

伊達郡

信夫郡

北會津郡

菊多郡磐前郡磐城郡

巖手縣

西磐井郡東磐井郡

東閉伊郡中閉伊郡北閉伊郡

南九戸郡北九戸郡

青森縣

東津輕郡

三戸郡

山形縣

飽海郡

西田川郡

南村山郡

秋田縣

南秋田郡

仙北郡

北秋田郡

福井縣

坂井郡

南條郡今立郡

遠敷郡

追録

石川縣

鹿島郡

能美郡

鳳至郡

富山縣

射水郡

礪波郡

上新川郡

鳥取縣

會見郡汗入郡

久米郡河村郡八橋郡

島根縣

那賀郡

島根郡秋鹿郡意宇郡

岡山縣

西北條郡東南條郡

淺口郡

兒島郡

廣島縣

安藝郡

御調郡世羅郡

深津郡沼隈郡安那郡

佐伯郡

山口縣

吉敷郡

阿武郡三島郡

玖珂郡

和歌山縣

名草郡海部郡

西牟婁郡

德島縣

那賀郡

板野郡

香川縣

那珂郡多度郡

大内郡寒川郡三木郡

愛媛縣

南宇和郡北宇和郡

風早郡和氣郡温泉郡久米郡

越智郡野間郡

高知縣

幡多郡

高岡郡

土佐郡

福岡縣

企救郡

三潯郡

遠賀郡

大分縣

大分郡

下毛郡

日田郡

佐賀縣

東松浦郡

佐賀郡

熊本縣

飽田郡託摩郡宇土郡

天草郡

玉名郡

宮崎縣

宮崎郡北那珂郡

東臼杵郡

北諸縣郡

追録

鹿兒島縣

鹿兒島郡 谿山郡 北大隅郡

高城郡 薩摩郡 甑島郡 南伊佐郡

始良郡 桑原郡 西嶮吹郡

○郡長ニ特別年俸ヲ支給スヘキ各郡指定追加

明治二十四年七月七勅令第百二十號第四條ニ依リ從前指定ノ外仍ホ左ノ郡ヲ指定ス

神奈川縣

橘樹郡

兵庫縣

武庫郡 菟原郡

氷上郡

群馬縣

佐位郡 那波郡

茨城縣

久慈郡

山梨縣

北巨摩郡

滋賀縣

坂田郡 東淺井郡

福井縣

敦賀郡

鳥取縣

邑美郡 法美郡 岩井郡

島根縣

出雲郡 楯縫郡 神門郡

岡山縣

小田郡

山口縣

豐浦郡

和歌山縣

那賀郡

德島縣

美馬郡

愛媛縣

新居郡 周布郡 桑村郡

福岡縣

上妻郡 下妻郡

追録

大分縣

直入郡

佐賀縣

杵島郡

○砲兵方面條例

二十三年八月十四日
勅令第七十一號

朕砲兵方面條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十一號

砲兵方面條例

第一條 砲兵方面ハ要塞ノ備砲及陸軍所要兵器彈藥ノ購賣貯藏保存修理及支給分配ノ事ヲ掌ル所トス

第二條 砲兵方面ハ第一方面第二方面第三方面トス第一方面ハ本署ヲ東京ニ置キ第一第二師管及北海道ヲ管轄シ第二方面ハ本署ヲ大阪ニ置キ第三第四師管ヲ管轄シ第三方面ハ本署ヲ下ノ關ニ置キ第五第六師管ヲ管轄ス

第三條 師團司令部要塞司令部所在ノ地ニ砲兵方面支署ヲ置キ支署ノ附近ニアラサル旅團司令部所在ノ地ニ武庫ヲ置ク武庫ハ支署ノ管轄トス
前項ノ外樞要ナル衛戍地ニハ支署又ハ武庫ヲ置クコトアルヘシ其設置ハ陸軍大臣之ヲ

定ム

第四條 砲兵方面ニ左ノ職員ヲ置ク

本署

提理

砲兵大中佐

一人

副提理

砲兵少佐

一人

署員

砲兵大中尉

二人

軍吏(二十四年九月十四日勅令第九十三號ヲ以テ(二三等)軍吏トアルヲ單ニ軍吏ト改正ス)

一人

支署

支署長

砲兵少佐或ハ砲兵大尉

一人

署員

砲兵大中尉

一人

第五條 前條ノ外本署支署ニ砲兵上等監護砲兵科下士及軍吏部下士若干ヲ置キ武庫ニ砲兵科下士若干ヲ置ク其人員ノ區分配置ハ陸軍大臣之ヲ定ム

第六條 第二條第二項ニ掲ル支署ニ在テハ衛戍地ノ位置ニ依リ署長ハ大中尉ヲ以テ之ニ充テ署員ハ置カサルコトアルヘシ又支署及武庫附下士ニ在テハ該衛戍隊附下士ヲシテ其業務ヲ兼テシムルコトヲ得

第七條 提理ハ陸軍大臣ニ隸シ方面ノ事務ヲ總理シ管掌ノ事務ニ於テハ其實ニ任シ且管内要塞ノ防務ニ參與ス

追録

提理ハ毎年一回管内ヲ巡回シ要塞ノ備砲竝ニ諸隊ノ兵器彈藥ヲ検査シ修理保存ノ良否及其存廢ノ景況ヲ陸軍大臣ニ具申スヘシ

第八條 副提理ハ提理ヲ補佐シ方面ノ事務ヲ整理ス

第九條 支署長ハ提理ニ屬シ砲兵方面ノ事務ヲ分擔シ兵器彈藥ノ受授修理交換ノ事ヲ掌リ兼テ所在地ノ砲兵工廠派出所ノ事業ヲ管掌ス

要塞所在地ニ在テハ要塞司令官ノ命ヲ受ケ其防務ニ參與シ砲兵諸般ノ勤務ニ服ス

本署所在地ノ支署長ハ方面副提理之ヲ兼ヌルモノトス

第十條 支署長ハ兵器彈藥ノ支給修理交換ニ就テハ近衛都督師團長要塞司令官及所在地衛戍司令官ノ命ヲ受ケ之ヲ行フヘシ

但兵器ノ修理ニ止ルモノハ直ニ各隊長ノ請求ニ應シテ之ヲ行フコトヲ得

第十一條 本署署員軍吏以下ハ提理ノ命ヲ受ケ支署署員以下ハ支署長ノ命ヲ受ケ各事務ヲ分掌ス

第十二條 武庫附下士ハ支署長ノ統轄ニ屬スト雖トモ其職務ニ就テハ尙ホ所在地衛戍司令官ノ監督ヲ受ルモノトス

第十三條 砲兵方面所管ノ兵器彈藥ハ陸軍大臣所定ノ數量ニ基キ之ヲ分テ本須及第一第二支須トス

第十四條 本須ハ本署ニ直轄シテ方面ノ庫内ニ貯藏シ第一支須ハ支署ニ貯藏シテ第二支

須ノ補充ニ備ヘ第二支須ハ支署ニ配備シテ出師準備及演習用ニ供スルモノトス

第十五條 武庫ハ第二支須内ニ於テ專ラ後備諸隊所用ノ兵器彈藥ヲ保管スル所トス

前項ノ外特ニ武庫ノ保管ヲ要スルモノハ陸軍大臣之ヲ定ム

第十六條 凡テ兵器彈藥ハ陸軍大臣ノ許可ヲ經ルニアラサレハ本須ヨリ支須ニ移シ又ハ各方面相互交換スルコトヲ得ス

第十七條 所在兵器彈藥庫ニハ砲兵監護又ハ定番人ヲ置キ尙ホ交番守兵ヲ置クヘシ其守兵ヲ置クト否トハ場地ノ便宜ヲ圖リ提理ノ上申ニ依リ陸軍大臣之ヲ定ム但交番守兵ヲ置クトキハ監護又ハ定番人ヲ置カサルコトヲ得

第十八條 各堡壘及砲臺内ノ兵器彈藥ハ砲臺監守ヲシテ之ヲ監守セシム

第十九條 兵器彈藥庫附近ノ地ニ騷擾警戒ノ事アレハ提理又ハ支署長ヨリ該地衛戍若クハ要塞ノ司令官ニ牒告シ守衛ヲ嚴ニスヘシ

附則

第二十條 第二方面本署ハ追テ設置スルモノトス但之ヲ設置スルトキハ陸軍大臣之ヲ告示スヘシ

第二十一條 第三方面本署設置ニ至ルマテ第一第二第三師管及北海道ヲ第一方面ノ管轄トシ第四第五第六師管ヲ第二方面ノ管轄トス

第二十二條 明治二十一年勅令第三十號衛戍條例ニ基クル衛戍武庫及職官表ハ本令施行